

- 一 汽關車客車貨車及其附屬品
- 二 軌鐵及其附屬品
- 三 橋梁用鐵材
- 四 軌道用木材

前各項ノ貨物ハ臺灣鐵道會社又ハ其代理者ニ於テ直接輸入スルモノニ限ル

第二條 輸入税免除ヲ受ケタル貨物ヲ轉賣讓與若ハ他ノ物品ト交換セントスルトキハ臺灣鐵道會社ハ臺灣總督ノ證明ヲ受ケ輸入港税關ニ輸入カヲ納ムヘシ但會社ニ於テ之ヲ供用シタル後其使用ニ堪ヘサルニ至リ臺灣總督ノ認許ヲ受ケ不用物品トシテ轉賣讓與又ハ交換スルモノハ此限ニアラス

第三條 輸入税免除ヲ受クヘキ貨物ノ數量ハ臺灣鐵道會社ニ於テ豫メ限定シ臺灣總督ノ認許ヲ受クヘシ

第四條 臺灣鐵道會社ハ帳簿ヲ設ケ輸入税免除ヲ受ケテ陸揚シタル貨物ノ出納ヲ明ニスヘシ帳簿ノ様式ハ臺灣總督之ヲ定ム

第五條 第二條ノ規定ニ背キ輸入税ヲ納メヌ又ハ臺灣總督ノ認許ヲ受ケスシテ轉賣讓與又ハ交換ヲ爲シタルトキハ輸入税額ニ倍ノ罰金ニ處ス

第六條 本令ノ有效期限ハ本令發布ノ日ヨリ五箇年間トス

○臺灣租稅滯納處分規則 明治三十一年六月 法律第五號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣租稅滯納處分規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

二十一年府令
第二十八號ヲ以テ本規則ヲ施行細則ヲ定ム

臺灣租稅滯納處分規則

第一條 租稅(關稅ヲ除ク)ノ納期限ヲ過キ完納セサル者アルトキハ其財產ヲ差押ヘ賣却シテ之ヲ徵收ス但買受望人ナキトキハ政府ニ買上ケ其代金ヨリ滯納金額ヲ徵收ス

前項ノ場合ニ於テ其差押フヘキ財產ノ價格滯納金額ニ充タサルモノト認ムルトキハ差押ヲ爲ササルコトヲ得

第二條 財產ヲ差押ヘ未タ賣却セサル以前ニ滯納者若ハ第三者ニ於テ滯納金額ヲ完納シタルトキハ其差押ヲ解クヘシ

第三條 滯納者ノ納付義務ハ此規則處分ノ終了ヲ以テ終ル

第一條第二項ニ依リ差押ヲ爲ササルトキ亦同シ

第四條 滯納處分ヲ爲スニ當リ納付義務ノ確定シタル者ハ未タ納期ニ至ラサルモ滯納金額ト共ニ之ヲ徵收スルコトヲ得但繼續義務ハ次ノ納期ニ納ムヘキ金額ニ限ル

第五條 滯納金額ノ徵收ハ他ノ債權ニ先ツモノトス

納人他ノ債務ノ關係ニ因リ強制執行若ハ破産ノ宣告ヲ受ケ又ハ此規則ノ處分ヲ受クルトキ前條ニ依リ納期ニ至ラサル金額ヲ徵收スル場合ニ於テモ亦同シ

前二項ノ場合ニ於テ質權又ハ抵當權ノ設定カ納期限ヨリ一箇年前ニアルトキハ該物件ノ價格ヲ限
リトシ先取セサルモノトス

第六條 當該官吏財產差押ノ爲滞納者ノ家屋倉庫其他ノ場所ニ立入ルトキハ地方長官ノ發シタル差
押官吏タルノ證券ヲ携帶スルモノトス

第七條 債權差押ノ通知ヲ受ケタル債務者ハ當該官吏ニ對シテ其債務ヲ履行スルノ義務ヲ有ス其義
務ノ消滅セサル前ニ滞納者ニ爲シタル履行ハ無効トス

第八條 差押物件ノ保管ヲ命セラレタル者ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス但保管ノ費用ハ滞納者ノ負擔トス

第九條 滞納者ノ財產ヲ差押フルニ當リ質權設定ノ物件アルトキハ其質權者ハ質物ヲ當該官吏ニ引
渡スヘシ

第十條 滞納處分ハ裁判上ノ假差押ノ爲ニ其執行ヲ妨ケラル、コトナシ

第十一條 左ニ掲クル物件ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

- 一 滞納者及其同居家族ノ生活上缺クヘカラサル衣服、寢具、家具及厨具
- 二 滞納者及リ同居家族ニ必要ナル一箇月間ノ食料及薪炭
- 三 實印其他職業ニ必要ナル印
- 四 祭祀禮拜ニ必要ナル認ムル物及石碁、墓地
- 五 系譜其他滞納者ノ家ニ必要ナル日記書付類
- 六 身分及職務上必要ナル制服、祭服、法衣

七 勳章其他名譽ノ章票

八 滞納者及其同居家族ノ修學上必要ナル書籍、器具

九 發明又ハ著作ニ係ル物ニシテ未タ公ニセサルモノ

第十二條 滞納處分ニ對シ財產ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ契約ヲ爲シタル者ハ一月以上二年以下ノ重
禁錮又ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

差押物件ノ保管者其保管ニ係ル物件ヲ藏匿脱漏費消若ハ故意ニ毀損シタルトキ亦同シ
情ヲ知テ前二項ノ所爲ヲ幫助シ又ハ虛偽ノ契約ヲ承諾シタル者ハ各本刑ニ一等ヲ減ス

附則

第十三條 此規則ハ當分官租ニモ適用ス

第十四條 明治二十八年九月令第十號中罰則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス



○臺灣地方稅規則(明治三十一年七月
律令第十七號)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣地方稅規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣地方稅規則

第一條 臺灣地方稅ハ左ノ種目ニ從ヒ賦課徵収ス

一 地租附加稅

- 二 家税
- 三 營業稅
- 四 雜種稅
 - 營業稅及雜種稅ノ種類ハ臺灣總督之ヲ定ム
- 第二條 地方長官ハ地方ノ情況ニ依リ臺灣總督ノ認可ヲ經テ第一條ノ稅目中ノ一部ヲ賦課セサルコトヲ得
- 第三條 地租附加稅ハ地租ニ附加シ家稅ハ家屋所有者ヨリ徵收ス
- 第四條 地租附加稅ハ地租三分ノ二ヲ超過スルコトヲ得ス
- 第五條 地方長官ハ營業稅又ハ雜種稅ノ賦課額調査ノ爲調査委員ヲ設クルコトヲ得
- 第六條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費目左ノ如シ
 - 一 辨務署費
 - 二 街庄社等役場費
 - 三 警察費
 - 四 土木費
 - 五 教育費
 - 六 衛生費
 - 七 勸業費

- 八 教育費
- 九 廳舍營繕費
- 十 地方稅取扱費
- 第七條 前條ノ費目ハ必要ニ應シ國庫ニ於テ其幾分ヲ補助スルコトアルヘシ
- 第八條 土木教育衛生其他ノ事業ニシテ地方ニ依リ利益ニ厚薄アルモノニ付テハ其程度ニ應シ稅率ヲ定メテ地方稅ヲ賦課シ又ハ特ニ夫役現品ヲ賦課スルコトヲ得但學藝美術手工ニ關スル勞役ヲ賦課スルコトヲ得ス
- 夫役ヲ賦課セラレタル者ハ其便宜ニ從ヒ金員ヲ以テ之ニ換フルコトヲ得
- 第九條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニ關シ密附スル金穀物件ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ密附者ノ指定シタル費途又ハ使用ニ充ツヘシ
- 第十條 地方長官ハ毎年度地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及地方稅收入ノ豫算ヲ定メ前年度一月三十一日限リ臺灣總督ニ具申シ認可ヲ受クヘシ
- 豫算外ニ生シタル必要ノ費用ハ收支豫算ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ經テ特ニ其費用ヲ賦課徵收スルコトヲ得
- 第十一條 地方稅ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ數年ヲ期シテ執行スヘキモノハ豫メ其年期間各年度ノ支出額ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ經テ繼續費ト爲スコトヲ得
- 第十二條 一年度内ニ終ルヘキ地方稅支辨ノ工事又ハ製造ニシテ避クヘカラサル事故ノ爲ニ事業遲

第三十一年府令
第六十一號
以テ臺灣總督府
賦課徵收ニ關スル
地方稅ノ賦課徵收
ニ關スル
第三十一年府令
第六十二號
以テ臺灣總督府
賦課徵收ニ關スル
地方稅ノ賦課徵收
ニ關スル

延シ年度内ニ終ラサルモノハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ之ヲ翌年度ニ繰越使用スルコトヲ得
第十三條 地方長官ハ毎會計年度出納ノ計算書ヲ調製シ翌年七月三十一日限リ臺灣總督ニ提出シ其
檢査ヲ經ヘシ

第十四條 地方稅ノ會計年度ハ臺灣總督府特別會計ノ年度ニ依ル

第十五條 此規則ニ定ムルモノノ外地方稅ノ賦課徵收ニ關スル規程其他此規則施行ノ爲必要ナル規
程ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第十六條 此規則ハ明治三十一年十月一日ヨリ各地方ノ情況ニ依リ漸次之ヲ施行ス

第十七條 第十條第一項ノ期限ハ明治三十一年度ニ在テハ臺灣總督之ヲ指定ス

○

○臺灣食鹽專賣規則(明治三十二年四月
律令第七號)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣食鹽專賣規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

第三十二年府令
第三十二號
以テ細則ヲ定ム

臺灣食鹽專賣規則

第一條 此規則ニ於テ食鹽ト稱スルハ粗製食鹽ヲ謂フ(三十二年律令第二十
八號ヲ以テ條中刪除)

第二條 食鹽ハ政府之ヲ收納シ又ハ輸入シ定價ヲ以テ專賣ス(三十二年律令第二十
八號ヲ以テ改正)
政府ヨリ賣渡シタル食鹽ニアラサレハ賣渡讓渡又ハ消費スルコトヲ得ス

第三條 食鹽ヲ製造シタル者ハ其食鹽ヲ政府ニ納付スヘシ(三十二年律令第二十
八號ヲ以テ條中刪除)

第四條 食鹽ヲ製造シタル者之ヲ政府ニ納付シタルトキハ賠償金ヲ交付スヘシ(全)
賠償金ハ臺灣總督之ヲ定メ豫メ告示ス

第五條 (三十二年律令第二十
八號ヲ以テ刪除)

第六條 食鹽製造者ハ毎年製造見込高ヲ届出ツヘシ其期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

食鹽製造者ノ變更ハ其繼承者ヨリ之ヲ届出ツヘシ

第七條 鹽埤及良鹽ノ貯藏所其他所在ノ場所ハ當該官吏若ハ吏員ヲシテ檢査セシムルコトアルヘシ

第八條 (三十二年律令第二十
八號ヲ以テ刪除)

第九條 第二條第二項及第二條ハニニ違背シタル者ハ十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス但其犯罪ニ係
ル食鹽ノ現存スルトキハ何人ノ所有タルヲ問ハス政府ニ之ヲ收納シ第四條ノ賠償金ヲ交付ス(三十
二年律令第二十八號
ヲ以テ條中改正)

第十條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用非ス

第十一條 食鹽製造者ハ其代理人家族同居者雇人ニシテ其業務ニ關シ此規則ヲ犯シタルトキハ自己
ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルヲ得ス(三十二年律令第二十
八號ヲ以テ條中刪除)

第十二條 此規則ノ施行ニ關シ必要ナル規程及施行ノ期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三十二年府令
第三十四號
以テ同年五月
十五日ヨリ施行

附則

第十三條 此規則施行以前ヨリ持越シタル食鹽ニ對シテモ仍此規則ヲ適用ス但自家用ノ食鹽ハ此限ニアラス(三十二年律令第十)七號ヲ以テ改正)

○臺灣樟腦及樟腦油專賣規則(明治三十二年六月) 律令第十五號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣樟腦及樟腦油專賣規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣樟腦油專賣規則

第一條 此規則ニ於テ樟腦ト稱スルハ本島產粗製樟腦ヲ謂ヒ樟腦油ト稱スルハ粗製樟腦ヲ製造スルニ際シ副生スル樟腦油ヲ謂フ

第二條 樟腦及樟腦油ハ其製造者ヨリ政府ニ收納シ之ヲ專賣ス

政府ヨリ賣渡シタル樟腦及樟腦油ニアラサレハ所有所持讓渡賣入若ハ消費シ又ハ本島外ニ搬出スルコトヲ得ス

第三條 政府ハ收納シタル樟腦及樟腦油ニ對シ賠償金ヲ交付ス

賠償金額ハ臺灣總督之ヲ定ム

第四條 樟腦及樟腦油ハ臺灣總督ノ指定シタル港灣ニアラサレハ之ヲ本島外ニ搬出スルコトヲ得ス

三十二年府令第五十六號ヲ以テ本規則ノ施行細則ヲ定ム

第五條 樟腦及樟腦油製造者ハ毎年其製造見込高ヲ届出ツハシ

第六條 樟腦及樟腦油ハ總テ定價ヲ以テ賣渡ス但必要ト認ムル場合ハ競爭ニ付スルコトヲ得

第七條 樟腦及樟腦油ノ製造場貯藏場其他所在ト認ムル場所ハ當該官吏ヲシテ臨檢セシメ且監督上必要ナル所置ヲ爲サシムルコトヲ得

第八條 第二條第二項及第四條ニ違背シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ其犯罪ニ係ル樟腦及樟腦油ハ何人ノ所有タルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第九條 第七條ノ場合ニ於テ當該官吏ノ職務執行ヲ拒ミ又ハ之ヲ忌避シ又ハ之ニ支障ヲ加ヘタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス但刑法ニ正條アルモノハ其規定ニ依ル

第十條 政府ニ對シ又ハ當該官吏ノ尋問ニ對シ事實ノ申告ヲ詐リ又ハ之ヲ怠リタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 樟腦及樟腦油業者樟腦又ハ樟腦油ニ他物ヲ混和シタルトキハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其樟腦及樟腦油ハ何人ノ所有タルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第十二條 此規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用非ス

第十三條 樟腦及樟腦油業者ハ其代理人家族同居者雇人ニシテ其業務ニ關シ此規則ヲ犯シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其責ヲ免ルルコトヲ得ス

附則

第三十二年府令
第十九號ヲ以テ
同年八月五日ヨリ施行ス

第十四條 此規則ニ定ムルモノノ外必要ナル規定及施行期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十五條 明治二十九年日令第十二號樟腦稅則及明治三十年律令第九號樟腦油稅則ハ此規則施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第十六條 此規則施行以前ニ製造シタル樟腦及樟腦油ニハ此規則ヲ適用セス但納稅未濟ニ係ルモノニハ此規則ヲ適用シ其所有者ヨリ之ヲ收納ス

第十七條 樟腦油ヨリ製造シタル樟腦ハ當分ノ内此規則ニ依ラス

○臺灣ニ於ケル印紙貼用方明治三十二年二月勅令第二十六號

朕臺灣ニ於ケル印紙貼用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣ニ於テ法令ニ依リ貼用スヘキ印紙及納金ニ代ヘテ納ムヘキ印紙ハ自今明治三十一年勅令百四十四號ニ依リ收入印紙ヲ用ルモノトス但シ從來ノ登記印紙及訴訟用印紙ハ當分ノ内收入印紙ニ代ヘ使用スルコトヲ得

收入印紙ヲ以テ納付スルコトヲ得ル手数料ノ種目ハ臺灣總督之ヲ定ム

印紙ノ賣下ニ關スル規則ハ臺灣總督之ヲ定ム

●運輸、通信、船舶

第三十一年府令
第三十五號ヲ以テ
本年八月五日ヨリ施行ス

○臺灣船舶規則明治三十一年五月勅令第四號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣船舶規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣船舶規則

第一條 臺灣ニ住所ヲ有スル帝國臣民ノ所有ニ屬スル船舶ハ帝國船舶トシテ其船籍港ヲ定メ所轄辨務署ノ船籍ニ編入スヘキモノトス

臺灣ニ住所ヲ有セサル帝國臣民又ハ法人ノ所有ニ屬スル船舶ト雖内地ニ於テ船籍ヲ有セスシテ臺灣沿岸ヲ航行シ又ハ臺灣ヲ起點トシ内地若ハ外國ニ航行スルモノハ前項ニ依ル

前二項ノ船舶ニシテ船籍ニ編入セントスルトキハ所轄辨務署ヲ經由シテ地方官廳ニ其積量ノ測度ヲ申請スヘシ

第二條 船籍ニ編入シタル船舶ニシテ登簿噸數十五噸以上ノ西洋形船舶百五十石以上ノ日本形船及支那形船ハ其船籍港ヲ管轄スル地方官廳ヲ經由シテ船籍證書ノ交付ヲ臺灣總督府ニ申請スヘシ但左記ノ船舶ハ船籍證書ノ交付ヲ受クヘキ噸數及石數ニ達スト雖船籍證書ヲ受クルニ及ハス

一 港灣河川ヲ限リ運航スル船舶及倉庫船

二 端舟其他榜櫓ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ榜櫓ヲ以テ運轉スル舟

十五噸未満ノ西洋形船百五十石未満ノ日本形船支那形船及前項但書ニ掲タル船舶ニ在テハ船籍港

ヲ管轄スル地方官廳ニ船鑑札ノ交付ヲ申請スヘシ

第三條 船籍港外ニ於テ船舶ヲ製造シ若ハ之ヲ取得シタルトキハ其船籍港ニ到着スルマテ内國ニ在テハ本船所在地ノ地方官廳ニ外國ニ在テハ本船所在地若ハ其近傍駐在帝國領事館ニ假船籍證書若ハ假船鑑札ノ交付ヲ申請シ船籍證書若ハ船鑑札ニ代用スルコトヲ得

假船籍證書及假船鑑札ノ效力ハ地方官廳ヨリ交付シタルモノハ六箇月領事館ヨリ交付シタルモノハ一箇年ヲ以テ限トス但引續キ再度以上假船籍證書若ハ假船鑑札ノ交付ヲ受ケタル場合ニハ其效力ハ初度ノ假船籍證書若ハ假船鑑札ニ記載シタル日附ヨリ起算シ本文ノ期限ヲ超過スルコトヲ得ス

第四條 船籍證書若ハ船鑑札ヲ受ケサル船舶ハ帝國國旗ヲ掲揚スルコトヲ得ス

第五條 船籍ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ當該官廳ニ船籍ノ訂正ヲ請ヒ且船籍證書若ハ船鑑札ノ書換ヲ申請スヘシ

第六條 船籍證書若ハ船鑑札ヲ喪失シ毀損シ又ハ用フヘカラサルモノトナリタルトキハ當該官廳ニ船籍證書若ハ船鑑札ノ書換若ハ再渡ヲ申請スヘシ

前項ノ場合ニ於テ假船籍證書若ハ假船鑑札ヲ受ケントスルトキハ第三條ニ依リ其申請ヲ爲スコトヲ得

第七條 船籍港ヲ移轉シタルトキハ原籍ヲ削除シ移轉地ノ船籍ニ編入シ且當該官廳ニ船籍證書若ハ船鑑札ノ書換ヲ申請スヘシ

第八條 船舶ノ所有權ヲ他人ニ移轉シ又ハ船舶カ破壊、沈没、喪失、失踪、解撤ニ歸シタルトキハ當該官廳ニ船籍ノ削除ヲ請ヒ且船籍證書若ハ船鑑札ヲ返納スヘシ

第九條 帝國國旗ヲ掲クルコトヲ得サル船舶ニシテ之ヲ掲ケタルトキハ第四條ヲ除ク外其船長ヲ千圓以下ノ罰金ニ處ス不正ノ船籍證書若ハ船鑑札ヲ用ヒタル船舶ハ沒收ス

帝國船舶ニシテ外國ノ國旗ヲ揚ゲテ外國ノ國籍ヲ冒シタルトキハ前項同一ノ罰ニ處ス但戰時ニ於テ敵ヲ避クル場合ハ此限ニアラス

第十條 第四條ノ規定ニ違反シタルトキハ其船長ヲ第五條乃至第八條ノ規定ニ違反シタルトキハ船舶所有者ヲ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 此規則ノ施行ニ關スル細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第十二條 官廳ノ所有ニ屬スル船舶ニ付テモ此規則ヲ適用ス但海軍所屬ノ艦船ハ此限ニアラス

第十三條 從來ノ船舶ハ此規則施行ノ日ヨリ三箇月以内ニ第一條第二條ニ依リ船籍編入並船籍證書若ハ船鑑札ノ交付ヲ申請スヘシ

第十四條 此規則ハ明治三十一年七月一日ヨリ施行ス但明治二十九年九月府令第三十一號臺灣支那形船舶取締規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

○臺灣汽船検査規則(明治三十二年六月 律令第十號)

三十一年府令
第三十五號ヲ
以テ本規則施行
規則ヲ定ム

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣汽船検査規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣汽船検査規則

第三十二年府令
第四十四號
以本規則施行
細則ヲ定ム

- 第一條 臺灣ニ船籍ヲ有スル汽船ハ此規則ニ依リ検査ヲ受クヘシ
- 第二條 汽船検査ノ場所ハ臺灣總督之ヲ定ム
前項指定以外ノ場所ニ於テ検査ヲ受ケントスルトキハ臺灣總督ノ特許ヲ受クヘシ
- 第三條 検査官吏汽船ヲ検査シ航行ニ適當ナリト認ムルトキハ本船ノ航路定限旅客定員汽壓制限航
行期間ヲ定メ臺灣總督ヨリ其所有者若ハ船長ニ汽船検査證書ヲ交付スヘシ
- 第四條 汽船検査ヲ受ケ検査證書ヲ受クル以前ニ汽船ヲ航行ノ用ニ供セントスルトキ其所有者又ハ
船長ヨリ假證書ノ下付ヲ検査官吏ニ申請スルコトヲ得
- 第五條 検査證書ノ效力ハ一箇年以内トス假證書ノ效力ハ本證書ヲ受有スヘキ期間ヲ斟酌シ二箇月
ノ範圍内ニ於テ検査官吏之ヲ定ム
- 第六條 船體汽機汽備其他船舶ノ要部ヲ修理シ又ハ之ヲ變更シタルトキハ其所有者又ハ船長ヨリ事
由ヲ具シ検査ヲ申請スヘシ
- 第七條 検査證書有効期間内ト雖其所有者又ハ船長ニ於テ検査ヲ受ケントスルトキハ何時ニテモ其
申請ヲ爲スコトヲ得
- 第八條 検査官吏ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ何時ニテモ汽船ヲ臨檢スルコトヲ得
- 第九條 第六條第七條第八條ノ場合ニ於テ検査官吏船體汽機汽備等ニ瑕疵アルコトヲ發見シタルト
キハ修理ヲ命シ又ハ航行ヲ停止スルコトヲ得

第十條 検査證書若ハ假證書ヲ受有セスシテ汽船ヲ航行ノ用ニ供シ又ハ検査證書若ハ假證書ニ記載
シタル汽船ノ航路定限航行期間及汽壓制限ヲ超テ航行シタルトキ又ハ航行停止ノ命ニ違反シテ航
行シ若ハ第六條ノ検査ヲ受ケスシテ航行シタルトキハ船長ヲ三十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
旅客定員ヲ超テ航行シタルトキ又ハ第八條ノ臨檢ヲ拒ミタルトキハ船長ヲ十圓以上百圓以下ノ罰
金ニ處ス

第十一條 此規則ニ定ムルモノノ外必要ノ規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

附 則

- 第十二條 此規則ハ明治三十二年十月一日ヨリ之ヲ施行ス
- 第十三條 内地ニ船籍ヲ有スル汽船ニシテ臺灣沿岸ヲ航行シ若ハ臺灣ヲ起點ト爲シ外國ニ航行スル
モノハ此規則ニ依リ検査ヲ受クヘシ但帝國船舶検査法ニ依リ検査證書ヲ受有シ其航行期間内ニ在
ルモノハ此限ニアラス
- 第十四條 從來航行ノ用ニ供スル汽船ハ此規則施行ノ日ヨリ五十日以内ニ検査ヲ受クヘシ

○海上衝突豫防法ヲ臺灣ニ施行方明治二十三年二月
勅令第二十一號

○海上衝突豫防法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
海上衝突豫防法ハ明治三十三年五月一日ヨリ之ヲ臺灣ニ施行ス

○臺灣水難救護規則明治三十三年三月
律令第八號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣水難救護規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣水難救護規則

第一條 遭難船舶ノ救護並漂流物及沈没品ノ拾得ニ關シテハ明治三十二年法律第九十五號水難救護法ニ依ル

第二條 水難救護法中市町村長ノ職務ニ屬スルモノハ辨務署長ヲシテ之ヲ行ハシム

附則

第三條 此規則ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四條 此規則施行ノ際處分中ニ屬スル事件ニ付テハ其處分ヲ終ハルマテ此規則ヲ適用セス

○臺灣ニ於ケル郵便及電信ニ關スル事務監督方明治二十九年三月
勅令第八十六號

朕臺灣ニ於ケル郵便及電信ニ關スル事務監督ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣ニ於ケル郵便及電信ニ關スル事務ハ遞信大臣ノ監督ニ屬セシム

○臺灣總督府非常通信規則明治二十九年七月
律令第三號

臺灣總督ハ茲ニ緊急ノ必要アリト認メ明治二十九年法律第六十三號第三條ニ依リ臺灣總督府非常通信規則ヲ發布ス

第二十九年府令
第二十六號ヲ以テ本規則ヲ施行
細則ヲ定ム

臺灣總督府非常通信規則

第一條 非常通信ハ臺灣總督府管轄區域内ニ於テ非常急變ノ場合ニ際シ其事變發生地ニ通信所ヲ設ケ郵便又ハ電信電話ニ依リ通信スルモノトス

第二條 左ニ記載スル官廳及官吏等ヨリ通信所ニ差出ス郵便物及電報ハ其郵便税及電報料トモ之ヲ免除ス

一 臺灣總督府及總督府所屬官廳並其官吏

二 軍隊軍艦軍衛及軍人軍屬

三 第一項第二項ノ各官廳官吏及軍隊軍艦軍衛並軍人軍屬ニ於テ發信方ヲ特許シタル者

第三條 前條郵便物及電報ハ事變發生地ヨリ臺灣總督府管轄區域内ニ達スルモノニ限ルヘシ

第四條 事變發生地外ヨリ事變發生地ニ送達スヘキ郵便物及電報ハ其郵便税及電報料完納ノモノニ限ルヘシ但郵便税及電報料未納又不足ノ場合ニ於テハ郵便物ハ差出人ニ還付シ其額ノ二倍ヲ徵

收シ電報ハ受信人ニ配達シ其不足額ハ發信人ヨリ之ヲ徵收ス

第五條 此規則ニ明文ナキ事項ハ郵便條例及電信條例ヲ適用ス

●民業

○臺灣鑛業規則明治二十九年九月
律令第六號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣鑛業規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣鑛業規則

第一條 鑛業トハ鑛物ヲ採掘若クハ採取スル事業ヲ云フ建築用土石ハ此規則ニ依ルノ限ニアラス
第二條 鑛業ハ帝國臣民ニ限り之ヲ許可ス帝國臣民ニアラサレハ鑛業ニ關スル組合員又ハ會社ノ社員若ハ株主ト爲ルコトヲ得ス

第三條 鑛業ヲ爲サントスル者ハ鑛區ヲ定メ地方廳ヲ經由シ臺灣總督ノ許可ヲ受クヘシ
鑛區測定ノ爲技術官ノ派遣ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テハ旅費及測量費ヲ負擔セシムルコトアルヘシ

鑛業ニ關シ出願又ハ請求ヲ爲ス者ハ手数料ヲ納ムヘシ其金額ハ臺灣總督之ヲ定ム
第四條 臺灣總督ハ鑛產地ノ狀況ニ依リ鑛區ノ區劃ヲ制限スルコトヲ得

第五條 鑛業ヲ出願スル者同一ノ地ニ付二人以上アルトキハ臺灣總督ニ於テ適當ト認ムル者ニ許可ス

第六條 出願ノ鑛區廣キニ過キ若ハ其境界線互ニ交錯シ又ハ鑛利ヲ損スルトキハ臺灣總督ハ期日ヲ定メテ之ヲ訂正セシムヘシ

第七條 政府ニ於テ必要ト認ムル場所ナルトキハ其出願ヲ許可セス

第八條 (三十一年律令第二十號ヲ以テ制除ス)

第九條 (全)

第十條 詐偽ニ依リ得タル鑛業ノ許可ハ無効トス

第十一條 鑛業權ハ之ヲ相續スルコトヲ得

鑛業權ハ臺灣總督ノ許可ヲ得タルニアラサレハ賣買讓與シ又ハ債權ノ擔保ト爲スコトヲ得ス

第十二條 城塞、軍港、要港、火藥製造所、火藥庫及彈藥庫ノ周圍三百間以内ノ場所ハ採掘若ハ鑛業上使用スルコトヲ得ス但軍港、要港ハ其所管長官ノ許可ヲ得タル場合ニ於テハ此限ニアラス

第十三條 鐵道、公道、河川、水道、運河、堤防、溜池、社寺、墓地及建物ヨリ地表地下トモ其周圍三十間以内ノ場所ニ於テ鑛物ヲ採掘セントスルトキハ所轄官廳ノ許可又ハ土地所有者若ハ關係人ノ承諾ヲ經ヘシ

危險ノ虞ナクシテ前項ノ承諾ヲ拒ミタルトキハ鑛業人ハ地方長官ノ判定ヲ請求スルコトヲ得

前項地方長官ノ判定ニ不服アル者ハ其判定ヲ違フ受クタル日ヨリ三十日以内ニ臺灣總督ノ裁定ヲ請求スルコトヲ得

第十四條 鑛業人鑛區ノ合併分割又ハ訂正ヲ爲サントスルトキハ臺灣總督ノ許可ヲ受クヘシ

許可ノ鑛區權利ヲ損シ若ハ誤謬アリト認ムルトキハ臺灣總督ハ期限ヲ定メ其訂正ヲ命スルコトヲ得

第十五條 鑛業人六十日以上休業セントスルトキハ臺灣總督ノ許可ヲ受クヘシ

相當ノ鑛業ヲ爲サス又ハ公益ニ害アリ若ハ危險ノ虞アリト認ムルトキハ臺灣總督ハ其改良ヲ命シ又ハ場合ニ依リ事業ノ停止ヲ命スルコトヲ得

第十六條 左ノ場合ニ於テ臺灣總督ハ鑛業ノ許可ヲ取消スコトヲ得 (三十一年律令第二十二號ヲ以テ各號トモ改正)

一 一箇年以上休業シ又ハ許可ヲ得タル日ヨリ一箇年以内ニ鑛業ニ著手セザルトキ

一 錯誤ニ因リ許可ヲ與ヘタルコトヲ發見シタルトキ
 一 第十四條第三項第十五條第二項ノ命令ニ從ハサルトキ
 一 納稅期限内ニ鑛區稅ヲ納メサルトキ
 第十七條 鑛業ニ關スル臺灣總督ノ處分ニ對シテ損害賠償ヲ要求スルコトヲ許サス
 第十八條 鑛業出願又ハ鑛業ノ爲他人ノ土地ニ立入り測量又ハ調査ヲ必要トスル者ハ地方長官ニ其認可ヲ請求スルコトヲ得
 認可證ヲ携帶スル者ニ對シテハ其土地所有者又ハ關係人之ヲ拒ムコトヲ得ス但測量若ハ調査ノ爲ニ損害ヲ生シタルトキハ請求者之ヲ賠償スヘシ
 第十九條 鑛業人鑛業上必要アルトキハ土地所有者又ハ關係人ニ土地ノ貸渡ヲ強要スルコトヲ得
 貸渡アル土地ノ所有者又ハ關係人ハ相當ノ使用料ヲ請求シ及之ヲ前拂セシムルコトヲ得
 第二十條 土地所有者又ハ關係人ハ測量若ハ調査請求者又ハ鑛業人トノ間ニ於テ土地貸渡借地料損害賠償金又ハ土地賣買代價ニ付協議調ハサルトキハ地方長官ニ其判定ヲ請求スルコトヲ得
 地方長官ノ判定ニ不服アルハ其判定ノ達ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ土地貸渡ニ就テハ臺灣總督ニ其裁定ヲ請求シ借地料損害賠償金若ハ土地賣買代價ニ就テハ地方法院ニ出訴スルコトヲ得
 第二十一條 第十三條第三項及第二十條第三項ノ場合ニ於テハ臺灣總督ノ裁定ニ對シテハ他ニ出訴スルコトヲ得

第三十二條 地方長官ノ判定又ハ臺灣總督ノ裁定請求ニ爲シテ必要ナル費用ハ民事訴訟入費ノ例ニ依リ負擔スヘシ
 第二十三條 鑛業人ハ土地所有者又ハ關係人ニ於テ地方長官ノ判定シタル借地料損害賠償金又ハ土地賣買代價ニ不服アルモ其金額ヲ土地所有者又ハ關係人ニ渡シ若之ヲ受ケサルトキハ其金額ヲ地方官ニ預ケ置キ土地ヲ使用スルコトヲ得
 第二十四條 鑛業ノ許可消滅シ鑛業ノ許可ヲ取消サレ又ハ廢業シタルトキ地方長官ニ於テ坑内保安ノ爲必要ト認ムル構造物之ヲ除去スルコトヲ得ス
 第二十五條 鑛業人ハ鑛區稅トシテ鑛區一千坪迄毎三石炭石油硫磺砂錫砂鐵ハ一箇年金一圓金鐵砂金及其他鑛物ハ一箇年金二圓ヲ納ムヘシ
 鑛區稅ハ一箇年分テ其前年十二月十五日限ニ又初年ニ係ルモノハ月割ヲ以テ鑛業許可ノ日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ既納ノ鑛區稅ハ之ヲ返付セス
 第二十六條 鑛業人ハ毎年一月七月ノ兩度ニ前六箇月間ニ採掘若ハ採取シタル鑛物ノ量數製産物其他販賣商販賣代價日數工數表ヲ作り地方官ニ經由シ臺灣總督ニ届出ツヘシ
 前項ノ届書ハ鑛業ノ許可消滅シ鑛業ノ許可ヲ取消サレ又ハ廢業シ若ハ鑛業權ノ賣買讓與ヲ爲シタル場合ニ於テ三十日以内ニ差出スヘシ

第二十七條 許可ヲ得ヌシテ鑛業ヲ爲シタル者又ハ詐僞ニ依リ鑛業ノ許可ヲ得タル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第十二條及第十三條第一項ヲ犯シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 此規則ヲ犯シタル者ハ刑法ノ再犯加重及數罪俱發ノ例ヲ適用セス

附則

第三十條 臺灣住民ニシテ此規則施行以前ニ許可ヲ受ケタル鑛業人ハ明治三十年五月八日迄ハ此規則ニ依リ引續鑛業ヲ爲スコトヲ得

前項ノ期限ニ際シ帝國臣民ト爲リタル鑛業人ハ此規則ニ依リ許可ヲ得タルモノト見做ス

第三十一條 此規則ノ施行細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三十二條 此規則ハ明治二十九年九月十日ヨリ施行ス

二十九府令
第三十三號
以テ本則ノ施行
細則ヲ定ム

○臺灣樟腦及樟腦油製造規則 明治三十二年六月
臺灣總督府評議會決議決以經タル臺灣樟腦及樟腦油製造規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

三十二年府令
第五十七號
以テ本則ノ施行
細則ヲ定ム

臺灣樟腦及樟腦油製造規則

第一條 樟腦及樟腦油ヲ製造セントスル者ハ政府ノ特許ヲ受クヘシ

第二條 樟腦及樟腦油製造ノ特許ヲ受ケタル者豫定ノ期日內ニ事業ニ著手セス又ハ豫定ノ設計ヲ履行セサルトキハ其特許ヲ取消スコトヲ得

第三條 臺灣總督ハ樟腦及樟腦油製造業ニシテ公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ其製造ヲ停止シ若ハ特許ヲ取消スコトヲ得

第四條 樟腦及樟腦油製造者其特許ヲ取消サレタルトキ又ハ廢業シタルトキハ現存セル樟木ハ之ヲ返還セシム但廢業ノ場合ハ賠償金ヲ交付ス

第五條 政府ノ特許ヲ得ヌシテ樟腦及樟腦油ヲ製造シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ犯罪ニ係ル樟腦及樟腦油ハ何人ノ所有タルヲ問ハス之ヲ沒收ス

第六條 樟腦及樟腦油製造ノ爲政府ヨリ賣渡シタル樟木ヲ他ノ目的ニ使用シ又ハ製造場外ニ搬出シタルトキハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ現存品ハ之ヲ沒收シ其現存セサルモノハ其價ヲ賠償セシム

第七條 樟腦及樟腦油ノ製造ニ關シテハ此規則ニ定ムルモノノ外臺灣樟腦及樟腦油專賣規則第七條

第九條第十條第十二條及第十三條ノ規定ヲ準用ス

附則

第八條 此規則ニ定ムルモノノ外必要ナル規定及施行期日ハ臺灣總督之ヲ定ム
第九條 明治二十八年日令第二十六號官有林野及樟腦製造業取締規則中樟腦製造ニ關スル規定ハ此規則施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第十條 明治二十八年日令第二十六號官有林野及樟腦製造業取締規則及明治二十九年府令第十三號樟腦製造業取締規則ニ依リ樟腦製造ノ認許ヲ受ケタル者ハ此規則施行ノ日ヨリ製腦期限滿了ノ日マテ此規則ニ依リ特許ヲ受ケタル者ト看做ス

○臺灣銀行法 明治三十年四月
法律第三十八號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣銀行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臺灣銀行法

第一條 臺灣銀行ハ株式會社トス
臺灣銀行ハ本店ヲ臺灣ニ設置ス
第二條 臺灣銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ要地ニ支店代理店ヲ設置シ又ハ他ノ銀行ト「コレレスボ

シテンスニテ締約スルコトヲ得

主務大臣ニ於テ支店代理店ヲ必要ナリトスルトキハ銀行ニ命シテ之ヲ設置セシムルコトアルヘシ
第三條 臺灣銀行ノ存立期間ハ設置免許ノ日ヨリ滿二十箇年トス但シ株主總會ノ決議ニ依リ政府ノ許可ヲ受ケタルトキハ其ノ期限ヲ延長スルコトヲ得

第四條 臺灣銀行ノ資本金ハ五百萬圓以上トス
第五條 臺灣銀行ハ左ノ事業ヲ營ムモノトス

- 第一 爲換手形其ノ他商業手形ノ割引
- 第二 爲換及荷爲換
- 第三 平常取引スル諸會社又ハ商人ノ爲手形金ノ取立
- 第四 確實ナル不動産ヲ抵當トシ又ハ動産ヲ質トスル貸付
- 第五 諸預リ金及當坐貸越勘定
- 第六 金銀貨、貴金屬及諸證券ノ保護預リ
- 第七 地金銀ノ賣買
- 第八 他銀行ノ業務代理

右ノ外營業ノ都合ニ由リ國債證券、地方債券又ハ勸業債券、農工債券ヲ買入ルルコトヲ得
第六條 臺灣銀行ハ此ノ法律ニ記載スル事業ノ外他ノ營業ヲ爲スコトヲ得ス
第七條 政府ハ臺灣銀行ヲシテ國庫金ノ取扱ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第八條 臺灣銀行ハ券面金額一圓銀貨一枚以上ノ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

前項ノ銀行券ハ臺灣銀行本店及支店ニ於テ營業時間中何時ニテモ一圓銀貨ト引換フルモノトス
(三十二年法律第三十四號ヲ以テ次項トモ改正)

但シ支店ニ於テハ本店ヨリ準備金ノ到達スヘキ時間其ノ引換ヲ延期スルコトヲ得

第九條 臺灣銀行ハ銀行券發行高ニ對シ同額ノ金銀貨及地金銀ヲ置キ其ノ任拂準備ニ充ツヘシ
(三十二年法律第三十四號ヲ以テ條中改正)

前項準備ニ依レル外銀行券ヲ發行セムトスルトキハ五百萬圓ヲ限度トシ政府發行ノ紙幣、證券、兌換銀行券又ハ其ノ他確實ナル證券若ハ商業手形ヲ保證トシテ之ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ發行額ハ前項準備ニ依レル發行額ニ超過スルコトヲ得ス
(三十二年法律第三十四號ヲ以テ本項中改正)

市場ノ狀況ニ由リ前二項ノ外更ニ銀行券ノ發行ヲ必要トスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ政府發行ノ紙幣、證券、兌換銀行券又ハ確實ナル證券若ハ商業手形ヲ保證トシテ之ヲ發行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ政府ノ定ムル所ニ依リ一箇年百分ノ五ヲ下ラサル割合ヲ以テ發行稅ヲ納ムヘシ
(三十二年法律第三十四號ヲ以テ本項中改正)

第十條 臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券ノ手形ハ臺灣總督府管轄地方内ニ於テハ政府ノ收納ニ充ルコトヲ得
(三十二年法律第三十四號ヲ以テ條中改正)

第十一條 臺灣銀行ハ營業ノ爲必要ナル物件ヲ買入レ又ハ債務辨濟ノ爲引受ケタル物件ヲ所有スルノ外動産、不動産ヲ買取ルコトヲ得ス

第十二條 臺灣銀行ニ頭取副頭取各一人理事四人以上監査役三人以上ヲ置ク

第十三條 頭取、副頭取ハ百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ヲ五箇年トス但シ其ノ任期滿限ノ後再任ヲ命スルコトヲ得

理事ハ五十株以上所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ二倍ノ候補者ヲ選舉シ政府其ノ中ヨリ之ヲ命シ任期ヲ四箇年トス但シ其ノ任期滿限ノ後本條ノ手續ニ依リ再任ヲ命スルコトヲ得

監査役ハ三十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選定シ其ノ任期ヲ三箇年トス但シ其ノ任期滿限ノ後再選スルコトヲ得

理事及監査役ハ選舉ノ六箇月前ヨリ引續キ本條規定ノ株數ヲ所有スル者ニ限ル

第十四條

頭取、副頭取及理事ハ在任中何等ノ名稱ニ拘ハラス他ノ職務又ハ商業ニ從事スルコトヲ得ス

第十五條 頭取ハ臺灣銀行ヲ代表シ其ノ事務ヲ總理ス
副頭取ハ頭取事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ頭取缺員ノトキ其ノ職務ヲ行フ
副頭取及理事ハ頭取ヲ補助シ臺灣銀行ノ業務ヲ分掌ス
監査役ハ臺灣銀行ノ業務ヲ監査ス

第十六條 株主總會ヲ通常臨時ノ二種トス
通常株主總會ハ毎年二回定款ニ定メタル時期ニ於テ頭取之ヲ招集ス
臨時株主總會ハ臨時ノ事項ヲ議スル爲何時ニテモ頭取之ヲ招集スルコトヲ得

監査役又ハ總株金ノ五分ノ一以上ニ當ル株主ハ會議ノ目的ヲ示シテ臨時株主總會ノ招集ヲ頭取ニ
請求スルコトヲ得此場合ニ於テ頭取ハ臨時株主總會ヲ招集スヘシ

第十七條 株主總會ニ於テハ株主ハ議決權ヲ有スル株主ノ外代理ヲ委託スルコトヲ得ス但シ法律上
ノ代理人ハ此ノ限ニアラス

第十八條 主務大臣ハ臺灣銀行監理官ヲ置キ臺灣銀行ノ業務ヲ監視セシム

第十九條 臺灣銀行監理官ハ何時ニテモ臺灣銀行ノ金庫、簿帳及諸般ノ文書ヲ検査スルコトヲ得

臺灣銀行監理官ハ監視上必要ナリト認ムルトキハ何時ニテモ臺灣銀行ニ命シテ營業上諸般ノ計算
及景況ヲ報告セシムルコトヲ得

臺灣銀行監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ議決ノ數ニ加
ハルコトヲ得ス

第二十條 臺灣銀行ハ毎年準備金トシテ資本ノ缺損ヲ補フ爲利益ノ百分ノ八以上ヲ積立テ及利益配
當ノ平均ヲ得セシムル爲利益ノ百分ノ二以上ヲ積立ツベシ

第三十一條 臺灣銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ經ルニ非ケレハ株主ニ配當金ヲ分配ヲ爲スコトヲ得ス

第三十二條 臺灣銀行ハ其ノ定款ヲ變更セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十三條 主務大臣ハ必要ナリト認ムルトキハ臺灣銀行ノ銀行券發行高貸付金額及方法ヲ制限ス
ルコトヲ得(三十二年法律第三十
四號ヲ以テ條中改正)

第二十四條 主務大臣ハ臺灣銀行ノ營業上此ノ法律又ハ定款ニ背反シ若ハ公益ヲ害スル事件アリト

認ムルトキハ之ヲ制止スヘシ

第二十五條 臺灣銀行ハ主務大臣ノ命令ニ從ヒ其ノ營業ニ關スル諸般ノ景況及計算報告書ヲ差出ス

臺灣銀行ハ銀行券ノ發行額及仕拂準備ニ關スル毎週平均高表ヲ新聞紙其ノ他ノ方法ヲ以テ公告

スヘシ(三十二年法律第三十四
號ヲ以テ本項中改正)

第二十六條 臺灣銀行ニ於テ左ノ事犯アルトキハ頭取若ハ頭取ノ職務ヲ行ヒ又ハ代理スル副頭取ヲ
百圓以上千圓以下ノ過料ニ處シ其ノ事犯ニシテ副頭取理事ノ分擔業務ニ係ルトキハ副頭取理事ヲ

過料ニ處スルコト亦同シ(三十二年法律第三十四
號ヲ以テ第二號中改正)

一 第六條ノ規定ニ反シ此ノ法律ニ記載セサル業務ヲ營ミタルトキ

二 第九條ノ規定ニ反シ銀行券ヲ發行シタルトキ

三 第二十條ノ規定ニ反シ準備金ヲ積立テサルトキ

附 則

第二十七條 政府ハ臺灣銀行創立委員ヲ置キ其ノ設立ノ免許ヲ與フルマテ其ノ發起ニ關スル一切ノ
事務ヲ處理セシム

第二十八條 創立委員ハ定款ヲ作り政府ノ認可ヲ得タル後株主ヲ募集ス

第二十九條 創立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込簿ヲ政府ニ差出シ臺灣銀行設立ノ免
許ヲ申請スヘシ

第三十條 創立委員ハ前條ノ免許ヲ得タルトキハ其ノ事務ヲ臺灣銀行頭取ニ引渡スヘシ
第三十一條 設立初度ノ理事及監查役ノ第十三條ニ依リ所有スヘキ株數ノ時期ニ就テハ同條第四項ヲ適用スルノ限ニ在ラス

○臺灣銀行補助法明治三十二年三月法律第三十五號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣銀行補助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣銀行補助法

第一條 政府ハ百萬圓ヲ限度トシ臺灣銀行ノ株式ヲ引受クヘシ

第二條 臺灣銀行ハ其ノ創立初期ヨリ五箇年間ハ前條ノ株式ニ對シ配當スヘキ利益金ヲ欸損補填準備金ニ組入ルヘシ

第三條 前條ノ期限内政府ハ其ノ引受クタル株式ヲ賣却セス

○臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券通用並同銀行券ノ偽造變造及其取受行使ニ關スル律令明治三十三年七月律令第三號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券通用並同銀行券ノ偽造變造及其

取受行使ニ關シ法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布ス

臺灣銀行ヨリ發行スル銀行券ハ租稅其他政府ノ收納金及一切ノ取引ニ差支ナク通用スル者トス

前項銀行券ノ偽造變造及其取受行使ニ關スル犯罪ニ付テハ刑法第二編第四章第一節ノ規定ヲ準用ス

○銀行條例貯蓄銀行條例及銀行合併法明治三十一年九月勅令第二百五號

朕銀行條例貯蓄銀行條例及銀行合併法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年法律第七十二號銀行條例同年法律第七十三號貯蓄銀行條例明治二十九年法律第八十五號銀行合併法ヲ臺灣ニ施行ス

八十五號銀行合併法明治二十九年法律第八十五號ヲ臺灣ニ施行ス

○特許法意匠法及商標法明治三十二年六月勅令第二百九十號

朕特許法意匠法及商標法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

特許法意匠法及商標法明治三十二年七月一日ヨリ臺灣ニ施行ス

●刑事、民事、警察、監獄

第二十八類 特許法意匠法及商標法ヲ臺灣ニ施行

○陸軍刑法海軍刑法ヲ臺灣ニ施行明治三十年四月
勅令第八十五號
朕陸軍刑法海軍刑法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
陸軍刑法及海軍刑法ヲ臺灣ニ施行ス

○刑事事件ノ再審ノ訴及非常上告方明治三十二年八月
律令第二十六號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル刑事事件ノ再審ノ訴及非常上告ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ
發布ス

刑事事件ノ再審ノ訴及非常上告ニ關シテハ覆審法院ヲ以テ上告裁判所トス
上告裁判所ハ覆審法院ノ判決ニ對スル再審ノ訴ニシテ其原由アリト認ムルトキハ原裁判ヲ破毀シ其
事件ノ公訴及私訴ニ付再審ヲ爲スヘキコトヲ言渡シ之ヲ原法院ニ差戻スヘシ

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○臨時法院ノ判決ニ對シテ再審及非常上告方明治三十二年八月
律令第二十七號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府臨時法院ノ判決ニ對スル再審及非常上告ニ關スル律令
勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
臺灣總督府臨時法院ノ判決ニ對シテハ覆審法院ニ再審ノ訴及非常上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テ
ハ再審ノ訴及非常上告ニ關スル上告裁判所ノ訴訟手續ヲ準用ス
覆審法院ハ再審ノ訴ニシテ其原由アリト認ムルトキハ原判決ヲ破毀シ直ニ其事件ノ公訴及私訴ニ付
判決ヲ爲スヘシ

刑罰

○刑事ニ關スル判決ノ正本原本抄本請求ノ手續料明治三十一年三月
臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル刑事ニ關スル判決ノ正本原本又ハ抄本ヲ求ムルトキノ手續料ノ件
勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
刑事ニ關スル判決ノ正本原本又ハ抄本ヲ求ムル者ハ一枚ニ付金三錢ノ手續料ヲ納ムヘシ但無資力ニ
シテ手續料ヲ納ムル能ハサル者ハ法院ニ於テ之ヲ免スルコトヲ得
本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

○刑事訴訟費用規則明治三十一年七月
律令第十一號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル刑事訴訟費用規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
刑事訴訟費用規則

第一條 證人鑑定人通事ニ給與スヘキ日常旅費滞在費及解剖含密等ノ費用ハ明治三十一年律令第十號民事訴訟費用規則第六條乃至第九條及第十一條ノ規定ヲ適用ス

第二條 前條ノ日常旅費滞在費及其他ノ費用ハ豫審ニ於テハ其終結前公判ニ於テハ其判決前ニ本人ヨリ請求スルニアラサレハ之ヲ給與セス

第三條 訴訟費用ハ宣告ヲ受ケ未_レ之_レ納メサル前ニ於テ犯人死亡スルトキハ其相続人ヨリ之ヲ徵收ス

附則

第四條 此規則ハ明治三十一年八月一日ヨリ施行ス

○重罪輕罪控訴豫納金規則明治三十一年十二月
律令第二十五號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル重罪輕罪控訴豫納金規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

重罪輕罪控訴豫納金規則

第一條 重罪輕罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者控訴ヲ爲サントスルトキハ訴訟費用ノ保證トシテ重罪ニ付テハ金三十圓輕罪ニ付テハ金十五圓ヲ豫納スヘシ

第二條 重罪輕罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者貧困ニシテ保證金ヲ豫納スルコト能ハサルトキハ控訴ノ申立ト同時ニ保證金ノ免除ヲ請求スルコトヲ得

第三條 保證金ノ免除ヲ請求シタル者ハ其請求ヲ爲シタル日ヨリ十四日內ニ控訴ノ趣意書ト共ニ訴訟費用支辨ノ資力ナキコトヲ證スヘキ所轄辨務署長支署長又ハ街庄社長ノ證明書ヲ差出スヘシ但其辨務署支署又ハ街庄社役場法院所在地ヨリ三里以外ニ在ルトキハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フ八里ニ滿タサルモ三里以上ナルトキ亦同シ

第四條 前二條ニ記載シタル書類ハ訴訟ニ關スル一切ノ書類ト共ニ第一審法院ノ檢察官ヨリ覆審法院ニ之ヲ送致スヘシ

第五條 覆審法院ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ保證金免除請求ノ當否ヲ決定スヘシ但控訴ノ事山ナシト認ムルカ又ハ事由アルモ實益ナシト認ムルトキハ免除ヲ與ヘサルモノトス

第六條 第三條ニ依リ控訴ノ趣意書並無資力ノ證明書ヲ其期間內ニ差出ササルトキ又ハ第五條ニ依リ保證金ノ免除ナキトキハ控訴ノ申立ハ其效ナキモノトス

第七條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ第一條ノ保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別ニ其費用ヲ豫納セシムヘシ

○拘留又ハ科料ノ刑ニ該ルヘキ犯罪即決例明治二十九年十月
律令第七號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル拘留又ハ科料ノ刑ニ該ルヘキ犯罪即決例勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

拘留又ハ科料ノ刑ニ該ルヘキ犯罪即決例

第一條 警察署長及分署長又ハ其代理タル官吏並憲兵隊長分隊長及下士ハ其管轄地内ニ於ケル十日以内ノ拘留又ハ一圓九十五錢以下ノ科料ノ刑ニ該ルヘキ犯罪ヲ即決スヘシ

第二條 即決ハ略式ヲ以テシ被告人ノ陳述ヲ聽キ辯護ヲ取調ヘ直ニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若ハ呼出シタリト雖出廷セサルトキハ直ニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ地方法院ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直ニ上訴スルコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並其言渡ヲ爲シタル官吏ノ官名及氏名年月日ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル官吏ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタル時ヨリ三日以内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリ

タル時ヨリ五日以内トス

第六條 前條ノ申立ヲ受ケタル官署ハ速ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ地方法院檢察官ニ送致スヘシ

第七條 科料ノ言渡ヲ爲シタルトキハ必要ノ場合ニ於テハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿タルモノト雖仍一日ニ計算ス

第八條 拘留ノ言渡ヲ爲シタルトキハ必要ノ場合ニ於テハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日以内ナルトキハ其日數ヲ過クルコトヲ得ス

第九條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタルトキハ直ニ留置ヲ解クヘシ

第十條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折算シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

○匪徒刑罰令明治三十一年十一月
律令第二十四號

臺灣總督ハ茲ニ緊急ノ必要アリト認メ明治二十九年法律第六十三號第三條ニ依リ匪徒刑罰令ヲ發布ス

匪徒刑罰令

第一條 何等ノ目的ヲ問ハス暴行又ハ脅迫ヲ以テ其目的ヲ達スル爲多衆結合スルヲ匪徒ノ罪ト爲シ

左ノ區別ニ從テ處斷ス
一 首魁及教唆者ハ死刑ニ處ス

- 二 謀議ニ參與シ又ハ指揮ヲ爲シタル者ハ死刑ニ處ス
- 三 附和隨從シ又ハ雜役ニ服シタル者ハ有期徒刑又ハ重懲役ニ處ス
- 第二條 前條第三號ニ記載シタル匪徒左ノ所爲アルトキハ死刑ニ處ス
 - 一 官吏又ハ軍隊ニ抗敵シタルトキ
 - 二 火ヲ放テ建造物汽車船舶橋梁ヲ燒燬シ若ハ毀壞シタルトキ
 - 三 火ヲ放テ山林田野ノ竹木藪麥又ハ露積シタル柴草其他ノ物件ヲ燒燬シタルトキ
 - 四 鐵道又ハ其標識燈臺又ハ浮標ヲ毀壞シ汽車船舶往來ノ危險ヲ生セシメタルトキ
 - 五 郵便電信及電話ノ用ニ供スル物件ヲ毀壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ其交通ノ妨害ヲ生セシメタルトキ
 - 六 人ヲ殺傷シ又ハ婦女ヲ強姦シタルトキ
 - 七 人ヲ畧取シ又ハ財物ヲ掠奪シタルトキ
- 第三條 前條ノ罪ハ未遂犯罪ノ時ニ於テ仍本刑ヲ科ス
- 第四條 兵器彈藥船舶金銀其他ノ物件ヲ資給シ若ハ會合ノ場所ヲ給與シ又ハ其他ノ行爲ヲ以テ匪徒ヲ幫助シタル者ハ死刑又ハ無期徒刑ニ處ス
- 第五條 匪徒ヲ藏匿シ又ハ隱避セシメ又ハ匪徒ノ罪ヲ免カレシメンコトヲ圖リタル者ハ有期徒刑又ハ重懲役ニ處ス
- 第六條 本令ノ罪ヲ犯シタル者官ニ自首シタルトキハ情狀ニ依リ其刑ヲ輕減シ又ハ全免ス

本刑ヲ免シタルトキハ五年以下ノ監視ニ附ス

第七條 本令ニ於テ罰スヘキ所爲ハ其本令施行前ニ係ルモノモ仍本令ニ依テ之ヲ處斷ス

附 則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○民事商事及刑事ニ關スル律令明治三十一年七月律令第八號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル民事商事及刑事ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

民事商事及刑事ニ關スル律令

- 第一條 民事商事及刑事ニ關スル事項ハ民法商法民法民事訴訟法刑事訴訟法及其附屬法律ニ依ル但左ニ掲クル事項ハ別ニ定ムルマテ現行ノ例ニ依ル
 - 一 本島人及清國人ノ外ニ關係者ナキ民事及商事ニ關スル事項
 - 二 本島人及清國人ノ刑事ニ關スル事項
- 第二條 本令ハ第一條ノ法律ニ規定シタル事項ニ付臺灣ニ關シ特ニ定メタル規定ノ效力ヲ妨ケス
- 第三條 附屬法律ハ府令ヲ以テ之ヲ指定ス
- 第四條 明治二十九年律令第四號ハ之ヲ廢止ス

○民事商事及刑事ニ關スル律令施行規則明治三十一年七月
臺灣總督ハ茲ニ緊急ノ必要アリト認メ明治二十九年法律第六十三號第三條ニ依リ民事商事及刑事ニ關スル律令施行規則ヲ發布ス

民事商事及刑事ニ關スル律令施行規則

第一條 土地ニ關スル權利ニ付テハ當分ノ民法第二編物權ノ規定ニ依ラス債權ニ依ル

第二條 民事商事及刑事ニ關スル律令第一條ニ依リ依據スヘキ法律中區裁判所ノ職務ニ屬セシメタルモノハ地方法院ヲシテ之ヲ行ハシム(三十三年律令第十號ヲ以テ條中改正)
「建物」船舶ノ所有權ノ取得又ハ保存質權抵當權ノ取得及「建物」先取特權ノ取得又ハ保存ニ關スル登記手續ハ「登記法」ニ依リ地方法院ヲシテ其事務ヲ行ハシム

第三十二年律令
第十二號ヲ以テ
建物ノ登記ニ關スル規定
ヲ廢止スル法律
第三十二年法律
第四十六號參
照

第三條 民事商事及刑事ニ關スル律令第一條ニ依リ依據スヘキ法律中司法大臣農商務大臣及逓信大臣ノ職務ニ屬セシメタルモノハ臺灣總督之ヲ行フ(三十三年律令第六號及律令第十號ヲ以テ改正)

第四條 民事商事及刑事ニ關スル律令第一條ニ依リ依據スヘキ法律中郡長及島司ノ職務ニ屬セシメタルモノハ辨務署長ヲシテ之ヲ行ハシム(三十三年律令第十號ヲ以テ條中改正)

第五條 民事商事及刑事ニ關スル律令第一條ニ依リ依據スヘキ法律中公證人ノ職務ニ屬セシメタルモノハ當分ノ內辨務署長ヲシテ之ヲ行ハシム(同上)

第六條 民事商事及刑事ニ關スル律令第一條ニ依リ依據スヘキ法律中辯護士ノ職務ニ屬セシメタルモノハ當分ノ內訴訟代人ヲシテ之ヲ行ハシム(同上)

第七條 民事商事及刑事ニ關スル律令第一條ニ依リ依據スヘキ法律中執達吏ノ職務ニ屬セシメタルモノハ法院執達者ヲシテ之ヲ行ハシム(同上)

第八條 民事訴訟法第三十六條ノ場合ニ於テ忌避セラレタル判官地方法院ニ屬スルトキハ覆審法院其由請ヲ裁判ス若右ノ判官カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ爲スコトヲ要セス

第九條 刑事訴訟法第三十五條ノ場合ニ於テハ臺灣總督ノ命ニ依リ覆審法院檢察官ヨリ其院ニ裁判管轄ヲ移スノ申請ヲ爲スヘシ

第十條 此規則ニ關スル細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則

第十一條 明治三十一年律令第八號民事商事及刑事ニ關スル律令及此規則ハ此規則發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣人及清國人刑事訴訟法民事訴訟法及其附屬法律適用方明治三十二年四月
臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル本島人及清國人ニ刑事訴訟法民事訴訟法及其附屬法律適用ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

左ノ事項ハ刑事訴訟法民事訴訟法及其附屬法律ニ依ル但別段ノ規定アルモノハ其規定ニ依ル

一 本島人及清國人ノ刑事ニ關スル事項

二 本島人及清國人ノ外ニ關係者ナキ民事及商事ニ關スル事項

附 則

第二十八號 臺灣人及清國人刑事訴訟法民事訴訟法及其附屬法律適用方

千百七十五

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○臺灣人及清國人ノ犯罪豫審方明治三十二年四月律令第九號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル本島人及清國人ノ犯罪豫審ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
本島人及清國人ノ犯罪ニ付テハ地方法院ノ檢察官ハ其事件ノ輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直ニ其法院ニ訴ヲ爲スコトヲ得

○失火ノ責任、銀行ノ過料、國籍法、外國艦船乘組員ノ逮捕留置ニ關スル援助法、國籍喪失者ノ權利等ニ關スル法律ヲ臺灣ニ施行明治三十二年六月勅令第二百九十九號

朕明治三十二年法律第四十號、同年法律第五十三號、國籍法、外國艦船乘組員ノ逮捕留置ニ關スル援助法及明治三十二年法律第九十四號ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
左ニ掲クル法律ハ之ヲ臺灣ニ施行ス
一 明治三十二年法律第四十號
二 明治三十二年法律第五十三號
三 明治三十二年法律第六十六號國籍法
四 明治三十二年法律第六十八號外國艦船乘組員ノ逮捕留置ニ關スル援助法但シ第十一條ヲ除ク
五 明治三十二年法律第九十四號

法律第四十號
失火ノ責任
ハ失火ノ責任
ニ關スル
法律第五十三號
銀行ノ過料
メタル過料
ニ關スル
法律第六十六號
國籍法
國籍法
法律第六十八號
外國艦船乘組員
ノ逮捕留置
ニ關スル
法律第九十四號
援助法

○外國人ノ署名捺印無資力證明方明治三十二年六月勅令第十三號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關スル律令

第一條 法令ノ規定ニ依リ爲スヘキ外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關シテハ明治三十二年法律第五十號ニ依ル

第二條 明治三十二年法律第五十號中市町村長ノ職務ニ屬セシメタルモノハ辨務署長ヲシテ之ヲ行ハシム

附則

第三條 本令ノ施行期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

○民事訴訟ニ關スル件明治三十二年二月律令第二號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル民事上ノ訴ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
民事上ノ訴ニシテ明治二十八年五月八日以前ニ於テ訴權ノ發生シタルモノハ地方法院ニ於テ之ヲ受理セス
本令ハ明治三十二年十月一日ヨリ施行ス(三十二年律令第五號ヲ以テ四月十月ニ改ム)

○民事訴訟ニ關シ國ヲ代表スル規程明治三十一年七月 勅令第八十一號

朕臺灣總督府各官廳ノ民事訴訟ニ關シ國ヲ代表スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督府、縣、廳ハ其ノ所管又ハ監督スル事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

第二條 臺灣總督ハ府令ヲ以テ所屬特別地方機關中其ノ司掌事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表スル者ヲ定ムルコトヲ得

第三條 前二條ノ場合ニ於テ國ヲ代表シ訴訟ヲ爲ス者ハ各官廳ノ長官又ハ長官ノ指定シタル所屬官吏トス

○民事訴訟費用規則明治三十一年七月 律令第十號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル民事訴訟費用規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

民事訴訟費用規則

第一條 民事訴訟費用ハ此規則ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴狀其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付金三錢トス但半枚ニ滿タサルモノ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付キ金十五錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ法院ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付金七十五錢トス但半枚ニ滿タサルモノ亦同シ

第四條 法院ニ於テ訴訟代人ノ附添ヲ命シタルトキハ其報酬ハ法院ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第五條 當事者ノ日常ハ出頭一度ニ付金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日常ヲ金二十五錢トス

第六條 證人ノ日常ハ出頭一度ニ付金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日常ヲ給セス

第七條 鑑定人及通事ノ日常ハ出頭一度ニ付金五十錢乃至五圓ノ範圍内ニ於テ法院ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第八條 當事者ノ滞在費ハ滿三里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金五十錢トシ證人鑑定人及通事ノ滞在費ハ一日金一圓トス

第九條 當事者證人鑑定人及通事ノ旅費ハ汽車賃一哩ニ付金七錢船賃一海里ニ付金七錢車馬賃一里ニ付金三十錢トス

通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

臺灣總督府管轄區域外ニ在ル當事者ノ旅費ハ法院ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十條 判官及書記檢證ノ爲實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及滞在費ハ證人ニ準ス

第十一條 此規則ニ定メサル必要ノ費用ハ他ノ規則ニ定ムルモノヲ除ク外其費ニ依ル

第十二條 強制執行ニ關スル費用ハ他ノ規則ニ定ムルモノヲ除ク外前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

強制執行ニ關シテ保管人若ハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ法院ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十三條 費用ノ豫納及負擔ニ關スル方法ハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

附則

第十四條 此規則ハ明治三十一年八月一日ヨリ施行ス

○民事訴訟用印紙規則明治三十一年六月
律令第六號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル民事訴訟用印紙規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

民事訴訟用印紙規則

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ依リ其正本ニ印紙ヲ貼用スヘシ但法院書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用スヘシ

第二條 財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價格ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用スヘシ

訴訟物ノ價格金十圓マテ

三十錢

同五十圓マテ

一圓五十錢

同百圓マテ

三圓

同五百圓マテ

十圓

同千圓マテ

十五圓

同五千圓マテ

二十五圓

同五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ

控訴狀ニハ前項ノ半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼スヘシ

第三條 訴訟物ノ價格ヲ算定スルニハ左ノ規定ニ從フ但其規定ナキ場合ニ於テハ法院ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

第一 訴訟物ノ價格ハ起訴ノ日時ニ於ケル價格ニ依リ之ヲ算定ス

第二 果實損害賠償及訴訟費用ハ法律上相率連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス

第三 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前項ニ掲クルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス

第四 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲スタル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ格價寡キトキハ其價格ニ依ル

第五 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價格ニ依ル但地役ノ爲承役地ノ價格ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價格ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第六 質貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額

- ニ依ル但一箇年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル
- 第七 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一箇年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マラタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル
- 第四條 財産權上ノ請求ニアラサル訴訟ハ三圓ノ印紙ヲ貼用スヘシ
- 財産權上ノ請求ニアラサル訴訟ト其訴訟ニ因テ生ズル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價格ニ依リ印紙ヲ貼用スヘシ
- 第五條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス
- 第六條 左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ
- 第一 抗告
- 第二 故障
- 第三 證據調ノ申立
- 第四 假差押及假處分ノ申請
- 第五 判決ノ送達アラシコトヲ求ムル申立
- 第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ
- 第七條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲スヘキ法院ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ
- 第八條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出スヘキ法院ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

- 第九條 答辯書其他前數條ニ掲ケサル申立及申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ
 - 第十條 訴訟上ノ救助ヲ受ケタル場合ノ外此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用セサル民事訴訟ノ書類ハ其效ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ法院ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有效ナラシムルコトヲ得
 - 第十一條 印紙ヲ貼用スルトキハ貼用者ノ印章ヲ以テ消印スヘシ
 - 第十二條 印紙ハ管轄地方官廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ發賣スルコトヲ許サス但賣捌所ナキ地ニアリテハ法院ニ於テ之カ賣下ヲ爲ス
 - 第十三條 前條ノ賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買收シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍現在ノ印紙ヲ沒收ス
 - 第十四條 前條ノ規程ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重及數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
 - 附則
 - 第十五條 此規則ハ明治三十一年七月一日ヨリ施行ス
- 臺灣辯護士規則 明治三十三年一月 律令第五號
- 臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣辯護士規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣辯護士規則

- 第一條 辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ臺灣總督府法院ノ命令ニ從ヒ臺灣總督府法院ニ於テ法律律令ニ定メタル職務ヲ行フモノトス
 - 第二條 辯護士ニハ明治二十六年法律第七號辯護士法ノ規定ヲ準用ス
 - 第三條 現在ノ訴訟代人ハ當分ノ内其職務ヲ行フコトヲ得
- 附則
- 第四條 此規則ハ明治三十三年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

○遺失物法ヲ臺灣ニ施行明治三十二年六月

朕遺失物法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治三十二年法律第八十七號遺失物法ヲ臺灣ニ施行ス

○銃砲取締規則明治三十年四月

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル銃砲取締規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

第三十二年府令
第九十六號ヲ合
以テ本法ノ加
行細則ヲ定ム

銃砲取締規則

- 第一條 銃砲ハ人民ニ於テ製造スルコトヲ禁ス但獵銃ハ此限ニアラス
- 第二條 銃砲販賣又ハ獵銃製造ノ營業ヲ爲サントスル者ハ管轄地方廳ニ出願免許狀ヲ受クヘシ
各地方廳管内營業者ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定ム
- 第三條 銃砲販賣營業者營業用ノ爲銃砲ヲ買入レ又ハ輸入シタルトキハ管轄警察官署ニ届出検査ヲ受クヘシ
- 第四條 獵銃製造營業者ハ其製造シタル獵銃ヲ銃砲販賣營業者以外ニ賣渡スコトヲ得ス
- 第五條 銃砲販賣營業者ニアラサル者獵銃短銃杖銃ヲ買受ケ又ハ讓受ケ又ハ所有セントスルトキハ管轄警察官署ノ許可ヲ受クヘシ其他ノ銃砲ニ付テハ管轄地方廳ノ特許ヲ受クヘシ
- 第六條 警察官又ハ憲兵ハ臨時營業者ノ店舗又ハ銃砲所有者ノ家宅ニ出張シ銃砲ヲ検査スルコトアルヘシ検査ノ際ハ何時タリトモ之ヲ拒ムコトヲ得ス
- 第七條 軍用ニ供セサル銃砲ト雖私ニ之ヲ製造シ又ハ輸入シタル者ハ刑法第五百七條第二項ヲ適用シ私ニ之ヲ賣渡シ又ハ讓與シタル者ハ同條第二項ヲ適用シ私ニ之ヲ所有シタル者ハ刑法第六百六十條ヲ適用ス
- 第八條 刑法第五百五十八條第五百五十九條第六百六十一條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ亦之ヲ適用ス
- 第九條 第三條ノ検査ヲ受ケヌ又ハ第六條ノ検査ヲ拒ミタル者ハ二回以上二十回以下ノ罰金ニ處ス
- 第十條 第七條ニ依リ刑ヲ受ケタルトキハ其銃砲ヲ沒收ス

第十一條 營業者此規則ニ違背シタルトキハ其情狀ニ依リ地方廳ハ其營業ヲ停止シ又ハ禁止スルコトヲ得

附則

第十二條 從來銃砲ヲ所有スル者ハ此規則施行ノ日ヨリ六箇月以内ニ此規則ニ依リ其手續ヲ爲スヘシ

第十三條 此規則ニ依リ警察官署ノ取扱フヘキ事項ニシテ其官署ノ設置ナキ地ニ於テハ管轄憲兵首部又ハ支部又ハ屯所ニ於テ之ヲ取扱フ

第十四條 此規則ノ施行細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

三十年府令第
十三號ヲ以テ
本則施行細則
ヲ定ム

○火藥取締規則明治三十年五月
律令第六號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル火藥取締規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

火藥取締規則

第一條 此規則ニ火藥類ト稱スルハ火藥劇發火藥硝火藥 ナイトログロセリンニダイ
リマイトニ當ル其他劇發火藥ノ物品ヲ云フ但煙火爆竹燐寸ノ類ハ此限ニアラス

第二條 火藥類ハ人民ニ於テ製造スルコトヲ禁ス

第三條 火藥類ノ販賣營業ヲ爲サントスル者ハ管轄地方廳ヘ願出免許狀ヲ受クヘシ

各地方廳管内營業者ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定ム

第四條 營業者營業用ノ爲火藥類ヲ買入レ又ハ輸入シタルトキハ管轄警察官署ニ届出検査ヲ受クヘシ

第五條 營業者ニアラサル者火藥類ヲ買受ケ又ハ讓受ケ又ハ所有セントスルトキハ管轄警察官署ノ許可ヲ受クヘシ

銃燄又ハ爆竹煙火燐寸製造ノ免許ヲ得タル者ハ其免狀ヲ營業者ニ示シ火藥類ヲ買取ルコトヲ得

第六條 火藥類ハ火藥三百目劇發火藥三十目雷管導火管類五百箇迄ハ安全ノ場所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得

營業用又ハ坑業土工其他職業用ニ供スル火藥類ハ前項制限ノ外火藥十貫目劇發火藥一貫目雷管導火管類一萬箇迄ハ管轄警察官署ノ許可ヲ受ケ假貯藏所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得其數量ヲ超ユルトキハ火藥庫ノ外之ヲ貯藏スルコトヲ許サス但火藥五百貫目以上劇發火藥五十貫目以上ハ火藥庫ト雖之ヲ貯藏スルコトヲ許サス

第七條 火藥庫又ハ假貯藏所ヲ建設セントスル者ハ管轄警察官署ニ願出許可ヲ受クヘシ

第八條 警察官又ハ憲兵ハ臨時營業者ノ店舖火藥庫假貯藏所又ハ火藥所有者ノ家宅ニ出張シ火藥類及火藥庫又ハ假貯藏所ヲ検査スルコトアルヘシ検査ノ際ハ何時タリトモ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第九條 軍用ニ供セサル火藥類ト雖私ニ之ヲ製造シ又ハ輸入シタル者ハ刑法第五百七條第一項ヲ適用シ私ニ之ヲ賣渡シ又ハ讓與シタル者ハ同條第二項ヲ適用シ私ニ之ヲ所有シタル者ハ刑法第百

六十條ヲ適用ス

第十條 刑法第五百五十八條第五百五十九條第六十一條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ亦之ヲ適用ス

第十一條 私ニ火藥庫又ハ假貯藏所ヲ建設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 第四條ノ檢査ヲ受ケヌ又ハ第六條ニ違背シ又ハ第八條ノ檢査ヲ拒ミタル者ハ十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十三條 第九條ニ依リ刑ヲ受ケタルトキハ其火藥類ヲ沒收ス第十一條ニ依リ刑ヲ受ケタルトキハ其火藥庫又ハ假貯藏所ノ撤去ヲ命スルコトアルヘシ

附則

第十四條 營業者此規則ニ違背シタルトキハ其情狀ニ依リ地方廳ハ其營業ヲ停止シ又ハ禁止スルコトヲ得

第十五條 從來火藥類ヲ所有スル者ハ此規則施行ノ日ヨリ六箇月以内ニ此規則ニ依リ其手續ヲ爲スヘシ

第十六條 此規則ニ依リ警察官署ニ於テ取扱フヘキ事項ニシテ其官署ノ設置ナキ地ニ於テハ管轄巡兵首部又ハ支部又ハ屯所ニ於テ之ヲ取扱フ

第十七條 此規則ノ施行細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

○保甲條例明治三十一年八月
府令第二十一號

三十年府令
第十四號
以テ施行
本則ヲ定ム

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル保甲條例勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

保甲條例

第一條 舊慣ヲ參酌シ保甲ノ制ヲ設ケ地方ノ安寧ヲ保持セシム

第二條 保及甲ノ人民ヲシテ各連坐ノ責任ヲ有セシメ其連坐者ヲ罰金若ハ科料ニ處スルコトヲ得

第三條 保及甲ニ於テハ各其規約ヲ定ムヘシ其規約中ニハ褒賞及過怠金ノ法ヲ設クルコトヲ得

前項ノ規約ハ地方長官ノ認可ヲ請フヘシ

第四條 保及甲ノ役員其職務ニ違背シタルトキハ地方長官之ヲ懲戒ス

懲罰ハ百圓以下ノ罰金剝職及罷責ノ三種トス

第五條 保及甲ニハ匪賊並水火災ノ警戒防禦ノ爲壯丁團ヲ置クコトヲ得

第六條 保甲及壯丁團ノ編制指揮監督解散經費役員ノ選任權限等ニ關スル規定ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 此條例ハ地方長官ノ必要ト認ムル地ニ限リ臺灣總督ノ認可ヲ經テ之ヲ施行ス

○臺灣總督府所屬稅關監吏巡查及看守其他ノ者銃器攜帶方明治二十九年七月
勅令第二百七十八號

朕臺灣總督府所屬稅關監吏補巡查及看守ヲシテ銃器ヲ攜帶セシムルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督ハ其ノ所屬ノ稅關監吏、巡查、看守、燈臺所看守及其ノ特ニ定メタル者ヲシテ銃器ヲ攜帶セシムルコトヲ得其ノ銃器ハ陸軍大臣ノ定メタルモノニシテ左ニ記載スル場合ノ外之ヲ用ヅルコトヲ得ス(三十三年勅令第二百
七十八號ヲ以テ改正)

- 一 暴行ヲ受クルトキ
 - 二 其ノ監守スル場所或ハ物件又ハ人ヲ防衛スルニ銃器ヲ用ウルノ外他ニ手段ナキトキ又ハ銃器ヲ以テセサレハ抗拒ニ勝ツ能ハサルトキ
- 非常ノ場合ニ際シ前項ノ人員集團事ニ從フトキハ其地ノ守備隊長ノ指揮ニ從フモノトス

○臺灣監獄則

明治三十二年二月
臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣監獄則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

第三十二年府令
第四十五號
施行
細則ヲ定ム

- 第一條 監獄ニ關スル規程ハ本令ニ定ムルモノヲ除ク外明治二十二年勅令第九十三號及同三十二年勅令第三百四十四號ニ依ル(三十二年律令第三十二號ヲ以テ改正)
- 第二條 當分ノ内集治監留監ヲ置カス徒刑流刑ニ處セラレタル者ハ地方監獄ニ拘禁ス
- 第三條 本島人若ハ清國人タル男囚ノ髮ハ習慣ニ依リ辨髮セシム
- 第四條 囚人及懲治人ニ給スル柴代ハ臺灣總督之ヲ定ム
- 第五條 監獄則中內務大臣ノ職務ニ屬セシメタルモノハ臺灣總督ヲシテ府縣知事ノ職務ニ屬セシメタルモノハ知事廳長ヲシテ之ヲ行ハシム
- 第六條 此規則ノ施行細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

官制

○臺灣總督府官制

明治三十年十月
勅令第三百六十二號

沿革略記
 明治二十九年三月勅令第八十八號ヲ以テ臺灣總督府條例ヲ定ム○同年同月勅令第八十九號ヲ以テ臺灣總督府評議會章程ヲ定ム○同年同月勅令第九十號ヲ以テ臺灣總督府民政官制ヲ定ム○同年同月勅令第九十一號ヲ以テ臺灣總督府地方官制ヲ定ム○同年同月勅令第九十二號ヲ以テ臺灣總督府稅關官制ヲ定ム○同年同月勂令第九十三號ヲ以テ臺灣總督府府庫署官制ヲ定ム○同年同月勂令第九十四號ヲ以テ臺灣總督府直轄諸學校官制ヲ定ム○同年同月勂令第九十五號ヲ以テ臺灣總督府郵便及電信局官制ヲ定ム○同年同月勂令第九十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第九十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第九十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第九十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百二十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百二十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百廿九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百三十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百四十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百五十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百六十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百七十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百八十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十一號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十二號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十三號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十四號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十五號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十六號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十七號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十八號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第一百九十九號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス○同年同月勂令第二百號ヲ以テ臺灣總督府地方法官官制ヲ改正ス

朕臺灣總督府官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府官制

第一條 臺灣總督府ニ臺灣總督ヲ置ク

總督ハ臺灣及澎湖列島ヲ管轄ス

第二條 總督ハ親任トス陸海軍大將若ハ中將ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 總督ハ委任ノ範圍内ニ於テ陸海軍ヲ統率シ内務大臣ノ監督ヲ承ケ諸般ノ政務ヲ統理ス(三十二年勅令第二十三號ヲ以テ條中改正)

第四條 總督ハ軍政及陸海軍軍人軍屬ノ人事ニ關シテハ陸軍大臣若ハ海軍大臣、防衛作戦並動員計

畫ニ關シテハ參謀總長若ハ海軍軍令部長、陸軍軍隊教育ニ關シテハ教育總監ノ區處ヲ承ク(三十二年勅令第二十三號及三十三年勅令第二百五十四號ヲ以テ條中改正)

第五條 總督ハ其ノ職權若ハ特別ノ委任ニ依リ總督府令ヲ發シ之ニ禁錮一年以下又ハ罰金二百圓以

内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第六條 總督ハ其ノ管轄區域内ノ防備ノ事ヲ掌ル

第七條 總督ハ其ノ管轄區域内ノ安寧秩序ヲ保持スル爲ニ必要ト認ムルトキハ兵力ヲ使用スルコト

ヲ得

前項ノ場合ニ於テハ直ニ内務大臣陸軍大臣海軍大臣參謀總長及海軍軍令部長ニ之ヲ報告スヘシ(三十二年勅令第二十三號ヲ以テ本項中改正)

第八條 明治二十九年法律第六十三號第二條又ハ第四條ノ勅裁ヲ請フトキハ内務大臣ヲ經由スヘシ(三十二年勅令第二十號ヲ以テ條中改正)

第九條 總督ハ必要ト認ムル地域内ニ於テ其ノ地ノ守備隊長若ハ駐在武官ヲシテ民政事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得

第十條 總督ハ知事若ハ廳長ノ命令又ハ處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第十一條 總督ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任文官ノ進退ハ内務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專行ス(三十二年勅令第二十三號ヲ以テ條中改正)

第十二條 總督ハ内務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ所部文官ノ叙位叙勳ヲ上奏ス(上)

第十三條 總督ハ所部文官ヲ懲戒ス其ノ勅任官ニ係ルモノ並ニ奏任官ノ免官ハ内務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ上奏シ其ノ他ハ之ヲ專行ス(上)

第十四條 總督府ニ總督官房ヲ置ク(三十二年勅令第六號ヲ以テ本條以下改正)

總督官房ニ副官二人及專任秘書官二人ヲ置ク機密ニ關スル事務ヲ掌ル

副官ハ陸海軍佐尉官ノ内各一人ヲ以テ之ニ充ツ
秘書官ハ奏任トス

第十五條 總督府ニ民政部、陸軍幕僚、海軍幕僚ヲ置ク
陸海軍幕僚條例ハ別ニ之ヲ定ム

第十六條 民政部ハ行政司法ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ル

第十七條 民政部中ノ局課及其ノ事務ノ分掌ハ總督之ヲ定ム

第十八條 總督府ニ左ノ職員ヲ置ク

民政長官

參事官長

事務官

參事官

技師

翻譯官(三十三年勅令第三十
六號ヲ以テ本項追加)

屬

技手

通譯

第十九條 民政長官ハ一人勅任トス總督ノ命ヲ承ケ部務ヲ整理ス

第二十條

參事官長ハ一人勅任トシ參事官ハ專任四人奏任トス(三十三年勅令第三十六號
ヲ以テ二人ヲ四人ニ改メ)

參事官ハ總督又ハ民政長官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌リ又ハ各局課ニ兼勤シ又ハ臨時命ヲ承ケ各局
課ノ事務ヲ助ク

參事官長ハ上官ノ命ヲ承ケ審議立案ニ關シ參事官ノ事務ヲ監督ス

第二十一條 事務官ハ專任十五人勅任又ハ奏任トス總督又ハ民政長官ノ命ヲ承ケ各局課ノ事務ヲ掌
ル

第二十二條 技師ハ專任十五人奏任トス上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル(三十二年勅令第三百四十八
號ヲ以テ專任ノ二字ヲ加メ)

第二十三條 翻譯官ハ專任五人奏任トス上官ノ命ヲ承ケ翻譯及舊慣ノ調査ニ關スル事ヲ掌ル(三十三年勅令第三十
六號ヲ以テ本條追加)

第二十四條 屬、技手及通譯ハ通シテ專任二百人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務技術通譯等ニ從事
ス(上)

第二十五條 (三十二年勅令第三百
六號ニ依リ削除)

第二十六條 本令ハ明治三十年十一月一日ヨリ施行ス

第二十七條 明治二十九年勅令第八十八號臺灣總督條例同年勅令第九十號臺灣總督府民政局官制

同年勅令第十六號臺灣總督府軍務局官制並ニ同年勅令第六十九號臺灣總督府民政局長官臨時土木

部官制ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第二十八條 臺灣總督府官制

○臺灣總督府評議會章程(明治二十九年三月
令第八十九號)
朕臺灣總督府評議會章程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府評議會章程

第一條 臺灣總督府ニ評議會ヲ置キ左ノ職員ヲ以テ之ヲ組織ス(三十年勅令第四百十一號三十一年勅令第四百七號ヲ以テ各リトモ改正三十二年勅令第三百四十三號ヲ以テ第 項及 第三項中ヲ改正ス)

總督

民政長官

陸軍幕僚參謀長

海軍參謀長

參事官長

事務官

參事官

六人以内
兼任ハ二人ヲ限ル
但シ陸軍幕僚參謀長及海軍參謀長ハ會議ノ事件軍事ニ關係スル場合ニ限り議事ニ參與スルモノトス
總督ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項職員ノ外會議ノ事件ニ關係アル文武官ニ命シテ臨時其ノ議事

ニ參與セシムルコトヲ得但シ表決ハ數ニ加ハルコトヲ得ス

事務官及兼任參事官ニシテ評議員タルヘキ者ハ臺灣總督定ムル所ノ規程ニ依ル

第二條 評議會ハ明治二十九年法律第六十三號ニ依ル命令ヲ議決スルモノトス(三十年勅令第四百六十一號
改正)

第三條 評議會ハ總督ヲ以テ議長トシ議長事故アルトキハ出席員中ノ官等最も高キ者之ヲ代理ス

第四條 評議會ノ議案ハ總督之ヲ發ス

第五條 評議會ノ會議ハ總員半數以上ノ出席アルニアラサレハ之ヲ開クコトヲ得ス(三十年勅令第四百
十一號ヲ以テ改正)

第六條 評議會ノ會議ハ出席員ノ多數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第七條 總督ハ何時タリトモ既ニ發シタル議案ヲ修正シ又ハ撤回スルコトヲ得

第八條 總督ニ於テ評議會ノ議決ニ同意スヘカラスト認ムルトキハ其ノ理由ヲ付シテ再議ヲ求ルコ
トヲ得

第九條 評議會ニ幹事一人及書記若干人ヲ置ク幹事ハ參事官書記ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ(三十年勅令第四百
十一號ヲ以テ

第十條 幹事ハ議長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理シ書記ハ上官ノ命ヲ承ケ出席員ノ氏名會議ノ事件及議
決ノ要旨ヲ筆記スヘシ

○

○臺灣總督府陸軍幕僚條例 明治三十年十月
勅令第三百六十三號
朕臺灣總督府陸軍幕僚條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府陸軍幕僚條例

第一條 臺灣總督府陸軍幕僚ハ臺灣總督ノ所轄内ニ於ケル陸軍ニ關スル事ヲ掌ル處トス

第二條 幕僚ヲ分テ參謀部副官部トス

第三條 參謀長ハ總督ヲ輔佐シ幕僚ヲ統ヘ事務整理ノ責ニ任ス

第四條 幕僚ノ各將校及同相當官ハ參謀長ノ區處ヲ受ケ部務ヲ擔任ス

第五條 陸軍幕僚ノ編制ハ別ニ之ヲ定ム

附則

第六條 本條例ハ明治三十年十一月一日ヨリ施行ス

○

○臺灣總督府海軍幕僚條例 明治三十年十月
勅令第三百六十四號
朕臺灣總督府海軍幕僚條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府海軍幕僚條例

第一條 臺灣總督府海軍幕僚ハ臺灣總督ノ所轄内ニ於ケル海軍ニ關スルコトヲ掌ル

第二條 臺灣總督府海軍幕僚トシテ左ノ職員ヲ置ク

參謀長

參謀

副官

機關長

軍醫長

主計長

前項ノ外海軍造船技士、主理及通譯官ヲ置ク

幕僚ノ定員ハ別表定ムル所ニ依ル

第三條 參謀長ハ臺灣總督ノ統轄ニ屬スル海軍軍政及軍令ニ關シ總督ヲ輔佐シ又幕僚ノ事務ヲ監理ス

第四條 參謀ハ參謀長ノ命ヲ承ケ出師ノ準備作戰ノ計畫沿岸ノ防禦警備演習檢閲及牒報等ニ關スルコトヲ掌理ス

第五條 副官ハ參謀長ノ命ヲ承ケ人事及庶務ヲ掌理ス

第六條 機關長ハ參謀長ノ命ヲ承ケ機關及兵器ニ關スルコトヲ掌理ス

第七條 軍醫長ハ參謀長ノ命ヲ承ケ醫務衛生ニ關スルコトヲ掌理ス

第八條 主計長ハ參謀長ノ命ヲ承ケ會計給與ニ關スルコトヲ掌理シ又副官ノ事務ヲ助ク

第九條 造船技士主理及通譯官ハ參謀長ノ命ヲ承ケ服務ス

第十條 臺灣總督府海軍幕僚附シテ海軍下士數列任文官ヲ置キ上官ノ命ヲ承ケ服務セシム

附則

第十一條 本令ハ明治三十年十一月一日ヨリ施行ス
 (別表) (三十年勅令第四百三十七號ヲ以テ改正)

臺灣總督府海軍幕僚定員表

| | | | |
|-----|-------|-------|----|
| 參謀長 | 海軍少將 | 一等看脚手 | 八 |
| 參謀 | 海軍中少佐 | 二等看脚手 | 一 |
| 副官 | 海軍中少佐 | 一等書記 | 一 |
| 機長 | 海軍中少佐 | 二等書記 | 一 |
| 主計長 | 海軍中少佐 | 書記 | 一 |
| 小計 | 海軍中少佐 | | 八 |
| 合計 | 二十二 | | 十一 |

備考 一 本表ノ外海軍造船技士一人主理(海軍中少佐)一人通譯官一人ヲ置ク
 二 本表及前項ノ人員ハ常分其ノ幾分ヲ置カサルコトヲ得

○臺灣總督府地方官官制(明治三十一年六月)
 朕臺灣總督府地方官官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 臺灣總督府地方官官制

第一條 臺灣ニ臺北縣、臺中縣、臺南縣、宜蘭廳、臺東廳及澎湖廳ヲ置ク其ノ位置及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

第二條 各縣ニ左ノ職員ヲ置ク

- 知事
- 書記官
- 警部長
- 稅務官
- 技師
- 典獄
- 屬
- 技手
- 警部
- 看守長
- 監獄書記
- 通譯

第三條 各廳ニ左ノ職員ヲ置ク但シ臺東廳ニハ書記官、技師、看守長及監獄書記、澎湖廳ニハ書記官及技師ヲ置カス

廳長
書記官
警部長
技師
屬
技手
警部
看守長
監獄書記
通譯

第四條 知事ハ一人勅任トス

第五條 廳長ハ一人奏任トス

第六條 書記官、警部長、稅務官、技師及典獄ハ各一人奏任トス

第七條 技師ハ前條定員ノ外縣、廳ノ須要ニ依リ俸給豫算定額内ニ於テ適宜之ヲ置クコトヲ得

第八條 屬、技手、警部、看守長、監獄書記及通譯ハ判任トス各縣各廳ヲ通シテ專任七百二十八ヲ以テ

定員トス其ノ各縣各廳ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定メ其ノ各官ノ定員ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ知事、

廳長之ヲ定ム(三十二年勅令第百三十九號ヲ以テ專任ノ二字ヲ加フ)

第九條 知事、廳長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ管理ス

第十條 知事、廳長ハ部内ノ行政事務ニ付其ノ職權若ハ特別ノ委任ニ依リ管内一般又ハ其ノ一部ニ

縣令、廳令ヲ發シ之ニ禁錮二十五日以下又ハ罰金二十五圓以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第十一條 知事、廳長ハ辨務署長ノ處分若ハ命令ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリ

ト認ムルトキハ其ノ處分若ハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第十二條 知事、廳長ハ管内ノ靜謐ヲ維持スルカ爲メ兵力ヲ要スルトキハ之ヲ臺灣總督ニ具狀スヘ

シ但シ其ノ非常急變ノ場合ニ際シテハ直ニ其ノ附近地ノ旅團長若ハ守備隊長ニ出兵ヲ要求スルコ

トヲ得

第十三條 知事、廳長ハ所部ノ官吏ヲ監督シ奏任官ノ功過ハ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ

之ヲ專行ス

第十四條 知事、廳長ハ所部ノ奏任官ノ懲戒ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十五條 知事、廳長ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第十六條 知事、廳長事故アルトキハ上席高等官其ノ職務ヲ代理ス

知事、廳長ハ縣、廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十七條 知事、廳長ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ辨務署長ニ委任スル

コトヲ得

第十八條 各縣ニ知事官房、內務部、稅務部、警察部及監獄署ヲ署キ宜蘭廳ニ內務課、財務課、警察課

及監獄署ヲ臺東廳ニ總務課及警察課ヲ、澎湖廳ニ總務課、警察課及監獄署ヲ置ク其ノ事務ノ分掌ハ
臺灣總督ノ認可ヲ經テ知事、廳長之ヲ定ム

第十九條 縣ニ在テ書記官ハ内務部長、稅務官ハ稅務部長、警部長ハ警察部長、典獄ハ監獄署長ト爲
リ知事ノ命ヲ承ケ所部ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス

宜蘭廳ニ在テハ廳長ハ内務課長、書記官ハ財務課長、警部長ハ警察課長ト爲リ臺東廳及澎湖廳ニ在
テハ廳長ハ總務課長、警部長ハ警察課長トナリ廳長ノ命ヲ承ケ所部ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監
督ス

第二十條 各部長、課長又ハ監獄署長事故アルトキハ知事、廳長ニ於テ縣、廳官吏ノ一人ヲシテ其ノ
事務ヲ代理セシム

第二十一條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

第二十二條 屬ハ縣ニ在テハ知事官房、内務部又ハ稅務部ニ屬シ廳ニ在テハ總務課、内務課又ハ財務
課ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第二十三條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

第二十四條 警部ハ警察部、警察課又ハ辨務署、辨務支署ニ分屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ警察ニ關スル事
務ヲ分掌シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス

第二十五條 看守長ハ監獄署又ハ監獄支署ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監
督ス

廳ニ在テハ看守長ヲ以テ監獄署長ニ充ツ

第二十六條 監獄書記ハ監獄署又ハ監獄支署ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第二十七條 通譯ハ縣、廳ノ各部、課及其ノ他ノ官署ニ分屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ従事ス

第二十八條 知事、廳長ハ必要ト認ムルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ監獄署ノ下ニ監獄支署ヲ置ク
コトヲ得

監獄支署長ハ看守長ヲ以テ之ニ充ツ

監獄支署長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ署主管ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス

第二十九條 巡查及看守ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第三十條 縣、廳職員ノ外警察署及監獄署ヲ置キ判任官ノ待遇トス

第三十一條 縣、廳ニ參事ヲ置クコトヲ得

參事ハ各縣各廳五人以内トシ奏任官ノ待遇トス

參事ハ縣、廳管轄内ニ居住シ學識、名望アル者ニ就キ内務大臣ヲ經テ臺灣總督之ヲ奏薦宣行ス

第三十二條 參事ハ地方ノ行政事務ニ關シ知事、廳長ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フルモノトス

參事ハ知事、廳長ノ命ヲ承ケ事務ニ従事スルコトアルヘシ

第三十三條 縣、廳ノ管内須要ノ地ニ辨務署ヲ置ク其ノ位置、名稱及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム
臺東廳及澎湖廳ノ管内ニハ辨務署ヲ置カス屬ニ於テ其ノ事務ヲ掌理ス

前項事務ノ爲メ廳ノ管内ニ其ノ出張所ヲ置クコトヲ得出張所ノ名稱、位置及管轄區域ハ臺灣總督

之ヲ定ム

第三十四條 各辨務署ニ警部ノ外左ノ職員ヲ置ク

署長

主記

技手

第三十五條 署長ハ各署一人奏任トス(三十三年勅令第三十號ヲ以テ條中刪除)

第三十六條 主記、技手ハ判任トス各署ヲ通シテ專任五百五十人ヲ以テ定員トス其ノ各縣各廳下ノ

定員ハ臺灣總督之ヲ定メ其ノ各官ノ定員並ニ各辨務署ノ定員ハ知事、廳長之ヲ定ム(三十二年勅令第三十三號ヲ以テ)

第三十七條 各辨務署ニ左ノ三課ヲ置キ事務ヲ分掌セシム

第一課 他課ノ主務ニ屬セサル一切ノ事務ヲ掌ル

第二課 警察ニ關スル事務ヲ掌ル

第三課 蕃人蕃地ニ關スル事務ヲ掌ル

知事、廳長ハ各辨務署ノ須要ニ應ジ臺灣總督ノ認可ヲ經テ前項分課中ノ一課若ハ二課ヲ置カサルコトヲ得

第三十八條 知事、廳長ハ辨務署ノ或ル一部ノ事務ヲ掌理セシムル爲メ臺灣總督ノ認可ヲ經テ辨務署ノ下ニ辨務支署ヲ置クコトヲ得

辨務支署長ハ主記、警部又ハ技手ヲ以テ之ニ充ツ

第三十九條 署長ハ知事又ハ廳長、支署長ハ署長ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理ス

第四十條 署長ハ部下ノ官吏ヲ監督シ其ノ進退、功過ヲ知事、廳長ニ具狀ス

第四十一條 署長ハ部内ノ街、庄、社等ノ長ヲ監督シ其ノ進退及成績ヲ知事、廳長ニ具狀ス

第四十二條 署長、支署長事故アルトキハ各其ノ上席主記、警部又ハ技手其ノ職務ヲ代理ス

署長、支署長ハ部下ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第四十三條 主記、警部、技手ハ署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ各其ノ主務ニ從事ス

第四十四條 辨務署ニ參事ヲ置クコトヲ得

參事ハ各署五人以内トシ判任官ノ待遇トス

參事ハ辨務署管轄内ニ居住シ學識、名望アル者ニ就キ知事、廳長之ヲ命ス

第四十五條 參事ハ部内ノ行政事務ニ關シ署長ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フルモノトス

參事ハ署長ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事スルコトアルヘシ

附 則

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

明治三十年勅令第六十三號臺灣總督府撫墾署官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○臺灣總督府縣及廳看守定員明治三十二年三月勅令第五十四號

朕臺灣總督府縣及廳看守定員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督府縣、廳看守ノ定員ハ拘禁男子五百人ニ付八十五人トシ拘禁男子五百人以上ハ百人ヲ加フル毎ニ看守十二人ヲ加ヘ拘禁男子五百人未滿ハ百人ヲ減スル毎ニ看守十二人ヲ減ス

第二條 臺灣總督ハ前條定員ノ外各監獄支署ニ五人以下ノ看守ヲ増置スルコトヲ得

第三條 臺灣總督ハ監獄ノ構造役業ノ種類其ノ他特別ノ事情アリト認ムルトキハ第一條定員ノ外更ニ五十人以下ノ看守ヲ増置スルコトヲ得

第四條 拘禁男子百人未滿ノ監獄署看守定員ハ第一條看守定員最少数以內ニ於テ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第五條 在監人ノ減少ニ由リ看守ニ過員ヲ生シタルトキハ之ニ休職ヲ命シ俸給ノ半額ヲ支給スルコトヲ得但シ休職ハ二箇年ヲ期トシ期滿シレバ其ノ職ヲ免セラレタルモノトス

休職看守ハ職ヲ執ラサルノ外總テ在職者ニ同シ

休職看守ハ誓約期限内ト雖自己ノ都合ニ依リ其ノ職ヲ辭スルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府管内街、庄、社ニ長ヲ置ク明治三十年五月勅令第五十七號

朕臺灣總督府管内街、庄、社ニ長ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督府管内各街、庄、社若ハ數街、庄、社ニ長ヲ置ク

第二條 街、庄、社長ハ勤務署長ノ指揮命令ヲ承ケ部内ノ行政事務ヲ補助執行ス

第三條 街、庄、社長設置ニ關シ必要ナル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

第四條 街、庄、社長ニハ事務費トシテ一箇月十五圓以內ヲ給スルコトヲ得

○臺灣總督府稅關官制明治三十二年八月勅令三百七十二號

朕臺灣總督府稅關官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府稅關官制

第一條 臺灣總督府稅關ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 關稅、噸稅、出港稅及稅關諸收入ニ關スル事項

二 保稅倉庫其ノ他ノ倉庫ニ關スル事項

三 船舶及貨物ノ取締ニ關スル事項

四 關稅規則及噸稅規則犯則者ノ處分ニ關スル事項

五 關稅通商ノ取締ニ關スル事項

第二條 左ノ四港ニ税關ヲ置ク

淡水

安平

基隆

打狗

第三條 税關ニ税關長一人ヲ置ク奏任トス

淡水税關長ハ基隆税關長安平税關長ハ打狗税關長ヲ兼ス

第四條 税關ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

鑑定官 奏任 二人

屬 判任 專任 四十八人

監視 判任 專任 二十四人

鑑定官補 判任 專任 十一人

監吏 判任 專任 百三十四人

第五條 税關長ハ臺灣總督ノ指揮ヲ承ケ税關ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス

第六條 鑑定官ハ税關長ノ指揮ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ關スル事務ヲ掌理ス

第七條 屬ハ税關出張所長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第八條 監視ハ税關監視部長若ハ税關監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ニ従事ス

第九條 鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ貨物ノ検査鑑定ニ従事ス

第十條 監吏ハ税關監視署長タル者ノ外上官ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ニ従事ス

第十一條 税關ニ税關監視部ヲ置ク

監視部ニ部長一人ヲ置ク監視ヲ以テ之ニ充ツ

税關監視部長ハ税關長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

第十二條 税關管轄區域内必要ナル場所ニ税關出張所及税關監視署ヲ置クコトヲ得

税關出張所ノ名稱位置及管轄區域並税關監視署ノ名稱位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十三條 税關出張所ニ所長一人ヲ置キ屬ヲ以テ之ニ充ツ

第十四條 税關監視署ニ署長一人ヲ置ク監視若ハ監吏ヲ以テ之ニ充ツ

第十五條 税關出張所長ハ税關長ノ指揮ヲ承ケ其ノ管轄内ノ税關事務ヲ掌理ス

第十六條 税關監視署長ハ税關長ノ指揮ヲ承ケ關稅警察及犯則處分ニ關スル事務ヲ掌理ス

附則

第十七條 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第十八條 本令施行ノ際監吏監吏補ニシテ別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ監吏ハ監視ニ監吏補ハ監吏ニ任セラレタルモノトス

○臺灣總督府稅關管轄區域明治二十九年九月

除臺灣總督府稅關管轄區域ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

淡水稅關管轄區域

富基岬ヨリ南方西螺溪ニ至ル沿岸

安平稅關管轄區域

西螺溪ヨリ南方阿公店溪ニ至ル沿岸及澎湖島ノ沿岸

打狗稅關管轄區域

阿公店溪ヨリ南方鶯鶯鼻ヲ經テ北方花蓮港ニ至ル沿岸及小琉球島江頭嶼火燒嶼ノ沿岸

基隆稅關管轄區域

花蓮港ヨリ北方三貂角ヲ經テ西方富貴岬ニ至ル沿岸

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○

○臺灣關稅及出港稅訴願審查委員會規則明治三十二年九月

朕臺灣關稅及出港稅訴願審查委員會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣關稅及出港稅訴願審查委員會規則

第一條 關稅法第六十九條ニ依ル委員會ハ臺灣關稅及出港稅訴願審查委員會ト稱シ會長一人委員五人ヲ以テ組織ス

第二條 會長ハ臺灣總督府民政長官委員ハ臺灣總督府高等官三人臺灣總督府法院判官二人ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 特別ノ必要アル場合ニ於テハ前條定員ノ外臨時委員ヲ命スルコトヲ得

第四條 委員ハ臺灣總督ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第五條 會長事故アルトキハ其ノ指名シタル委員ヲシテ事務ヲ代理セシム

第六條 關稅及出港稅訴願審查委員會ニ幹事一人ヲ置キ臺灣總督府高等官ヲ以テ之ニ充ツ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第七條 關稅及出港稅訴願審查委員會ニ書記二人ヲ置キ臺灣總督府屬ヲ以テ之ニ充ツ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第八條 書記ニハ事務ノ繁閑ニ應シ相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

○臺灣總督府師範學校官制明治三十二年三月勅令第九十七號

朕臺灣總督府師範學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府師範學校官制

第一條 臺灣總督府師範學校ハ知事廳長ノ管理ニ屬シ國語傳習所公學校及書房義塾ノ教員トナルヘキ者ヲ養成スル所トス

第二條 臺灣總督府師範學校ニ附屬學校ヲ附設ス

第三條 臺灣總督府師範學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長

教授

助教授

教諭

舍監

書記

第四條 學校長ハ各校一人奏任トス知事廳長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第五條 教授ハ各校專任二人奏任トス師範學校生徒ノ教授ヲ掌ル(三十二年勅令第四百三十一號ヲ以テ專任ノ二字ヲ加フ)

助教授ハ各校專任四人判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第六條 教諭ハ各校專任二人判任トス附屬學校生徒ノ教授ヲ掌ル(令)

第七條 舍監ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事務ヲ掌ル

舍監ハ教授若ハ助教授ヨリ之ヲ兼ネシム

第八條 書記ハ各校專任二人判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス(三十二年勅令第四百三十一號ヲ以テ專任ノ二字ヲ加フ)

第九條 知事廳長ハ教授若ハ助教授ノ内ヨリ附屬學校主事ヲ命シ同校ニ關スル事務ヲ掌ラシムルコトヲ得

第十條 師範學校設置ノ場所ハ臺灣總督ノ指定スル所ニ依ル

附則

第十一條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府國語學校官制明治三十年七月勅令第二百四十二號

朕臺灣總督府國語學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督府國語學校ニ附屬學校ヲ置キ公學模範學校ヲ附設ス

第二條 臺灣總督府國語學校ニ左ノ職員ヲ置ク(三十二年勅令第十一號ヲ以テ)

學校長

教授

助教授

教諭

舍監

書記

第三條 學校長ハ一人奏任トス臺灣總督ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス(三十年勅令第三百六十號ヲ以テ條中改正)

第四條 教授ハ七人奏任トス國語學校生徒ノ教授ヲ掌ル(三十二年勅令第三百七號ヲ以テ)

助教授ハ十人判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第五條 教諭ハ二十四人判任トス附屬學校又ハ公學模範學校生徒ノ教授ヲ掌ル(三十二年勅令第十一號ヲ以テ)

第六條 舍監ハ一人奏任トス學校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事ヲ掌ル(三十三年勅令第三百七號ヲ以テ本條改正)

第七條 書記ハ七人判任トス學校長ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス(三十二年勅令第十一號ヲ以テ)

第八條 臺灣總督ハ國語學校教官ノ中ヨリ公學模範學校ノ主事ヲ命シ同校ニ關スル事務ヲ掌ラシム

ルニトテ得(三十年勅令第三百六十號ヲ以テ條中改正)

○臺灣總督府國語傳習所官制明治三十年七月勅令第二百四十三號
朕臺灣總督府國語傳習所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府國語傳習所官制

第一條 臺灣總督府國語傳習所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

教諭

助教諭

書記

第二條 所長ハ各所一人縣、廳ノ高等官又ハ教諭ヲシテ之ヲ兼ネシム

第三條 教諭ハ五十二人判任トス生徒ノ教授ヲ掌ル

助教諭ハ二十人判任トス教諭ノ職務ヲ助ク

第四條 書記ハ二十八人判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

○臺灣公學校官制 明治三十一年七月
勅令第百七十九號

朕臺灣公學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣公學校官制

第一條 臺灣公學校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長

教諭

訓導

第二條 學校長ハ各校一人判任トス辨務署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

學校長ハ教諭ヲシテ之ヲ兼ネシム

第三條 教諭ハ判任トス生徒ノ教授ヲ擔任シ校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第四條 訓導ハ判任官ノ待遇トス教諭ノ職務ヲ助ク

訓導ノ俸給ハ臺灣總督定ムル所ノ規程ニ依ル

附則

本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府小學校官制 明治三十一年七月
勅令第百八十號

朕臺灣總督府小學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府小學校官制

第一條 臺灣總督府小學校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長

訓導

第二條 學校長ハ各校一人判任トス辨務署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

學校長ハ訓導ヲシテ之ヲ兼ネシム

第三條 訓導ハ判任トス兒童ノ教育ヲ擔任シ校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則

本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府醫學學校官制 明治三十二年三月
勅令第九十五號

朕臺灣總督府醫學學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府醫學學校官制

第一條 臺灣總督府醫學學校ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ醫師ヲ養成スル所トス

第二條 臺灣總督府醫學學校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長

教授

助教授

舍監

書記

第三條 校長ハ一人奏任トス臺灣總督ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

校長ハ教授ヲ以テ之ヲ兼ネシム

第四條 教授ハ專任五人奏任トス生徒ノ教授ヲ掌ル

助教授ハ專任五人奏任又ハ判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第五條 舍監ハ專任一人奏任又ハ判任トス校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事務ヲ掌ル

舍監ハ教授又ハ助教授ヲ以テ之ヲ兼テシムルコトヲ得

第六條 書記ハ專任五人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府郵便及電信局官制明治三十二年六月
勅令第百九號

朕臺灣總督府郵便及電信局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府郵便及電信局官制

第一條 臺灣總督府郵便及電信局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ郵便及電信ノ業務ヲ掌理ス

第二條 郵便及電信局ヲ分テ一等郵便電信局、二等郵便電信局、二等郵便局、二等電信局、三等郵便電

信局、三等郵便局、三等電信局トス

第三條 臺灣總督ノ指定シタル一等郵便電信局ニ於テハ電信建築ノ事務ヲ兼掌ス

臺灣總督ハ一等郵便電信局ヲシテ其ノ指定シタル區域内ノ二等郵便電信局以下監督事務ノ一部ヲ

分掌セシムルコトヲ得

本臺灣總督府必要ナル地ニ郵便及電信ノ支局ヲ置キ郵便及電信ノ業務ヲ分掌セシムルコトヲ得

第四條 各郵便電信局、郵便局、電信局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長一人、書記一人、郵便係長一人、電信係長一人、郵便係長一人、電信係長一人

但シ三等局ニハ通信書記ヲ置カス

電信建築ノ事務ヲ兼掌スル一等郵便電信局ニハ前項職員ノ外技師及技手ヲ置ク

第五條 一等郵便電信局長ハ奏任トス臺灣總督ノ命ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理ス

二等郵便電信局長、二等郵便局長、二等電信局長、三等郵便電信局長、三等郵便局長、三等電信局長

ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ局務ヲ掌理ス

第六條 技師ノ委任ハ局長ノ指揮監督ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

通信書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ局務ニ從事ス

技師ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第七條 郵便及電信局ノ名稱、位置及其ノ區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

第八條 一等郵便電信局長ハ各局ヲ通シテ四人ヲ以テ定員トス

二等郵便電信局長、二等郵便局長、二等電信局長ハ各局ヲ通シテ二十一人ヲ以テ定員トス

第九條 通信書記ハ各局ヲ通シテ四百四十九人ヲ以テ定員トス

第十條 技師ハ各局ヲ通シテ二人、技師ハ各局ヲ通シテ十四人ヲ以テ定員トス

附則 則

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

○臺灣總督府電話交換局官制 明治三十三年三月 勅令第九十二號

朕臺灣總督府電話交換局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府電話交換局官制

第一條 臺灣總督府電話交換局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ電話交換ノ業務ヲ掌理ス

第二條 電話交換局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長

技師

第一條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ局務ニ從事ス

技師

第三條 局長ハ技師又ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ

局長ハ臺灣總督ノ命ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理ス

第四條 技師ハ奏任トス臺灣總督府技師又ハ一等郵便電信局技師ヲシテ之ヲ兼ネシム

技師ハ局長ノ指揮ヲ承ケ局中ノ事務ヲ分掌ス

第五條 書記ハ判任トス通信書記ヲシテ之ヲ兼ネシム

書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第六條 技師ハ判任トス臺灣總督府技師又ハ一等郵便電信局技師ヲシテ之ヲ兼ネシム

技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ從事ス

第七條 電話交換局ノ名稱及位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

第八條 臺灣總督ハ必要ト認ムル地ニ電話交換支局ヲ設置シ其ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府燈臺所官制 明治二十九年三月 勅令第九十六號

朕臺灣總督府燈臺所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府燈臺所官制

第一條 臺灣總督府燈臺所ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ航路標識ノ事務ヲ掌理ス
第二條 各燈臺所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長
看守

第三條 所長ハ各所一人判任トシ上級看守ヲシテ之ヲ兼ネシム臺灣總督ノ命ヲ承ケ所中一切ノ事務ヲ掌理ス(三十年勅令第三百六十號ヲ以テ條中改正)

第四條 看守ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス

第五條 所長ハ各所ヲ通シテ九人ヲ以テ定員トス(三十年勅令第六十四號三十二年勅令第五十四號ヲ以テ定員ヲ定ム)

第六條 看守ハ各所ヲ通シテ三十四人ヲ以テ定員トス(三十年勅令第六十四號三十二年勅令第七十七號三十二年勅令第五十四號ヲ以テ定員ヲ改ム)

第七條 燈臺所ノ名稱及位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第八條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府測候所官制(明治二十九年三月勅令第九十七號)

朕臺灣總督府測候所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府測候所官制

第一條 臺灣總督府測候所ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ測候ニ關スル事務ヲ掌理ス

第二條 各測候所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技手

第三條 所長ハ各所一人判任トシ上級ノ技手ヲ以テ之ヲ兼テシム臺灣總督ノ命ヲ承ケ所内一切ノ事務ヲ掌理ス(三十年勅令第三百六十號ヲ以テ條中改正)

第四條 技手ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス

第五條 所長ハ各所ヲ通シテ五人ヲ以テ定員トス

第六條 技手ハ各所ヲ通シテ十九人ヲ以テ定員トス(三十年勅令第六十五號ヲ以テ十六人ヲ十九人ニ改ム)

第七條 測候所ノ名稱及位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第八條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府醫院官制(明治三十一年六月勅令第十一號)

朕臺灣總督府醫院官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府醫院官制

第一條 臺灣總督府醫院ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ疾病ノ診療ニ關スル事ヲ掌ル

第二條 各醫院ニ左ノ職員ヲ置ク

第二十八類 臺灣總督府醫院官制

院長

醫長

醫員

藥局長

調劑師

書記

第三條 院長ハ各院一人奏任トス

院長ハ醫長ヲ以テ之ヲ兼ネシム

第四條 醫長ハ奏任、醫員及藥局長ハ奏任又ハ判任トシ調劑師及書記ハ判任トス

第五條 院長ハ臺灣總督ノ命ヲ承ケ院務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第六條 醫長、醫員及藥局長ハ院長ノ命ヲ承ケ診療及調劑ニ關スル事ヲ掌ル

第七條 調劑師及書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ各主務ニ従事ス

第八條 醫院ノ名稱及位置ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

訓

○臺灣總督府製藥所官制

明治三十一年六月二十日

朕臺灣總督府製藥所官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府製藥所官制

第一條 臺灣總督府製藥所ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ製藥ニ關スル事務ヲ掌理ス

第二條 臺灣總督府製藥所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師

助手

屬

通譯

第三條 所長ハ一人奏任トス臺灣總督ノ命ヲ承ケ所内一切ノ事務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 技師ハ專任二人奏任トス所長ノ指揮ヲ承ケ阿片其ノ他ノ製煉分析等ニ關スル事ヲ掌ル

第五條 助手ハ專任五人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

第六條 屬ハ十五人判任トス所長ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

第七條 通譯ハ四人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ従事ス

附則

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

○

○臺灣總督府海港檢疫所官制 明治三十三年三月勅令第百十九號
朕臺灣總督府海港檢疫所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府海港檢疫所官制

第一條 臺灣總督府海港檢疫所ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ臺灣海港檢疫ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 臺北縣基隆ニ海港檢疫所ヲ置キ基隆海港檢疫所ト稱ス
前項ノ外臺北縣滬尾ニ基隆海港檢疫所ノ支所ヲ置ク

第三條 海港檢疫所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 一人

海港檢疫官 專任一人 奏任

海港檢疫醫官 專任一人 奏任

海港檢疫官補 專任一人 判任

海港檢疫醫官補 專任一人 判任

海港檢疫所關劑手 專任一人 判任

海港檢疫所書記 專任二人 判任

海港檢疫所支所ニ左ノ職員ヲ置ク

○

○臺灣總督府海港檢疫所官制 明治三十三年三月勅令第百十九號
朕臺灣總督府海港檢疫所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府海港檢疫所官制

第一條 臺灣總督府海港檢疫所ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ臺灣海港檢疫ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 臺北縣基隆ニ海港檢疫所ヲ置キ基隆海港檢疫所ト稱ス
前項ノ外臺北縣滬尾ニ基隆海港檢疫所ノ支所ヲ置ク

第三條 海港檢疫所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 一人

海港檢疫官 專任一人 奏任

海港檢疫醫官 專任一人 奏任

海港檢疫官補 專任一人 判任

海港檢疫醫官補 專任一人 判任

海港檢疫所關劑手 專任一人 判任

海港檢疫所書記 專任二人 判任

海港檢疫所支所ニ左ノ職員ヲ置ク

支所長 專任一人 判任

海港檢疫官補 專任一人 判任

海港檢疫醫官補 專任一人 判任

海港檢疫所書記 專任二人 判任

第四條 所長ハ海港檢疫官ノ中ヨリ臺灣總督之ヲ補ス

所長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ク所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

所長ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ所中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

支所長ハ海港檢疫官補ノ中ヨリ臺灣總督之ヲ補ス

支所長ハ所長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第五條 海港檢疫官ハ所長ノ命ヲ承ケ檢疫ヲ掌ル

第六條 海港檢疫醫官ハ所長ノ命ヲ承ケ醫務ヲ掌ル

第七條 海港檢疫官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ檢疫ニ從事ス

第八條 海港檢疫醫官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ醫務ニ從事ス

第九條 海港檢疫所關劑手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ關劑ニ從事ス

第十條 海港檢疫所書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十一條 臺灣總督ハ臨時必要アリト認ムルトキハ檢疫又ハ醫務若ハ通譯ニ從事セシムル爲豫算定額内ニ於テ海港檢疫所又ハ支所ニ檢疫員檢疫醫官ヲ置クコトヲ得

檢疫員及檢疫醫員ハ判任ノ待遇トス

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府警察官及司獄官練習所官制明治三十一年六月勅令第五百十二號

朕臺灣總督府警察官及司獄官練習所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府警察官及司獄官練習所官制

第一條 臺灣總督府警察官及司獄官練習所ハ警部、巡查、監獄書記、看守長、看守タルニ必要ナル學術及實務ヲ教授スル所トス

第二條 警察官及司獄官練習所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

教官

舍監

書記

第三條 所長ハ一人奏任トシ臺灣總督府事務官又ハ參事官ヲシテ之ヲ兼ネシム

所長ハ臺灣總督ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 所長ハ臺灣總督ノ認可ヲ得テ所内ノ規則ヲ定ムルコトヲ得

第五條 專任教官ハ奏任三人及判任五人トス所長ノ指揮ヲ承ケ教授ヲ掌ル(三十二年勅令第二十二號ヲ以テ二人ヲ三人ニ改ム)

所長事故アルトキハ上席教官其ノ職務ヲ代理ス

第六條 舍監ハ專任一人奏任又ハ判任トス所長ノ指揮ヲ承ケ練習生ノ紀律ニ關スル事ヲ掌ル(三十二年勅令第二十二號ヲ以テ專任ノ二字ヲ加ヘ第二項ヲ削ル)

第七條 書記ハ四人判任トス所長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス(三十三年勅令第二十二號ヲ以テ三人ヲ四人ニ改ム)

附則

本令ハ明治三十一年七月一日ヨリ施行ス

明治三十年勅令第九十三號臺灣總督府巡查看守教習所官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○臺灣總督府警察官及司獄官練習所ニ巡查及看守ヲ置ク明治三十二年十月勅令第四百號

朕臺灣總督府警察官及司獄官練習所ニ巡查及看守ヲ置クヲ得ルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府警察官及司獄官練習所練習生ニ充ツル爲臺灣總督府ニ巡查及看守ヲ置クコトヲ得

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○臺灣鹽務局官制明治三十二年三月勅令第五十一號

朕臺灣鹽務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣鹽務局官制

第一條 臺灣鹽務局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ食鹽ノ收納賣渡検査其ノ他食鹽專賣ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス

第二條 臺灣鹽務局ニ左ノ職員ヲ置ク

- 局長
- 事務官
- 屬

第三條 局長ハ各局一人事務官ヲ以テ之ニ充ツ事務官ヲ置カサル局ニ於テハ屬ヲ以テ之ニ充ツ

局長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

事務官ハ奏任トス各局ヲ通シテ專任二人ヲ以テ定員トス

第四條 屬ハ判任トシ各局ヲ通シテ專任八十四人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

トテ得

第五條 臺灣總督ハ前二條定員ノ外須要ニ應ジ俸給定額内ニ於テ臺灣鹽務局ニ技師及助手ヲ置ク

第六條 技師ハ奏任トス局長ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

第七條 助手ハ判任トス上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ニ從フ

第八條 臺灣鹽務局ノ名稱位置及其ノ管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○

○臺灣樟腦局官制明治三十三年七月勅令第三百二號

朕臺灣樟腦局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣樟腦局官制

第一條 臺灣樟腦局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ樟腦及樟腦油ノ收納賣渡検査及製造ニ關スル事務ヲ掌理ス

第二條 臺灣樟腦局ニ左ノ職員ヲ置ク

- 局長 一人
- 事務官 專任三人 奏任
- 技師 專任二人 奏任
- 書記 專任六十九人 判任
- 助手 專任三十五人 判任

第三條 局長ハ臺灣總督府勅任官ヲ以テ之ニ充ツ

局長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス

局長ハ奏任官ノ進退ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ行フ

第四條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ關スル事務ヲ分掌ス

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事務ヲ分掌ス

第六條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

第八條 臺灣總督ハ第二條定員ノ外須要ニ應シ豫算定額内ニ於テ技師及技手ヲ置クコトヲ得

第九條 臺灣總督ハ必要ニ應シ地方ニ支局ヲ置キ局中ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

第十條 支局長ハ事務官技師又ハ書記ヲ以テ之ニ充ツ

支局長ハ局長ノ指揮ヲ承ケ支局ノ事務ヲ掌理ス

第十一條 支局ノ名稱位置及其ノ管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

本令 ○臨時臺灣土地調查局官制 明治三十一年八月
勅令第二百一號

朕臨時臺灣土地調查局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時臺灣調查局官制

第一條 臨時臺灣土地調查局ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ地籍調査及土地臺帳並地圖調製ニ關スル事務ヲ掌理ス

第二條 臨時臺灣土地調查局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長

事務官

技師

屬

技手

第三條 局長ハ一人臺灣總督府民政局長ヲ以テ之ニ充ツ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務

ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス

局長ハ奏任官ノ進退ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス

第四條 事務官ハ專任三人奏任トス上官ノ命ヲ承ケ局中ノ庶務ヲ分掌ス (三十二年勅令第六
十四號ヲ以テ改正)

第五條 技師ハ專任二人奏任トス上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事務ヲ分掌ス

第六條 屬及技手ハ通シテ專任三百人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ屬ハ庶務ニ従事シ技手ハ技術ニ従

事ス (三十二年勅令第六
十四號ヲ以テ改正)

第七條 (三十二年勅令第六
十四號ヲ以テ改正)

第八條 臺灣總督ハ必要ニ應シ地方ニ支局ヲ置き局中ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

第九條 支局長ハ其ノ局所在地縣、廳ノ高等官ヲ以テ之ニ充ツ

支局長ハ局長ノ指揮ヲ承ケ局務ヲ掌理ス

第十條 支局ニ局員ヲ置ク縣、廳又ハ辨務署ノ吏員ヲ以テ之ニ充ツ

支局局員ハ支局長ノ指揮ヲ承ケ局務ニ従事ス

附則

第十一條 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○高等土地調査委員會規則明治三十一年七月
律令第十五號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル高等土地調査委員會規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

高等土地調査委員會規則

第一條 臺灣土地調査規則第五條ニ掲クル査定ニ對スル不服ノ申立ヲ裁決セシムル爲臺灣總督府ニ高等土地調査委員會ヲ置キ委員長一人及委員六人ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條 委員長ハ臺灣總督ヲ以テ之ニ充テ委員ノ中二人ハ臺灣總督府法院判官二人ハ臺灣總督府高等行政官二人ハ學識名望アル者ニ就キ内務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ臺灣總督奏薦

宣行ス

第三條 委員會ハ委員長及委員ヲ合セテ五名以上ノ出席アルニアラサレハ開會スルコトヲ得ス

第四條 高等土地調査委員會ノ裁決ヲ經タル事項ニ對シテハ訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第五條 此規則ニ定ムルモノノ外高等土地調査委員會ニ關スル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

○臺灣總督府鐵道部官制明治三十二年十一月
勅令第四百二十六號

朕臺灣總督府鐵道部官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府鐵道部官制

第一條 臺灣總督府鐵道部ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ鐵道ノ建設、保存、運輸及私設鐵道ニ關スルコトヲ掌ル

第二條 臺灣總督府鐵道部ニ左ノ職員ヲ置ク

- 部長 一人
- 技師長 一人 勅任
- 事務官 專任五人 奏任
- 技師 專任十二人
- 書記 專任百二人 判任
- 技手 專任七十人
- 通譯 專任六人 判任

- 第三條 部長ハ臺灣總督府勅任官ヲシテ之ヲ兼ネシム
部長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ部務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ監督ス
- 部長ハ奏任官ノ進退ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ行フ
- 第四條 技師長ハ部長ノ命ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ指揮シ工務及運輸ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第五條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務及運輸ニ關スル事務ヲ分掌ス
- 第六條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工務及運輸ニ關スル事務ヲ分掌ス
- 第七條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務及運輸ニ從事ス
- 第八條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術及運輸ニ從事ス
- 第九條 通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ從事ス
- 第十條 臺灣總督ハ臺灣總督府鐵道部ノ支部又ハ出張所ヲ置クコトヲ得

附則

臨時臺灣鐵道敷設部官制ハ之ヲ廢止ス

○

○臺灣總督府法院條例(明治三十一年七月法律第十六號)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府法院條例改正ノ件勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣總督府法院條例

- 第一條 臺灣總督府法院ハ臺灣總督ニ直屬シ民事刑事ノ裁判ヲ爲スコトヲ掌ル
- 第二條 臺灣總督府法院ヲ分テ地方法院及覆審法院トス但地方法院ノ管内ニ一若ハ二以上ノ地方法院出張所ヲ置クコトヲ得
- 地方法院及其出張所ノ設立廢止及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム
- 第三條 地方法院ハ其管轄區域内ニ於ケル民事刑事ノ第一審裁判及刑事ノ豫審ヲ爲ス所トス
- 第四條 覆審法院ハ臺灣總督府所在地ニ一箇所ヲ置キ各地方法院ノ裁判ヲ覆審シ及裁判管轄ニ關スル申請ヲ裁判ス
- 第五條 各法院ニ判官ヲ置ク
判官ハ勅任又ハ奏任トス臺灣總督之ヲ補職ス
裁判所構成法ニ於テ判事タルノ資格アル者ニアラザレハ判官タルコトヲ得ス
- 第六條 各法院ニ院長ヲ置ク判官ヲ以テ之ニ補ス
院長ハ其院一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督ス
上級法院ノ院長ハ下級法院ノ行政事務ヲ監督ス
院長事故アルトキハ上席判官其職務ヲ代理ス
- 第七條 地方法院ハ單獨判官ヲ以テ總テノ事件ヲ審問裁判ス
- 第八條 覆審法院ニ一若ハ二以上ノ部ヲ設ケ各部ニ部長ヲ置ク判官ヲ以テ之ニ補ス但院長ヲ以テ一

部ノ長ニ充ツ

各部ハ部長一人判官二人ヲ以テ組織シ總テノ事件ヲ審問裁判シ部長ヲ其裁判長ト爲ス部長ハ其部ノ事務ヲ監督ス

第九條 各法院ニ檢察局ヲ附置ス

檢察局ハ臺灣總督ニ直屬シ其管轄區域ハ各法院ノ管轄區域ニ同シ

各檢察局ニ檢察官ヲ置ク

檢察官ハ勅任又ハ奏任トス臺灣總督之ヲ補職ス

第十條 檢察官ハ司法警察官ヲ指揮監督シ刑事訴訟ヲ爲シ其裁判ノ執行ヲ指揮監督シ法院所管ノ事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

上級法院ノ検査官ハ下級法院ノ検査官ヲ指揮監督ス

地方法院検査官ノ職務ハ當分ノ内務部長又ハ警部ヲシテ便宜之ヲ代理セシムルコトヲ得

第十一條 各檢察局ニ檢察官長ヲ置ク檢察官ヲ以テ之ニ補ス但當分ノ内專任檢察官長ヲ置カス檢察官ヨリ之ヲ兼補スルコトヲ得

檢察官長ハ檢察局ノ事務ヲ指揮監督ス

檢察官長事故アリキハ上席檢察官其職務ヲ代理ス

第十二條 各法院及檢察局ニ通譯ヲ置ク

通譯ハ奏任又ハ判任トス臺灣總督之ヲ補職ス

通譯ハ法廷ニ立會通譯ニ從事ス

通譯ハ前項ノ外上官ノ命ヲ承ケ翻譯ニ從事ス

第十三條 各法院及檢察局ニ書記ヲ置ク

書記ハ判任トス臺灣總督之ヲ補職ス

書記ハ民事刑事ノ審判ニ關スル準備ヲ爲シ法廷ニ立會調書ヲ作り及一切ノ訴訟記録ヲ整理保管ス

第十四條 判官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一 公然政事ニ關係スルコト

第二 政黨政派ニ加入スルコト

第三 俸給アル又ハ金銀ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト

第四 商業ヲ營ムコト

第十五條 判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニアラサレハ其意ニ反シテ免官轉官セラルコトナシ

第十六條 判官身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ臺灣總督ハ覆審法院ノ總會ノ議決ヲ經テ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

退職者ハ官吏恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第十七條 臺灣總督ハ必要ト認ムルトキハ判官ニ休職ヲ命スルコトヲ得

休職判官ハ本俸四分ノ一ヲ給ス

休職判官ハ職ヲ執ラサルノ外在職者ニ同シ

附則

第十九條 此條例ハ明治三十一年七月二十日ヨリ施行ス

第二十條 此條例施行前ニ於テ高等法院ノ受理シタル訴訟事件ニシテ未タ判決ヲ受ケサルモノニ關シテハ從前ノ高等法院ノ職務ハ覆審法院之ヲ行フ

此條例施行前ニ於テ地方法院ノ受理シタル訴訟事件ニシテ未タ判決ヲ受ケサルモノハ各其管轄地方法院ニ於テ審問裁判ス

○臺灣總督府法院執達規則

明治三十一年六月
律令第七號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府法院執達規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣總督府法院執達規則

第一條 訴訟ニ關スル書類ノ送達及裁判ノ執行ハ法院書記ヲシテ取扱ハシム但法院長ハ臨時ノ必要ニ依リ他ノ職員又ハ適當ト思量スル者ヲシテ取扱ハシムルコトヲ得

前項ノ職務ヲ執行スル者ハ法院長ヨリ交付シタル證券ヲ携帯スルモノトス

第二條 書類送達ノ手数料ハ一通ニ付金五錢ヲ納ムヘシ

第三十一年府令
第三十七號ヲ以テ本則ノ施行細則ヲ定ム

第三條 差押又ハ假差押ヲ請求スル者ハ左ノ區別ニ從ヒ手数料ヲ納ムヘシ

差押執行スルヘキ債權額 三十錢

債權額二十圓マテ 五十錢

債權額五十圓マテ 七十五錢

債權額百圓マテ 一圓

債權額二百五十圓マテ 一圓

債權額五百圓マテ 一圓三十五錢

債權額千圓マテ 一圓五十錢

債權額千圓ヲ超ユルトキハ二圓トス

第四條 特定ノ動産若ハ代替物ノ一定ノ數量ノ引渡又ハ不動産ノ引渡若ハ明渡ヲ請求スル者ハ

金五十錢ノ手数料ヲ納ムヘシ

第五條 競賣ヲ請求スル者ハ左ノ區別ニ從ヒ手数料ヲ納ムヘシ但競賣ニ依リ得タル金額執行ス

ルヘキ債權額ニ超過スルトキハ其債權額ヲ以テ競賣金額ト看做ス

競賣金額 一圓以下 手数料

二十圓マテ 六十錢

五十圓マテ 一圓

百圓マテ 一圓五十錢

二百五十圓マテ
 五百圓マテ
 千圓マテ
 以上千圓毎ニ一圓ヲ加フ

二圓
 二圓五十錢
 四圓

第六條 前數條ノ事務ヲ行フヘキ地法院所在地ヨリ一里以上ヲ距ルトキハ手数料ノ外一里毎ニ金十錢ノ旅費ヲ納ムヘシ

第七條 差押、假差押、競賣、調書ノ謄本又ハ其他ノ書類ノ謄本ノ下付ヲ請求スル者ハ左ノ割合從ニヒ手数料ヲ納ムヘシ

半枚十二行二十字詰ニ付金三錢トス但十二行ニ滿タサルモノモ亦同シ

第八條 此規則ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ヲ納ムヘシ

第九條 法院ハ第二條第五條第六條第八條ノ費用ノ概算額ヲ當事者ヨリ豫納セシムルコトヲ得

○外國人ニ關スル訴訟ノ裁判管轄明治二十九年十一月法律第六十三號第三條ニ依リ外國人ニ關スル訴訟ノ裁判管轄ノ件ヲ發布ス

臺灣總督ハ茲ニ緊急ノ必要アリト認メ明治二十九年法律第六十三號第三條ニ依リ外國人ニ關スル訴訟ノ裁判管轄ノ件ヲ發布ス

外國人(清國人ヲ除ク)ニ關スル訴訟ノ裁判管轄ハ當分ノ內臺北縣及臺中縣管内ハ臺北地方法院ノ管轄トシ臺南縣及澎湖島廳管内ハ臺南地方法院ノ管轄トス

●官等、俸給

○臺灣總督府職員官等俸給令明治三十一年六月勅令第三百十三號

沿革略記

明治二十九年三月勅令第九十九號ヲ以テ臺灣總督府職員官等俸給令ヲ制定ス●三十年十月勅令第三百六十六號ヲ以テ更ニ臺灣總督府職員官等俸給令ヲ制定シ二十九年勅令第九十九號及三十年勅令第三百六十八號列任官特別俸支給ノ付ヲ廢止ス●三十一年六月勅令第三百十三號ヲ以テ臺灣總督府職員官等俸給令ヲ改正シ三十年勅令第三百五十六號臺灣總督府職員官等俸給令ヲ廢止ス

朕臺灣總督府職員官等俸給令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府高等文官ノ官等ハ高等文官官等表ニ依ル

第二條 臺灣總督ノ年俸ハ六千圓民政長官ノ年俸ハ四千圓又ハ四千五百圓參事官長及勅任事務官ノ年俸ハ三千圓又ハ三千五百圓トス

第三條 左ニ掲クル者ノ俸給ハ第一號俸給表ニ依ル但シ稅關長ハ九級俸以上トス
 奏任事務官
 參事官
 祕書官
 技師

税關長
 税關鑑定官
 製藥所長
 醫院高等官
 醫學校高等官(三十二年勅令第九十六號ヲ以テ追加)
 第四條 左ニ掲グル者ノ俸給ハ第二號俸給表ニ依ル
 國語學校高等官
 警察官及司獄官練習所奏任教官
 第五條 一等郵便電信局長國語學校舎監警察官及司獄官練習所奏任舎監醫學學校奏任舎監及翻譯官ノ俸給ハ第三號俸給表ニ依ル(三十二年勅令第九十六號三十三號勅令第三十七號及三百八十八號ヲ以テ條中追加)
 第六條 判任官ノ俸給ハ判任官俸給表ニ依ル
 第七條 同一ノ官職ニシテ官等ニ依リ其ノ俸給ヲ異ニスルモノハ高等文官官等相當俸給表ニ依リ各其ノ官等ニ照シテ之ヲ給ス
 第七條ノ二 技術官ハ事務ノ繁閑ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ(三十二年勅令第三十號ヲ以テ追加)
 第八條 地方官ノ官等俸給ハ別ニ定ムル所ニ依ル
 第九條 本令ニ規定セサルモノハ明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令及明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス
 附則

千二百四十六

三十二年勅令第九十六號ヲ以テ追加
 三十二年勅令第九十六號ヲ以テ追加
 三十二年勅令第九十六號ヲ以テ追加
 三十二年勅令第九十六號ヲ以テ追加
 三十二年勅令第九十六號ヲ以テ追加

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス
 明治三十年勅令第五百十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス
 (別表)

高等文官官等表

| 勅任 | 奏任 | | | | | | | |
|----|------|-----|---|---|---|---|---|---|
| | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 |
| 親任 | | | | | | | | |
| 總督 | | | | | | | | |
| | 民政長官 | 上 | | | | | | |
| | 參事官長 | 參事官 | 上 | | | | | |
| | 事務官 | 上 | | | | | | |
| | 秘書官 | 上 | | | | | | |
| | 技師 | 上 | | | | | | |
| | 税關長 | 上 | | | | | | |
| | 鑑定官 | 上 | | | | | | |
| | 製藥所長 | 上 | | | | | | |

第一條 臺灣總督府地方高等官ノ官等ハ別表ニ依ル

第二條 臺灣總督府地方高等官ノ年俸ハ左ノ如シ

| | | |
|----|----|-------|
| 知事 | 一級 | 四千五百圓 |
| | 二級 | 三千五百圓 |
| | 三級 | 三千圓 |

| | | |
|----|----|-------|
| 廳長 | 一級 | 二千圓 |
| | 二級 | 一千八百圓 |
| | 三級 | 一千六百圓 |
| | 四級 | 一千四百圓 |
| | 五級 | 一千二百圓 |

| | | |
|------|----|------|
| 縣書記官 | 一級 | 千八百圓 |
| | 二級 | 千六百圓 |
| | 三級 | 千四百圓 |
| | 四級 | 千二百圓 |
| | 五級 | 千圓 |

| | | |
|------|----|------|
| 縣警部長 | 一級 | 千八百圓 |
| | 二級 | 千六百圓 |
| | 三級 | 千四百圓 |
| | 四級 | 千二百圓 |
| | 五級 | 千圓 |

| | | |
|------|----|------|
| 廳書記官 | 一級 | 千二百圓 |
| | 二級 | 千圓 |
| | 三級 | 九百圓 |
| | 四級 | 八百圓 |
| | 五級 | 七百圓 |

| | | |
|------|----|------|
| 廳警部長 | 一級 | 千二百圓 |
| | 二級 | 千圓 |
| | 三級 | 九百圓 |
| | 四級 | 八百圓 |
| | 五級 | 七百圓 |

但シ典獄ハ二級俸以下トス

第三條 技師ノ俸給ハ臺灣總督府職員官等俸給令中技師ニ關スル規程ヲ適用ス

附則 本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

(別表)

明治三十年勅令第五百十三號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

臺灣總督府地方高等官等表

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|
| 勅任 | 一等 | 知事 | 廳長 | 縣書記官 | 技師 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 二等 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | |
| 奏任 | 三等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 四等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 任 | 五等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 六等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 七等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 八等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 九等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 十等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 十一等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 十二等 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

○臺灣鹽務局職員官等俸給令 明治三十二年三月 勅令第五十二號

朕臺灣鹽務局職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣鹽務局職員官等俸給令

第一條 臺灣鹽務局事務官及技師ノ官等ハ高等官五等以下八等以上トス其ノ俸給ハ左表ニ依ル

| | | | | |
|----|---------|---------|---------|--------|
| 年俸 | 一級 千六百圓 | 二級 千四百圓 | 三級 千二百圓 | 四級 千圓 |
| | 五級 九百圓 | 六級 八百圓 | 七級 七百圓 | 八級 六百圓 |

第二條 本令ニ規定セサルモノハ明治三十一年勅令第百十三號臺灣總督府職員官等俸給令ニ依ル

○臺灣樟腦局職員官等俸給令 明治三十二年六月 勅令第二百四十七號

朕臺灣樟腦局職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣樟腦局職員官等俸給令

第一條 臺灣樟腦局事務官ノ官等ハ高等官五等以下八等以上トス其ノ俸給ハ左表ニ依ル (三十三年勅令第百三十三號)

以下條中ヲ刪除シテ次項ヲ追加ス)

臺灣樟腦局技師ノ官等ハ高等官四等以下八等以上トシ其ノ俸給ハ臺灣總督府職員官等俸給令中第二號俸給表ニ依ル

| | | | | |
|----|---------|---------|---------|--------|
| 年俸 | 一級 千六百圓 | 二級 千四百圓 | 三級 千二百圓 | 四級 千圓 |
| | 五級 九百圓 | 六級 八百圓 | 七級 七百圓 | 八級 六百圓 |

第二條 本令ニ規定セサルモノハ臺灣總督府職員官等俸給令ニ依ル

○臺灣總督府師範學校職員官等俸給令 明治三十二年三月 勅令第九十八號

朕臺灣總督府師範學校職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府師範學校職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府師範學校長ノ官等ハ高等官四等以下八等以上トシ其ノ俸給ハ左表ニ依ル

| | | | | |
|----|---------|---------|---------|--------|
| 年俸 | 一級 千六百圓 | 二級 千四百圓 | 三級 千二百圓 | 四級 千圓 |
| | 五級 九百圓 | 六級 八百圓 | 七級 七百圓 | 八級 六百圓 |

第二條 本令ニ規定セサルモノハ明治三十一年勅令第百十三號臺灣總督府職員官等俸給令ヲ適用

ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○

○臺灣總督府税關監吏ノ俸給(明治三十二年八月勅令第三百七十二號)

朕臺灣總督府税關監吏俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府税關監吏ノ月俸ハ別表ニ依ル但シ一級俸ヲ受ケ事務練達ノ者ニハ漸次三十五圓迄ヲ給スルコトヲ得

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

明治二十九年勅令第三百八十九號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(別表)

| | | | | | | | |
|----|-----|----|------|----|------|----|------|
| 一級 | 三十圓 | 二級 | 二十七圓 | 三級 | 二十四圓 | 四級 | 二十一圓 |
| 五級 | 十八圓 | 六級 | 十五圓 | 七級 | 十二圓 | | |

○

第三十一年府令
第四十七號
指定地ニシテ

○辨務署長俸給(明治三十一年六月勅令第三百十五號)

朕辨務署長俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 辨務署長ノ年俸ハ左ノ如シ(三十三年勅令第三十三號ヲ以テ各項トモ改正)

一級 二千圓

二級 千八百圓

三級 千六百圓

四級 千四百圓

五級 千二百圓

六級 千圓

七級 九百圓

八級 八百圓

一級俸乃至四級俸ヲ給スルハ臺灣總督ノ指定シタル地ノ辨務署長ニ限ル

指定地以外ノ辨務署長ニハ特ニ年俸千四百圓ヲ給スルコトヲ得

第二條(三十三年勅令第三十三號ヲ以テ削除)

附則

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

○臺灣總督府鐵道部職員官等俸給令 明治三十二年十一月勅令第四百二十七號
朕臺灣總督府鐵道部職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府鐵道部職員官等俸給令
第一條 臺灣總督府鐵道部技師長ノ官等ハ高等官二等トシ其ノ年俸ハ三千四百又ハ三千五百四トス但シ年功ニ依リ特ニ四千圓ヲ給スルコトヲ得

第二條 臺灣總督府鐵道部事務官ノ官等ハ高等官四等以下八等以上トシ其ノ俸給ハ臺灣總督府職員官等俸給令中第二號表ヲ準用ス

臺灣總督府鐵道部技師ノ官等及俸給ニ關シテハ臺灣總督府職員官等俸給令中技師ニ關スル規定ヲ準用ス

第三條 臺灣總督府鐵道部判任官ノ俸給ニ關シテハ臺灣總督府職員官等俸給令中判任官ニ關スル規定ヲ準用ス

○臺灣總督府海港檢疫所職員官等俸給令 明治三十三年三月勅令第四百二十二號
朕臺灣總督府海港檢疫所職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府海港檢疫所職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府海港檢疫官及臺灣總督府海港檢疫醫官ノ官等ハ高等官等四等以下七等以上トシ其ノ俸給ハ臺灣總督府職員官等俸給令中第二號俸給表ニ依ル

第二條 本令ニ規定セサルモノハ臺灣總督府職員官等俸給令ニ依ル

○臨時臺灣土地調查局職員官等俸給令 明治三十一年八月勅令第二百二號
朕臨時臺灣土地調查局職員官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時臺灣土地調查局職員官等俸給令

臨時臺灣土地調查局事務官及技師ノ官等ハ高等官三等以下八等以上トシ其ノ俸給ハ臺灣總督府職員官等俸給令中第一號俸給表ニ判任官ノ俸給ハ判任官俸給表ニ事務官ノ官等相當俸給ハ高等文官官等相當俸給表ニ依ル

○臺灣總督府陸軍幕僚附佐尉官臨時臺灣土地調查局高等文官兼任ノ場合ニ於ケル俸給 明治三十三年七月勅令第二百九十九號
朕臺灣總督府陸軍幕僚附佐尉官臨時臺灣土地調查局高等文官兼任ノ場合ニ於ケル俸給ニ關スル件ヲ

第二十八類 臺灣總督府陸軍幕僚附佐尉官臨時臺灣土地調查局高等文官兼任ノ場合ニ於ケル俸給 千二百五十七

裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時臺灣土地調查局ニ於テ施行スル圖根測量ニ關シ臺灣總督府陸軍幕僚附佐尉官ヲシテ其ノ高等文官ニ兼任セシムル場合ニ於テハ本官ノ諸給與馬匹ニ係ル給與ヲ除クヲ停止シ臨時臺灣土地調查局職員官等俸給令及臺灣總督府職員加俸支給規則ニ依リ臨時臺灣土地調查局俸給豫算内ヨリ其ノ俸給ヲ支給スルコトヲ得

○臺灣總督府縣廳參事及辨務署參事ニ手當金支給方明治三十年五月勅令第三百五十四號

朕臺灣總督府縣廳參事及辨務署參事ニ手當金支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

「明治三十年勅令第三百五十二號臺灣總督府地方官官制第三十二條」縣、廳參事ニハ月手當五十圓以内「同第四十四條」辨務署參事ニハ月手當二十圓以内ヲ給スルコトヲ得

○臺灣總督府判任文官及巡查看守ニシテ土語通譯ノ事ヲ兼掌スル者ニ特別手當支給方明治三十一年四月勅令第三百零八號

朕臺灣總督府判任文官及巡查看守ニシテ土語通譯ノ事ヲ兼掌スル者ニ特別手當支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

三十一年勅令第三百零八號ヲ以テ改正ス

臺灣總督府判任文官及巡查看守ニシテ土語通譯ノ事ヲ兼掌スル者ニハ一箇月七圓以内ノ特別手當ヲ支給スルコトヲ得其ノ銜衡及手當支給ノ方法ハ臺灣總督之ヲ定ム

○臺灣總督府職員加俸支給規則明治二十九年三月勅令第三百號

朕臺灣總督府職員加俸支給規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府職員加俸支給規則

第一條 臺灣總督府職員ニハ本則ニ依リ加俸ヲ支給ス但シ臺灣島人ハ此ノ限ニ在ラス（三十二年勅令第三百十二號ヲ以テ但シ書追加）

第二條 加俸ハ俸給額十分ノ三ニ相當スル金額トス（三十一年勅令第三百十六號ヲ以テ改正）

滿二年間臺灣總督府文官ヲ勤績シタル者ニハ前項ノ金額ノ外更ニ俸給額二十分ノ一ニ相當スル金額ヲ増給シ滿二年以上ハ一箇年ヲ加フル毎ニ二十分ノ一ヲ増給シ加俸全額俸給額十分ノ五ニ至リテ止ム

第三條 加俸ハ新任、増俸、減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ日割ヲ以テ計算ス

第四條 非職、廢官、退官及死亡ノトキハ當月分加俸ノ全額ヲ支給ス

第五條 本則ニ關スル支給細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第六條 本則ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府及其所轄官廳技手ノ進級方明治三十三年二月勅令第二十五號

朕臺灣總督府及其ノ所轄官廳技手ノ進級ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判任官俸給令第三條ノ規定ハ當分ノ内臺灣總督府及其ノ所轄官廳ノ四級俸以下ノ技手ニ適用セザルコトヲ得

本令ニ依リ増給セラレタル者ニシテ他官廳ニ轉任又ハ再任スル場合ノ俸給ニ關シテハ明治二十九年勅令第二百三十號ノ規定ヲ準用ス但シ同令第二項中七級俸以下ヲ六級俸以下トス

○巡查看守俸給令ヲ臺灣總督府巡查看守ニ適用方明治三十一年六月勅令第二百二十號

朕明治三十年勅令第四百四十九號巡查看守俸給令ヲ臺灣總督府巡查看守ニ適用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十年勅令第四百四十九號巡查看守俸給令ハ臺灣總督府巡查及看守ニ適用ス

附則

本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス

明治二十九年勅令第三百七十五號臺灣總督府巡查及看守俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○臺灣總督府巡查及看守手當支給規則明治三十一年六月勅令第四百十七號

沿革略記 明治二十九年三月勅令第四百一號ヲ以テ臺灣總督府巡查及看守手當支給規則ヲ制定ス●三十一年六月勅令第四百十七號ヲ以テ前令ヲ改正ス

朕臺灣總督府巡查及看守手當支給規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府巡查及看守手當支給規則

第一條 臺灣總督府巡查及看守ニハ本則ニ依リ手當ヲ支給ス但シ明治三十二年勅令第四百號ニ依リ置キタル巡查及看守ハ此ノ限ニアラス(三十三年勅令第三百二十號ヲ以テ本條改正)

第二條 手當ハ毎月十二圓トス

滿二年間臺灣總督府巡查看守ヲ勤績シタル者ニハ前項ノ金額ニ對シ更ニ其ノ十二分ノ一ヲ増給シ滿二年以上ハ一箇年ヲ加フル毎ニ十二分ノ一ヲ増給シ手當金ノ全額二十圓ニ至リテ止ム

臺灣總督府巡查看守間ニ於ケル交互轉職ハ勤績ト看做ス

第三條 手當ハ新任、増減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ日割ヲ以テ計算ス

第四條 廢官、死亡又ハ諭旨免官シタル者ニハ當分手當ノ全額ヲ支給ス

第五條 本則ニ關スル施行細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

本則ハ明治三十一年七月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府警察官及司獄官練習生ノ俸給明治三十二年十月勅令第四百一號
 朕臺灣總督府警察官及司獄官練習所練習生ノ俸給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 臺灣總督府警察官及司獄官練習所練習生ニシテ縣廳ノ巡查看守タル者ニハ明治三十年勅令第四百十九號巡查看守俸給令第五條ノ規定ニ拘ラス各其ノ本俸ヲ支給シ臺灣總督府巡查看守タル者ニハ俸給ヲ支給セス其ノ給與ハ明治三十一年勅令第百十八號ヲ準用ス

○臺灣總督府警察官及司獄官練習生ニ手當金及旅費支給方明治三十一年六月勅令第百十八號
 朕臺灣總督府警察官及司獄官練習生ニ手當金及旅費支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 現官現職者ニアラサル臺灣總督府警察官及司獄官練習所練習生ニハ手當金及旅費ヲ支給スルコトヲ得其ノ支給規則ハ臺灣總督府之ヲ定ム

○臺灣總督府雇員食料補給方明治二十九年五月勅令第百八十一號
 朕臺灣總督府雇員備員食料補給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 臺灣總督府雇員備員ニハ月俸若クハ日給ノ外一箇月金十圓以内ノ範圍ニ於テ食料ヲ補給スルコトヲ得(三十年勅令第百號及三十三年勅令第三百二十一號ヲ以テ加除ス)

二十九府令
 第四十號ヲ以テ
 支給細則ヲ
 定ム

○臺灣總督府國語學校同附屬傳習所生徒學資金及旅費日常支給方明治二十九年九月勅令第三百五號
 朕臺灣總督府國語學校同附屬學校及國語傳習所生徒學資金及旅費日常支給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府國語學校同附屬學校及國語傳習所ノ生徒ニハ其ノ種類ニ依リ學資金及旅費日常ヲ臺灣總督府醫學學校生徒ニハ學資金ヲ支給スルコトヲ得其ノ支給細則ハ臺灣總督府之ヲ定ム(三十二年勅令第百號同勅令第百九十二號ヲ以テ本項中追加ス)

○臺灣總督府奏任文官他官廳ニ轉任又ハ再任スル場合ノ官等明治二十九年五月勅令第百七號
 朕臺灣總督府奏任文官ノ他官廳奏任文官ニ轉任又ハ再任スル場合ノ官等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 第一條 本年勅令第百三十五號ニ依リ高等官五等以上ノ臺灣總督府奏任文官ニ任セラレタル者他官廳ノ奏任文官ニ轉任シ又ハ其ノ官ヲ退官他官廳奏任文官ニ再任スル場合ニ於ケル官等ハ本令ノ規程ニ依ル

第二條 臺灣總督府奏任文官ニ初任シタル者ニ在テハ高等官六等以下トス但臺灣總督府奏任文官在職中陞等シタル度數ニ應シ六等ニ對シ一等若クハ數等ヲ陞叙スルコトヲ得

第三條 臺灣總督府奏任文官ニ再任シタル者ニ在テハ他官廳ニ於ケル前官ノ官等以下トス但臺灣總督府奏任文官在職中陞等シタル度數ニ應シ同前官ノ官等ニ對シ一等若クハ數等ヲ陞叙ス

ルコトヲ得其ノ前官官等七等以下ノ者ニ在テハ第二條ノ例ニ準ス

第四條 第二條及第三條ニ依リ他官廳ノ奏任文官ニ轉任又ハ再任シタル者ノ陞等ニ關シテハ其ノ他官廳ニ於ケル前官官等在職年數及轉任又ハ退官現時ノ臺灣總督府奏任文官官等在職年數ヲ通算ス

○臺灣總督府判任官他官廳ニ轉任又ハ再任スルトキノ俸給明治三十九年五月勅令第二百二十九號

朕本年勅令第二百二十九號ニ依リ増給任用セラレタル臺灣總督府判任文官並ニ同總督府ニ於テ判任文官ニ初任シタル者他官廳ノ判任文官ニ轉任又ハ再任スルトキノ俸給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

本年勅令第二百二十九號ニ依リ増給任用セラレタル臺灣總督府判任文官他官廳ノ判任文官ニ轉任シ又ハ退官ノ後他官廳ノ判任文官ニ再任スルトキノ俸給ハ他官廳ニ於ケル前官退官當時ノ俸給額以下トス但シ臺灣總督府判任文官在職中昇級シタル度數ニ應シ同給額ニ對シ一級若クハ數級ヲ増給スルコトヲ得

臺灣總督府ニ於テ判任文官ニ初任シタル者他官廳判任文官ニ轉任シ又ハ退官ノ後他官廳ノ判任文官ニ再任スルトキノ俸給ハ七級俸以下トス但シ同總督府在職中昇級シタル度數ニ應シ同俸給額ニ對シ一級若クハ數級ヲ増給スルコトヲ得

同

○待命外交官臺灣總督府ノ高等文官ニ兼任スルトキノ俸給明治三十年九月勅令第三百九號

朕待命外交官臺灣總督府ノ高等文官ニ兼任スルトキノ俸給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
待命外交官ニシテ臺灣總督府ノ高等文官ニ兼任スルトキハ本官ノ俸給ヲ支給セス「明治二十九年勅令第九十九號」臺灣總督府職員官等俸給令及同年勅令第百號臺灣總督府職員加俸支給規則ニ依リ臺灣總督府俸給豫算内ヨリ其ノ俸給ヲ支給スルコトヲ得

○臺灣島及澎湖島駐在海軍軍人軍屬給與規則明治三十八年十一月勅令第百六十一號

臺灣島及澎湖島駐在海軍軍人軍屬給與規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣島及澎湖島駐在海軍軍人軍屬給與規則

第一條 臺灣島及澎湖島ニ駐在スル軍人軍屬ノ給與ハ本規則ニ依ル但本規則ニ明文ナキモノハ總テ現行ノ諸條規ヲ適用ス

第二條 本規則ニ於テ俸給ト稱スルハ海軍軍人俸給令第一條及第二條ノ俸給若クハ同令第五條ノ加給額ヲ加算シタルモノ並ニ一般ノ文官俸給ヲ云フ

第三條 駐在地到著ノ日ヨリ該地出發ノ日マテ准士官以上候補生及文官ニハ俸給五分ノ一、下士以下ニハ俸給四分ノ一ヲ増給ス

第四條 駐在員ニシテ傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ臺灣島若クハ澎湖島内ニ於テ治療ヲ受クル間ハ俸給ヲ減スルコトナシ

艦船艇乗員該島内ニ於テ治療ヲ受クル間ハ前項ヲ準用ス

第五條 駐在地ニ出發スル准士官以上ノ軍人及軍屬ニハ一箇月分ノ俸給、候補生ニハ三十日分ノ俸給ヲ手當トシテ給ス出發ノ際手當ヲ受ケサル者駐在地ニ於テ准士官ニ昇進シタルトキ亦同シ但一箇年以内ニ在テ數回往復スルモ再給セズ(三十二年勅令第四百五十二號ヲ以テ本項改正)

外國旅費規則ニ依リ支度料ヲ受ケタル者一箇年以内ニ在テ其ノ派遣地ヨリ直ニ赴任スルトキハ手當金給與ノ限ニアラス

第六條 軍人軍屬ニハ海軍糧食條例第一條ノ規程ニ拘ラス糧食ヲ給ス但時宜ニ依リ現金ヲ以テ食料ヲ給スルコトヲ得其ノ金額ハ海軍大臣之ヲ定ム

軍人軍屬外ノ者ニハ糧食給與ノ必要アルトキハ前項ニ依ル

第七條 旅費ヲ給スル時其ノ間本條ノ糧食若クハ食料ヲ給セズ(三十年勅令第四百七十一號ヲ以テ本項改正)

第八條 下士卒ニ交付スル被服物品ハ海軍被服條例第一表ノ定數又ハ同條例第二表ノ交換期限ヲ變更若クハ伸縮スルコトヲ得

第九條 軍人軍屬ニハ必要ニ應ジ適宜ノ被服物品ヲ給與若クハ貸與スルコトヲ得軍人軍屬外ノ者亦同シ

第九條 臺灣島及澎湖島内ヲ旅行スル軍人軍屬ノ旅費ハ海軍内國旅費規則ニ於テ規定スル各給額ノ

外該定額ノ三倍以内ヲ増給スルコトヲ得艦船乗員ニシテ該島内ヲ旅行スルトキモ亦之ニ準ス(三十二年勅令第四百七十一號及三十二年勅令第四百七十五號ヲ以テ次項トモ改正)

第十條 文官ニシテ滿三年以上在勤ノ者廢官諭旨退官若クハ非職ト爲リ三十日以内ニ該地出發歸郷スルトキハ前官若クハ本官相當ノ旅費ヲ支給ス但シ本項ノ旅費ハ本人出發ノ際前金渡ト爲シ支給スルコトヲ得

第十一條 軍人軍屬傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ其ノ治療費ハ總テ官給トス軍人軍屬外ノ者ト雖時宜ニ依リ官給スルコトヲ得

第十二條 軍人軍屬死亡スルトキハ其ノ埋葬若クハ遺物ノ輸送ニ係ル諸費ハ總テ官費トス但時宜ニ依リ其ノ遺骸モ亦官費輸送スルコトヲ得

第十三條 軍人軍屬外ノ者ト雖官ニ於テ埋葬若クハ遺物ノ輸送ヲ要スルトキハ前項ニ依ル

第十四條 准士官以上候補生及文官並ニ外宿下士卒ニハ宿舍ヲ貸與ス但時宜ニ依リ宿舍料ヲ給スルコトヲ得(三十二年勅令第四百四十四號ヲ以テ各取トモ改正)

第十五條 宿舍料ノ金額ハ海軍大臣之ヲ定ム

第十六條 本條第一項ニ依リ下士卒ニ宿舍ヲ貸與シ若クハ宿舍料ヲ給スルトキハ海軍下士卒手當金規則第一條ノ手當金ヲ給セズ

第十七條 軍人軍屬ニ要スル筆紙墨文具等ハ總テ現品ヲ以テ給與若クハ貸與ス軍人軍屬外ノ者ト雖給與若クハ貸與ノ必要アルトキ亦同シ

第十八條 軍人軍屬駐在中ハ其ノ俸給ヲ家族ニ下渡スルコトヲ得(三十二年勅令第四百五十二號ヲ以テ改正)

第十五條 駐在スル雇員其ノ他傭役者ノ給與ハ本規則ニ準シ海軍大臣之ヲ定ム

第十六條 駐在員ニアラサルモ臺灣島若クハ澎湖島ニ往復スル軍人軍屬ノ給與ハ本規則ヲ適用ス

第十七條 本規則ニ依レル給與ノ停止、減額及本規則ノ施行細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

第十八條 本規則ハ旅順口海軍根據地ニモ適用ス但旅費ハ内地港灣出發ノ日ヨリ歸著ノ日マテ實費ヲ給ス

第十九條 本規則ハ明治二十八年十二月一日ヨリ施行ス

○臺灣島及澎湖島駐劄陸軍部隊給與規則明治二十九年三月勅令第七十號

朕臺灣島及澎湖島駐劄陸軍部隊給與規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣島及澎湖島駐劄陸軍部隊給與規則

第一條 臺灣島及澎湖島ニ駐劄スル陸軍部隊及軍人軍屬ノ給與ハ本規則ニ依ル但本規則ニ明文ナキモノハ陸軍給與令ノ規程ヲ適用ス

第二條 内地ニ於テ經理ヲ委任セラレタル軍隊ニシテ本規則ニ依リ給與ヲ受クルトキハ其ノ期間委任經理ニ屬スル給與ヲ停止ス

第三條 本規則ニ於テ俸給ニ稱スルハ陸軍給與令第一表ノ俸給ニ職務俸若クハ特別俸、上級ノ職務

心得勤加給俸ヲ加算シタルモノハ給料ニ稱スルハ同令第三表甲ノ給料ニ加俸憲兵通譯加俸及第四條ノ加俸ヲ除ク加算シタルモノ及諸生徒手当金ヲ云フ(三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ修正シ但舊ヲ即除ス)

第四條 短期下士及兵卒ニシテ隊附ノ者ニハ月額二圓以内ノ在隊加俸ヲ憲兵ニシテ服役三箇年以上ノ者ニハ月額十圓以内ノ年功加俸ヲ給ス其ノ階級又ハ年數ニ應スル區分ハ陸軍大臣之ヲ定ム(三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ改正)

第五條 駐劄地ニ向ヒ内地ヲ出發スル准士官以上外宿加俸ヲ受クル下士以下及文官ニハ旅行手當トシテ其ノ俸給若クハ給料ノ一箇月分以内ヲ給ス其ノ定額ハ陸軍大臣之ヲ定ム但シ一箇年以内數回往復スルコトアルモ再給スルノ限ニ在ラス(三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ改正)

第六條 駐劄地ニ出發ノ者ハ其ノ出發ノ日ヨリ歸著ノ日迄准士官以上下士及文官ニハ俸給若ハ給料ノ五分ノ一兵卒ニハ給料四分ノ一ヲ増給ス(三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ改正)

第七條 軍人軍屬ノ糧食ハ現品ヲ給ス但シ實際ノ便宜ヲ測リ食料ヲ給スルコトヲ得(三十一年勅令第二十八號ヲ以テ改正)

各隊所屬ノ下士以下糧食ノ内精米ハ定量ヲ副食物ハ定額金ヲ該隊ニ交付シ隊長ニ其ノ經理ヲ委任スルコトヲ得(三十一年勅令第三百三十一號ヲ以テ次項トモ改)

軍人軍屬外ノ者ニシテ糧食給與ノ必要アルトキハ適宜現品ヲ給スルコトヲ得但各隊所屬ノ者ニ在テハ前項ニ準ス

第八條 馬匹ノ飼料ハ總テ現品ヲ給ス(三十一年勅令第二十八號ヲ以テ改正)

定額馬糧及糞畜料ノ支給ハ第六條ノ増給ヲ受クル期間之ヲ停止ス但シ裝蹄其ノ他器具ノ保續等ハ該期間官費トス(三十二年勅令第二百二十)

第九條 准士官以上並高等文官ニハ廠舎及必要ナル家具ヲ貸與スルコトヲ得(三十二年勅令第二百二十八號ヲ以テ改正三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ改正)

第十條 食料ノ定額及其ノ支給スヘキ者ノ種別、副食物ニ對スル定額金、現品ノ定量、家具ノ種類ハ陸軍大臣之ヲ定ム(三十一年勅令第二十八號ヲ以テ改正)

第十一條 下士(被服自辨者ヲ除ク)以下ノ被服ハ現品ヲ以テ給ス(三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ改正) 軍人軍屬ニハ必要ニ應シ特種ノ被服ヲ給與シ若ハ貸與スルコトヲ得

第十二條 前條被服ノ種類及員數等ハ陸軍大臣之ヲ定ム(三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ改正)

第十三條 上長官以上ノ自馬廢斃ニ至リタルトキハ駐劄中代馬ヲ貸與ス

第十四條 上長官以上駐劄地ニ於テ昇進轉職等ニ依リ要スル馬匹ハ駐劄中貸與ス 駐劄地ニ於テ上長官ニ昇進シ若クハ上長官ノ職務心得勤ヲ命セラレタルニ依リ要スル馬匹ハ前項ニ同シ

陸軍給與令第四十三條ノ馬匹手當ハ内地ニ歸著ノ上支給ス(三十二年勅令第二百二十四號ヲ以テ改正) 士官ノ馬匹ハ之ヲ貸與ス(三十年勅令第五十四號ヲ以テ改正)

第十六條 (三十二年勅令第二百二十四號ヲ以テ改正) 傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル軍人軍屬ノ藥餌ハ總テ官給トス軍人軍屬外ト雖時宜ニ依

軍人軍屬ノ官給トス

第十八條 軍人軍屬死亡スルトキハ其ノ埋葬若クハ遺骸遺物輸送ニ係ル諸費ハ官費トス軍人軍屬外ト雖官ニ於テ埋葬若クハ遺骸遺物輸送ヲ要スルトキ亦同シ

第十九條 駐劄部隊ニ要スル筆紙墨文具其ノ他消耗品等ハ總テ現品ヲ給ス

第二十條 駐劄部隊ニ屬スル雇員其ノ他備役者ノ給與ハ本規則ニ準シ陸軍大臣之ヲ定ム

第二十一條 駐劄部隊ニ屬スル者ニアラサルモ駐劄地ニ往復スル軍人軍屬ノ給與ハ本規則ヲ適用ス 但シ第六條ノ増給ハ給セス(三十二年勅令第四百四十五號ヲ以テ改正)

第二十二條 本規則ニ依レル給與ノ停止減額及本規則ノ施行細則ハ陸軍大臣之ヲ定ム

第二十三條 本規則ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令(明治三十二年八月勅令第三百七十號) 沿革略記 明治二十九年五月勅令第三百七十九號ヲ以テ臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令ヲ定ム●三十一年七月勅令第三百七十四號ヲ以テ改正●三十二年八月勅令第三百七十號ヲ以テ改正

臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令 第一條 判官檢察官ノ官等ハ高等官一等乃至八等トシ其ノ年俸ハ別表ニ依ル

第二條 判官檢察官ノ各職ニ付其ノ專任定員及俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

覆審法院長一人 一級俸乃至七級俸

覆審法院部長一人 一級俸乃至七級俸

覆審法院判官六人 七級俸乃至十級俸

覆審法院檢察官長一人 中級俸乃至一級俸

覆審法院檢察官二人 七級俸乃至十級俸

地方法院長三人 一級俸乃至七級俸

地方法院判官三十一人 八級俸以下

地方法院檢察官長三人 二級俸乃至八級俸

地方法院檢察官八人 八級俸以下

第三條 通譯ハ各院ヲ通シテ五十人トス

第四條 通譯ハ各院ヲ通シテ五十人トス

第五條 覆審法院判官ノ内二人ハ四級俸迄ヲ給スルコトヲ得

第六條 覆審法院檢察官ノ中一人ハ二級俸迄ヲ給スルコトヲ得

第七條 地方法院判官ノ中七人ハ七級俸ヲ給スルコトヲ得

第八條 地方法院檢察官ノ中三人ハ七級俸ヲ給スルコトヲ得

第九條 覆審法院長タル判官ノ官等ハ當分ノ内高等官三等ト爲スコトヲ得此ノ場合ノ俸給ハ下給俸トス

第十條 本令ニ規定セザルモノハ臺灣總督府職員官等俸給令ニ依ル

第十一條 本令施行ノ際別ニ辭令ヲ交付セザル者ハ現ニ受クル俸給額相當ノ俸給ヲ給セラレルモノトス

(別表)

| 年俸 | 勅任 | | 奏任 | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 上級中級 | 下級 | 一級 | 二級 | 三級 | 四級 | 五級 | 六級 | 七級 | 八級 | 九級 | 十級 | 十一級 | 十二級 | 十三級 |
| 四千四百圓 | 三千五百圓 | 三千四百圓 | 三千三百圓 | 三千二百圓 | 三千一百圓 | 三千圓 | 二千九百圓 | 二千八百圓 | 二千七百圓 | 二千六百圓 | 二千五百圓 | 二千四百圓 | 二千三百圓 | 二千二百圓 | 二千一百圓 |

○臺灣總督府法院奏任通譯ノ官等俸給明治三十一年七月
朕臺灣總督府法院奏任通譯ノ官等俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臺灣總督府法院奏任通譯ノ官等ハ高等官七等乃至九等トシ其ノ年俸ハ左ノ如シ

- 一級 千圓
- 二級 九百圓
- 三級 八百圓
- 四級 七百圓

五級 六百圓

○臺灣總督府法院判任通譯ノ俸給支給方明治三十一年七月勅令第百六十六號
朕臺灣總督府法院判任通譯ノ俸給支給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臺灣總督府法院判任通譯ハ其ノ判任官ニ初任スル場合ナルト再任スル場合ナルトニ拘ハラズ臺
灣總督府職員官等俸給令中判任官俸給表二級俸迄ヲ支給スルコトヲ得

●任免 懲戒

○臺灣總督府囑託員及雇員使用並技師技手俸給支出方明治二十九年三月勅令第百三號
朕囑託員及雇員使用並技師技手俸給支出ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第十條 臺灣總督ハ俸給豫算定額内ニ於テ適宜囑託員ヲ使用スルコトヲ得
第二條 臺灣總督ハ臨時ノ需要アル場合ニ於テ定員外ニ技師技手ヲ任用シ臺灣事業費ヨリ其ノ俸給
ヲ支出スルコトヲ得

○臺灣總督府警部長其他職員任用方明治三十一年八月勅令第百九十二號
朕臺灣總督府警部長其ノ他職員任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
左ニ掛ケル臺灣總督府職員ハ五箇年以上官務ニ従事シ現ニ判任官ニ擬任以上ノ官職ニ在ル者ニ限リ
試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

警部長

辨務署長

稅務官

典獄

一等郵便電信局長

○臺灣總督府警部監獄書記看守長特別任用方明治三十三年一月勅令第百十四號

朕臺灣總督府警部監獄書記看守長特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
警部監獄書記看守長特別任用令ハ臺灣總督府警部監獄書記看守長ノ任用ニ之ヲ適用ス但シ考査及試
驗ニ關スル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

○臺灣總督府文官特別任用令ニ依リ任用セラレタル文官ノ同一官職ニ限リ轉任方明治三十三年一月勅令第百十五號

第二十八條

臺灣總督府文官特別任用令ニ依リ任用セラレタル文官ノ同一官職ニ限リ轉任方

千二百七十五

千二百七十四

朕明治二十九年勅令第三百三號ニ依リテ任用セラレタル文官ノ同一官職ニ限リ轉任スルヲ得ルノ件ノ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十九年勅令第三百三號臺灣總督府文官特別任用令ニ依リ任用セラレタル警部長、辨務署長、稅務官、典獄、一等郵便電信局長及警部、監獄書記、看守長ニシテ引續キ其ノ官職ニ在ル者ハ各其ノ同一官職ニ限リ轉任スルコトヲ得

○臺灣總督府判任職員任用方明治三十一年八月勅令第三百九十三號

朕臺灣總督府判任職員任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府判任職員ハ屬警部監獄書記及守長ヲ除クノ外當分ノ内文官任用令ノ規程ニ拘ラス之ヲ任用スルコトヲ得(三十三年勅令第十三號ヲ以テ屬ノ下十字ヲ追加ス)

○臺灣總督府師範學校長特別任用方明治三十二年二月勅令第九十九號

朕臺灣總督府師範學校長特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ學位若ハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シタル者又ハ三箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シ月額四十圓以上ノ

俸給ヲ受クル判任官及判任官待遇ニ限リ試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ハ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

○臺灣總督府國語學校長任用方明治三十三年七月勅令第二百九十二號

朕國語顧問ノ諮詢ヲ經テ臺灣總督府國語學校長任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府國語學校長ハ學位若ハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シタル者又ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者ニシテ一箇年以上引續キ月額七十五圓以上ノ俸給ヲ受ケ現ニ奏任官若ハ奏任官待遇ノ職ニ在ル者ニ限リ試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

○臺灣總督府國語學校舍監任用方明治三十三年七月勅令第三百九號

朕國語顧問ノ諮詢ヲ經テ臺灣總督府國語學校舍監任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府國語學校舍監ハ特別任用ノ規定ニ依リ臺灣總督府高等行政官タル者、一箇年以上奏任教官若ハ奏任官待遇ノ教職ニ在ル者又ハ三箇年以上判任教官若ハ判任官待遇ノ教職ニ在ル者ニ限リ試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

○臺灣總督府警察官及司獄官練習所舍監任用方明治三十三年七月勅令第三百十號
朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ臺灣總督府警察官及司獄官練習所舍監任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府警察官及司獄官練習所舍監ハ特別任用ノ規定ニ依リ臺灣總督府高等行政官タル者又ハ三箇年以上警察若ハ監獄ノ事務ニ從事シ現ニ判任官四級俸以上ノ官職ニ在ル者ニ限り試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

○臺灣總督府海防事務官特別任用方明治三十三年六月勅令第三百四十八號
朕臺灣總督府海防事務官特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府海防事務官ハ滿三年以上臺灣總督府海防事務官ノ事務ニ從事シ現ニ判任官三級俸以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限り試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

附則(三十三年勅令第三百四號)號ヲ以テ附則ヲ改正ス

本令施行ノ日ヨリ三箇年間ニ限り樟腦事務ニ關シ經驗アル者ニシテ現ニ判任官五級俸以上ノ官職ニ在ル者ニ試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ臺灣總督府海防事務官ニ任用スルコトヲ得

臺灣樟腦局支局長タルヘキ臺灣樟腦局事務官ハ當分ノ内支局所在地ノ辨務署長ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

○臺灣總督府海港檢疫官特別任用方明治三十三年三月勅令第三百二十號
朕臺灣總督府海港檢疫官特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
三箇年以上衛生事務ニ從事シ現ニ判任官四級俸以上ノ官職ニ在ル者ニ限り試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ臺灣總督府海港檢疫官ニ任用スルコトヲ得

○臨時臺灣土地調查局職員任用方明治三十一年八月勅令第三百三號
朕臨時臺灣土地調查局職員任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臨時臺灣土地調查局職員ハ當分ノ内文官任用令ノ規定ニ拘ラス之ヲ任用スルコトヲ得

○臺灣總督府鐵道部事務官特別任用令明治三十三年十一月勅令第三百二十八號
朕臺灣總督府鐵道部事務官特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臺灣總督府鐵道部事務官特別任用令

臺灣總督府鐵道部事務官ハ左ニ掲之ル者ノ中ヨリ文官高等試験委員ノ銜ヲ經テ任用スルコトヲ得

- 一 鐵道ニ關スル技師接手又ハ滿三年以上鐵道事務ニ關スル判任官ニ在職シタル者又ハ滿一年以上鐵道事務ニ從事シ現ニ高等官ニ在職スル者
- 二 滿三年以上會計事務ニ從事シ現ニ判任官三級俸以上ノ俸給ヲ受クル者

○臺灣總督府海軍幕僚附任文官任用及俸給 明治三十年十月勅令第三百九十一號

臺灣總督府海軍幕僚附任文官ノ任用及俸給等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督府海軍幕僚附任文官ハ「明治二十六年勅令第八十三號文官任用令」ノ規程ニ依ラス任用スルコトヲ得

前項ニ依リ任用シタル者ハ他ニ轉勤スルコトヲ得

第二條 「海軍幕僚附任文官」ハ「明治二十九年勅令第二百二十九號」及同年勅令第二百三十號ニ於テ臺灣總督府判任文官ト同視スルシ臺灣總督府判任文官ヨリ海軍幕僚附任文官ニ轉任若ハ再任シ又ハ海軍幕僚附任文官ヨリ臺灣總督府判任文官ニ轉任若ハ再任スル場合ニ於ケル俸給ハ前官ノ俸給額以下トス

第三條 海軍幕僚附任文官他ニ轉勤スル場合ニ於ケル俸給ニ關シテハ臺灣總督府判任文官他官廳ヨリ判任文官ニ轉任ノ例ニ依リ明治二十九年勅令第二百三十號ヲ適用ス

○臺灣總督府法院檢察官任用方 明治三十二年六月勅令第三百號

朕臺灣總督府法院檢察官任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府法院檢察官ハ判事又ハ檢事タル資格ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ任用ス

○臺灣總督府法院判官懲戒令 明治三十一年七月勅令第十八號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣總督府法院判官懲戒令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣總督府法院判官懲戒令

第一條 臺灣總督府法院判官ニシテ職務上ノ義務ニ違背シタルトキ又ハ官職上ノ威信ヲ失フヘキ所爲アリタルトキハ之ヲ懲戒ス

懲戒ハ懲戒委員會ノ決議ヲ以テスヘシ

第二條 懲罰ハ左ノ如シ

- 一 罷責
- 二 罰俸
- 三 免官

第三條 懲戒委員會ハ各所犯ノ輕重ニ從ヒ前條中何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤヲ定ム

懲戒委員會ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 罰俸ハ一月以上一年以下俸給月額三分ノ一以内ヲ減スルモノトス

第五條 懲戒委員ハ委員長一人委員四人及豫備委員三人トシ臺灣總督府法院判官ノ中ニ就キ毎年豫

メ臺灣總督之ヲ命ス

委員長ハ複審法院長ヲ以テ之ニ充ツ

委員長事故アルトキハ委員中上席判官之ヲ代理ス

豫備委員ハ委員中事故アルトキ代テ委員トナル其代理ノ順序ハ委員長豫メ之ヲ定ム

第六條 懲戒委員長ハ臺灣總督府法院書記ノ中ヨリ懲戒委員會書記ヲ命ス

第七條 懲戒委員ノ忌避回避ニ付テハ刑事裁判ニ關スル規程ヲ準用ス

第八條 懲戒委員會ハ臺灣總督ノ申立ニ依リ之ヲ開始ス但複審法院檢察官長ノ意見ヲ聽クヘシ

第九條 懲戒委員會ニ於テ下調ヲ必要ガリト決定スルトキハ委員長ハ委員ノ一人又ハ數人ニ下調ヲ

命スヘシ

第十條 下調ノ命ヲ受ケタル委員ハ必要ナル證據ヲ集取シ且被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコ

トヲ得

證人ハ刑事裁判ニ關スル手續ニ依リ之ヲ訊問スヘシ

第十一條 下調ノ命ヲ受ケタル委員ハ證據ヲ集取ヲ便宜他ノ法院判官ニ囑託スルコトヲ得

第十二條 懲戒委員會ハ懲戒スヘキ理由ナシト認ムルトキハ直ニ免訴ノ決定ヲ爲スヘシ

第十三條 懲戒委員會ハ懲戒スヘキ理由アリト認ムルトキハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ被告ニ示シ期

日ヲ定メテ之ニ對スル辯明書ヲ差出サシムヘシ

前項ニ依リ被告辯明書ヲ差出シタルトキハ懲戒委員會ハ一作書類ニ就キ評議決定スヘシ

第十四條 決定書ハ三日以内ニ被告ニ送達スヘシ

第十五條 懲戒委員會ノ決定アリタルトキハ委員長ハ決定書ノ原本ヲ添ヘ之ヲ臺灣總督ニ報告スヘシ

臺灣總督ハ前項ノ報告ニ依リ其執行ノ手續ヲ爲スヘシ

第十六條 職務停止及懲戒裁判手續下ノ刑事裁判手續ノ關係ニ付テハ刑事懲戒法中第五章及第六章

ノ規定ヲ準用ス

第十七條 懲戒手續ノ費用ニ付テハ刑事裁判ノ費用ニ關スル規定ヲ準用ス

第十八條 本令施行ノ爲必要ナル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

附 則

第十九條 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第二十條 本令ハ本令施行前ニ於ケル所爲ニモ適用ス

○臺灣總督府稅關監吏ノ賞罰 勅令第三十三號 明治三十三年二月

朕臺灣總督府稅關監吏ノ賞罰ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府稅關監吏ノ賞罰ハ稅關監吏賞罰規則ニ依ル但シ大藏大臣ニ屬スル職務ハ臺灣總督之ヲ行

●恩給、救恤、賞與、

○臺灣ニ在勤スル官吏ノ恩給及遺族扶助料明治三十三年三月法律第七十五號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣ニ在勤スル官吏ノ恩給及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ三箇年以上引續キ在職シタル者ニハ官吏恩給法並官吏遺族扶助法ノ在官年數計算ニ於テ其ノ在職一箇月ニ對シ半箇月ヲ加算ス但シ從軍年ノ加算アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ依リ加算シタル年月數ハ軍人恩給法ニ於テ文官服務中ノ日數中ニ算入ス

第一項ノ加算ハ臺灣ニ到著シタル日ニ始マル

第二條 臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ三箇年以上引續キ在職シタル者臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リ官吏恩給法第三條第二號ニ準スヘキ者ニハ恩給及增加恩給ヲ給ス

前項ノ疾病ニ罹リ之カ爲退官シタル後重症ニ趨キタルトキハ官吏恩給法第六條ノ規定ニ準シ相當ノ恩給ヲ給ス

第三條 臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リ在官中死去シタルトキ又ハ之カ爲退官シタル後其ノ疾病ノ爲死去シタルトキハ左ノ區別ニ從ヒ官吏遺族扶助法ノ規定

ニ依リ其ノ遺族ニ扶助料ヲ給ス

一 第一條ノ在職三箇年未滿ナルトキハ十五箇年在官シタル者ト同視シ其ノ受クヘキ恩給年額ノ三分ノ一

二 第一條ノ在職三箇年以上ナルトキハ其ノ受クヘキ恩給年額ノ三分ノ二

第四條 前二條ノ風土病及流行病ノ種類ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

第五條 本法ノ規定ハ本法施行ノ際現ニ臺灣ニ在勤スル者一關シテハ本法施行前ヨリノ在職年月數ニモ之ヲ適用ス

附則

本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣ニ服役スル軍人ノ恩給及遺族扶助料明治三十三年三月法律第七十六號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣ニ服役スル軍人ノ恩給及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣ニ於テ服役スル軍人ニシテ六箇月以上引續キ服役シタル者ニハ軍人恩給法ノ服役年數計算ニ於テ其ノ服役一箇月ニ對シ現役外ノ年月トシ半箇月ヲ加算ス但シ從軍年又ハ外國航海ノ加算アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ依リ加算シタル年月數ハ官吏恩給法ニ於テ在官年數中ニ算入ス

第一項ノ加算ハ臺灣ニ到着シタル日ニ始マル

第二條 臺灣ニ於テ服役スル軍人ニシテ六箇月以上引續キ服役シタル者臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リ軍人恩給法第四條第三號ニ準スヘキ者ニハ退職恩給免除恩給及增加恩給ヲ給ス其ノ之ヨリ輕症ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ニハ同法第十四條第二號ニ準シ賑恤金ヲ給ス

前項ノ疾病ニ罹リ之ヲ爲現役ヲ離レタル後重症ニ越キタル者ニハ軍人恩給法第十一條ノ規定ニ準シ相當ノ恩給ヲ給ス

第三條 臺灣ニ於テ服役スル軍人臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リ現役中死去シタルトキ又ハ之ヲ爲現役ヲ離レタル後其ノ疾病ノ爲死去シタルトキハ左ノ區別ニ從ヒ軍人恩給法ノ規定ニ依リ其ノ遺族ニ扶助料ヲ給ス

一 第一條ノ服役六箇月未滿ナルトキハ第五號表ノ半額

二 第一條ノ服役六箇月以上ナルトキハ第五號表ノ額

第四條 前二條ノ風土病及流行病ノ種類ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

第五條 本法第二條及第三條ノ規定ハ本法施行ノ際現ニ臺灣ニ服役スル者ニ關シテハ本法施行前ヨリノ服役月數ニモ之ヲ適用ス

附則

本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣ニ在勤スル官吏及軍人ノ恩給及遺族扶助料第四條ニ依ル風土病及流行病ノ種類指定明治三十三年四月勅令第四百七十三號

朕明治三十三年法律第七十五號及同年法律第七十六號ニ依ル風土病流行病ノ種類指定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年法律第七十五號第四條及同年法律第七十六號第四條ニ依ル風土病及流行病ハ左ノ十五種トス

- | | |
|-------|----------|
| 麻刺利亞 | 脚氣 |
| 疥癬 | 瘧疾 |
| 瘋疹室扶私 | 猩紅熱 |
| 實布埤利亞 | 回蹄熱 |
| 虎列刺 | 腸室扶私 |
| 赤痢 | 霍亂 |
| 流行性感胃 | 流行性腦脊髓膜炎 |

○臺灣ニ於テ地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員ノ退隱料及遺族扶助料明治三十三年三月法律第七十七號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テ臺灣ニ於テ地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員ノ退隱料

第二十八類 臺灣ニ於テ地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員ノ退隱料及遺族扶助料

及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員及其ノ遺族ハ本法ノ規定ニ依リ退隱料及遺族扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 明治二十三年法律第九十一號及之ニ基ツキテ發シタル勅令ハ前條ノ學校職員及其ノ遺族ニ之ヲ準用ス但シ同法中府縣知事ノ職務ハ 知事又 廳長、文部大臣ノ職務ハ臺灣總督之ヲ行ヒ同法第十條中府縣郡市町村ノ負擔トナルヘキ經費ハ地方稅ヲ以テ之ヲ支辨ス

第三條 第一條ノ學校職員ノ臺灣ニ於ケル在職年數ハ臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クル者ニ準シテ之ヲ計算ス

第一條ノ學校職員臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リタル場合ニ關シテハ臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クル者ニ準シテ之ヲ計算ス

第一條ノ學校職員前項ニ該當シ之カ爲死亡シタル者ノ遺族ハ臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クル者ノ遺族ニ準シ扶助料ヲ給ス

第四條 明治二十九年法律第十三號及之ニ基ツキテ發シタル勅令ハ第一條ノ學校職員ニ關シテ之ヲ準用ス

第五條 臺灣人ニシテ地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員及其ノ遺族ハ第二條及第四條ノ規定ニ依リ退隱料及遺族扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

附則

本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府所屬雇員ニ官吏恩給法及官吏遺族扶助法適用方明治二十九年四月法律第七十八號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣總督府所屬雇員ニ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ヲ適用スルノ法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督府條例施行前臺灣總督府所屬ノ雇員ニシテ官吏ノ職務ニ從事シタル者ハ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ノ關係ニ於テハ文官判任以上ノ者ト同視シテ處分ス但シ同雇員タリシ年月數ニ對シテハ官吏恩給法第十二條第二項ノ一及官吏遺族扶助法第二條ヲ適用セス

第二條 現ニ恩給ヲ受クル者ニシテ第一條ニ該當スルトキハ同雇員トシテ勤務シタル年月數ハ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ニ定ムル在官年數ニ通算セス又同雇員トシテ受ケタル俸給額ノ爲ニ既定ノ恩給額ニ異動ヲ及ボサス

前項ニ掲クル者官吏恩給法第三條ニ該當スル場合ニハ雇員俸給額ニ依リ算出シタル増加恩給ヲ給ス

第三條 現ニ恩給ヲ受クル者ニシテ第一條ニ掲クル雇員タル者官吏遺族扶助法第四條第二項ニ該當スルトキハ雇員ノ俸給額ニ依リ算出シタル扶助料ヲ其ノ遺族ニ給ス

○臺灣總督府三等郵便電信局長二等郵便局長及三等電信局長俸給退官賜金及死亡賜金令明治三十三年六月十九號

勅令第百十九號

第二十八類

臺灣總督府所屬雇員ニ官吏恩給法及官吏遺族扶助法適用方
臺灣總督府三等郵便電信局長及三等郵便局長三等電信局長俸給退官賜金及死亡賜金令

朕臺灣總督府三等郵便電信局長三等郵便局長及三等電信局長俸給退官賜金及死亡賜金令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府三等郵便電信局長三等郵便局長及三等電信局長俸給退官賜金及死亡賜金令

第一條 臺灣總督府三等郵便電信局長三等郵便局長及三等電信局長ハ俸給ヲ給セス年額六百圓以下ノ手當金ヲ給與ス其ノ給與額ハ臺灣總督府之ヲ定ム(三十二年勅令第三百五十三號ヲ以テ改正)

第二條 臺灣總督府三等郵便電信局長三等郵便局長及三等電信局長在官中死亡シタルトキ若ハ廢官廢局ノトキ又ハ滿三年以上勤續シタル者退官シタルトキハ其ノ勤勞ニ依リ三百圓以内ノ金額ヲ給與ス但シ刑事裁判又ハ懲戒處分ニ依リ其ノ官ヲ失ヒタル者ニハ之ヲ給與セズ

附則

第三條 本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

第四條 臺灣總督府三等郵便電信局長三等郵便局長及三等電信局長ニハ明治二十九年勅令第三百號ヲ適用セシム

○

臺灣總督府所屬シテ巡查ニ該當スル職務ニ従事シタル者ニ巡查看守給助例及明治三十二年第六十六號達適用方明治二十九年四月勅令第三百三十二號ニ依リ該當スル職務ニ従事シタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府所屬シテ巡查ニ該當スル職務ニ従事シタル者ハ巡查ト同視シ之ニ巡查看守給助例及明治十五年第六十六號達ヲ適用ス但雇員タリシ年月數ニ對シテハ同例第九條ノ一ヲ適用セシム

○

臺灣總督府雇員備員死沒傷痍疾病手當規則明治二十九年五月勅令第三百八十八號

臺灣總督府雇員備員死沒傷痍疾病手當規則

第一條 雇員及備員ニシテ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ又ハ之ニ原因シテ死亡シタルトキハ本令ニ依リ一時限ノ手當ヲ支給ス

第二條 雇員ニハ別表甲號ノ金額ヲ支給シ備員ハ常時及臨時ノ二種ニ區別シ常時備員ニハ乙號ノ金額、臨時備員ニハ丙號ノ金額ヲ支給スルモノトス

第三條 公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキハ官費ヲ以テ之ヲ治療ス若自己ノ便宜ニ依リ之ヲ療治セントスルトキハ其ノ許可ヲ受ケタルモノニ限り別表手當ノ外其ノ治療料トシテ三十圓以内ノ金額ヲ支給ス

前項傷痍及疾病ノ場ニ於テハ指定ノ醫官若クハ主任醫員ノ診斷ニ依リ等差ヲ定メ第一等乃至第

七等ノ手當ヲ支給ス

第四條 雇員備員ニシテ死亡シタルトキハ別表ニ依リ甲祭料及遺族扶助料ヲ其ノ遺族ニ支給ス但既ニ傷痍疾病ニ關スル手當ヲ受ケタル者ノ遺族ニ對シテハ之ヲ支給セス

第五條 本令施行ノ細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

(別表)

死没傷痍疾病手當金額表

| 區別 | 死 | | 傷 | | 痍 | | 疾 | | 病 | |
|----|-----|-------|------|------|------|-----|------|------|------|------|
| | 祭料 | 遺族扶助料 | 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 等 |
| 甲號 | 二十圓 | 八十圓 | 百圓 | 九十圓 | 八十圓 | 七十圓 | 六十圓 | 五十圓 | 四十圓 | 四十圓 |
| 乙號 | 十五圓 | 六十五圓 | 七十五圓 | 六十五圓 | 六十圓 | 五十圓 | 四十五圓 | 三十五圓 | 二十五圓 | 二十五圓 |
| 丙號 | 十圓 | 五十圓 | 五十圓 | 四十圓 | 三十五圓 | 三十圓 | 二十五圓 | 二十圓 | 十五圓 | 十五圓 |

○臺灣總督府囑托員雇員及公醫手當金支給方明治三十二年二月勅令第四十號
朕臺灣總督府囑托員雇員及公醫手當金支給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府囑托員雇員及公醫ニシテ公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ従事シ爲ニ該病ニ感染シタルトキ又ハ之ニ原因シテ死亡シタルトキハ明治十九年勅令第二十三號ヲ準用シ手當金ヲ給ス
臺灣總督府囑托員及公醫ニシテ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ又ハ之ニ原因シテ死亡シタルトキハ明治二十九年勅令第百八十號ヲ準用シ手當金ヲ給ス
附則
本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○臺灣並在外陸海軍雇員備員死傷手當金給與規則明治三十年四月勅令第百四十三號
朕臺灣並在外陸海軍雇員備員死傷手當金給與規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣並在外陸海軍雇員備員死傷手當金給與規則

第一條 陸海軍雇員備員ニシテ臺灣並在外陸海軍官衙軍隊艦船ノ勤務ニ服スル者公務ニ因リ死没シ若ハ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ本令ニ依リ一時限リ別表ノ手當金ヲ給ス
第二條 死亡手當金ハ死者ノ遺族ニ給ス遺族ナキトキハ其ノ相續人ニ甲祭料ノミヲ給ス傷痍疾病ノ爲メ手當金ヲ受ケタル後之ニ原因シ死没スト雖死亡手當金ヲ給セス
第三條 傷痍疾病者ニ自己治療ヲ許可シタルトキハ別表手當金ノ外三十圓以内ノ金額ヲ支給スルコトヲ得

第三十陸軍省
令第十二號
軍省令第五號
行細則ヲ定ム

第四條 本令施行ノ細則ハ陸海軍大臣之ヲ定ム

(別表)

死致傷痍疾病手當金表

| 傷手當 | 死亡 | 陸海軍省 | | 官制部隊ニ 屬入タル 人員 | | 臨時備人 | 臨時備人 |
|----------------------------|----|----------|---|---------------------|---|----------|------|
| | | 料 | 分 | 料 | 分 | | |
| 一 兩眼ヲ盲シ若ハ二肢以上ヲ亡シタル者 | 扶 | 百二十四 | 百 | 百二十四 | 百 | 百二十四 | 百 |
| 二 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルモノ | 助 | 百三十圓 | 百 | 百三十圓 | 百 | 百三十圓 | 百 |
| 三 一肢ヲ亡シ若ハ二肢ノ用ヲ失ヒタルモノ | 料 | 百二十四 | 百 | 百二十四 | 百 | 百二十四 | 百 |
| 四 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルモノ | 料 | 百二十四 | 百 | 百二十四 | 百 | 百二十四 | 百 |
| 五 一眼ヲ盲シ若ハ一肢ノ用ヲ失ヒタルモノ | 料 | 百 | 百 | 百 | 百 | 百 | 百 |
| 六 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルモノ | 料 | 九十四 | 百 | 九十四 | 百 | 九十四 | 百 |
| 七 前項ニ比シ一層輕キモノ | 料 | 八十四乃至八十八 | 百 | 六十四乃至六十八 | 百 | 四十四乃至四十八 | 百 |

甲祭扶助療治料支給方

明治十五年太政官第六十七號達ヲ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣罹災救助基金規則

第一條 臺灣罹災救助基金ニ對シ金員ヲ寄附スル者アルトキハ其寄附ヲ受ケ前條ノ貯蓄金ニ充ツルコトヲ得

第二條 罹災救助基金貯蓄期間ヲ二十箇年度トシ毎年度貯蓄金額ハ其年度地方稅經常費豫算額ノ百分ノ五以上トス

第三條 從來義倉ニ屬スル穀類其他ノ物件ハ其見積價格ヲ以テ罹災救助基金ニ組入ルヘシ

第四條 前項ノ穀類其他ノ物件ヲ賣却シタル場合ニ於テ見積價格ニ對シ缺損ヲ生シタルトキハ地方稅又ハ其他ノ方法ヲ以テ補填ヲ爲スコトヲ要ス

第五條 罹災救助ノ爲支出スヘキ費目左ノ如シ

一 避難所費

○傳染病豫防救治ニ従事スル者ノ手當金ニ關スル件ヲ臺灣ニ施行明治三十三年七月勅令第二百九十二號
朕明治三十三年法律第三十號ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治三十三年法律第三十號ヲ臺灣ニ施行ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十二年勅令第四十號中第一項ノ規定ハ其ノ效力ヲ失フ

○

○臺灣ニ於ケル關稅及專賣規則等違反申告者ニ賞與方明治三十二年十二月勅令第四百五十五號

朕臺灣ニ於ケル關稅及專賣規則等違反申告者賞與ニ關スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣阿片令臺灣關稅規則臺灣輸出稅及出港稅規則臺灣樟腦及樟腦油專賣規則及臺灣樟腦油製造規則ニ關スル犯罪ヲ申告ニ因リ發見シタル場合ニ於テハ現ニ沒收シ若ハ稅關ニ納付シタル貨物代價ノ半額ヲ其ノ申告者ニ給與ス

附則

本令ハ明治三十二年十二月二十日ヨリ施行ス

法規提要下卷畢

明治三十三年九月十一日印刷

明治三十三年十二月五日發行

內閣書記官室記錄課

發印 神田區錦町三丁目八番地
行刷者 八尾新助

印刷所 八尾活版所
神田區錦町三丁目八番地

47+B-31

拍脚復 八臥番頭復

心湖復復復

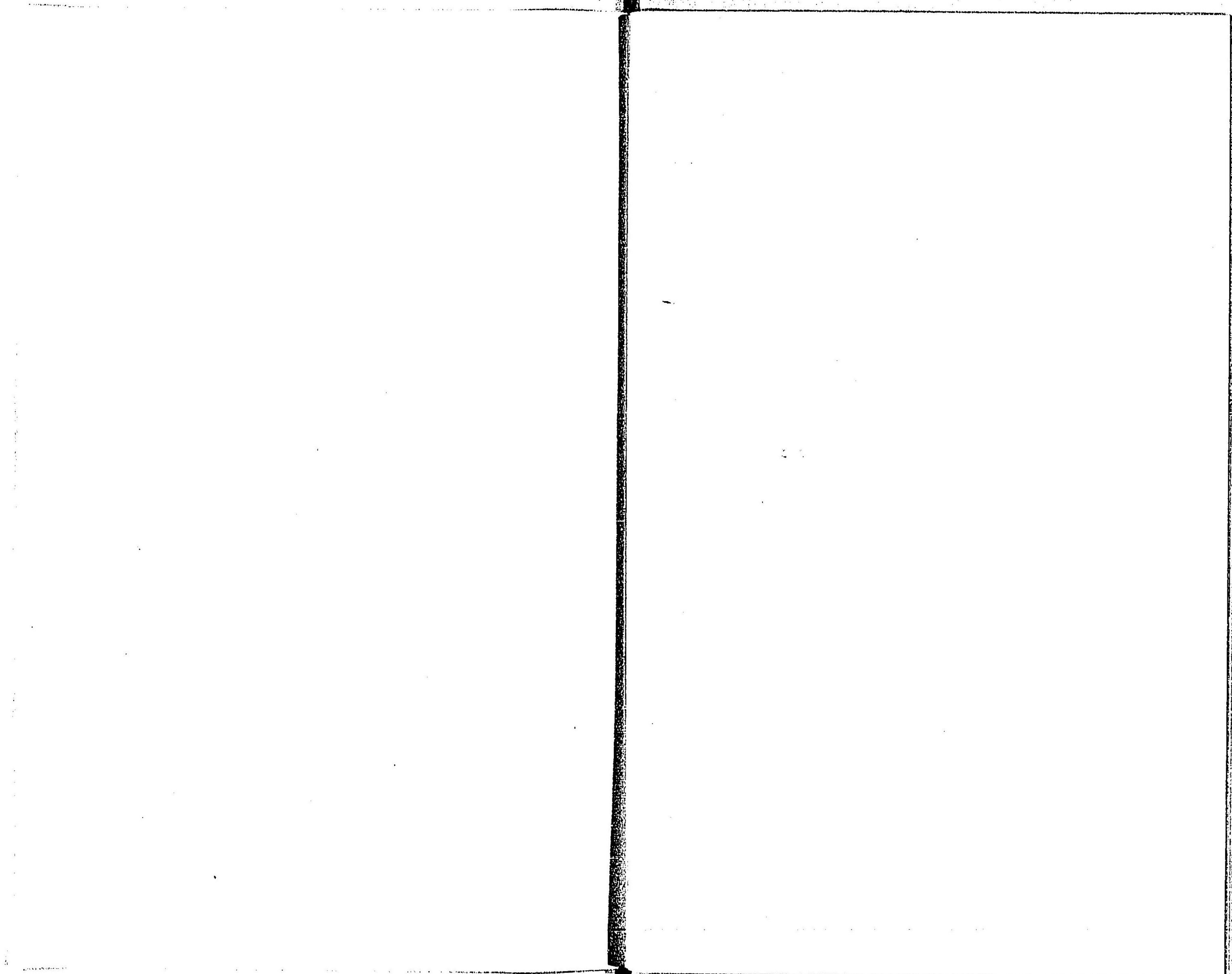
軍器 軍器 八 越 豫 復

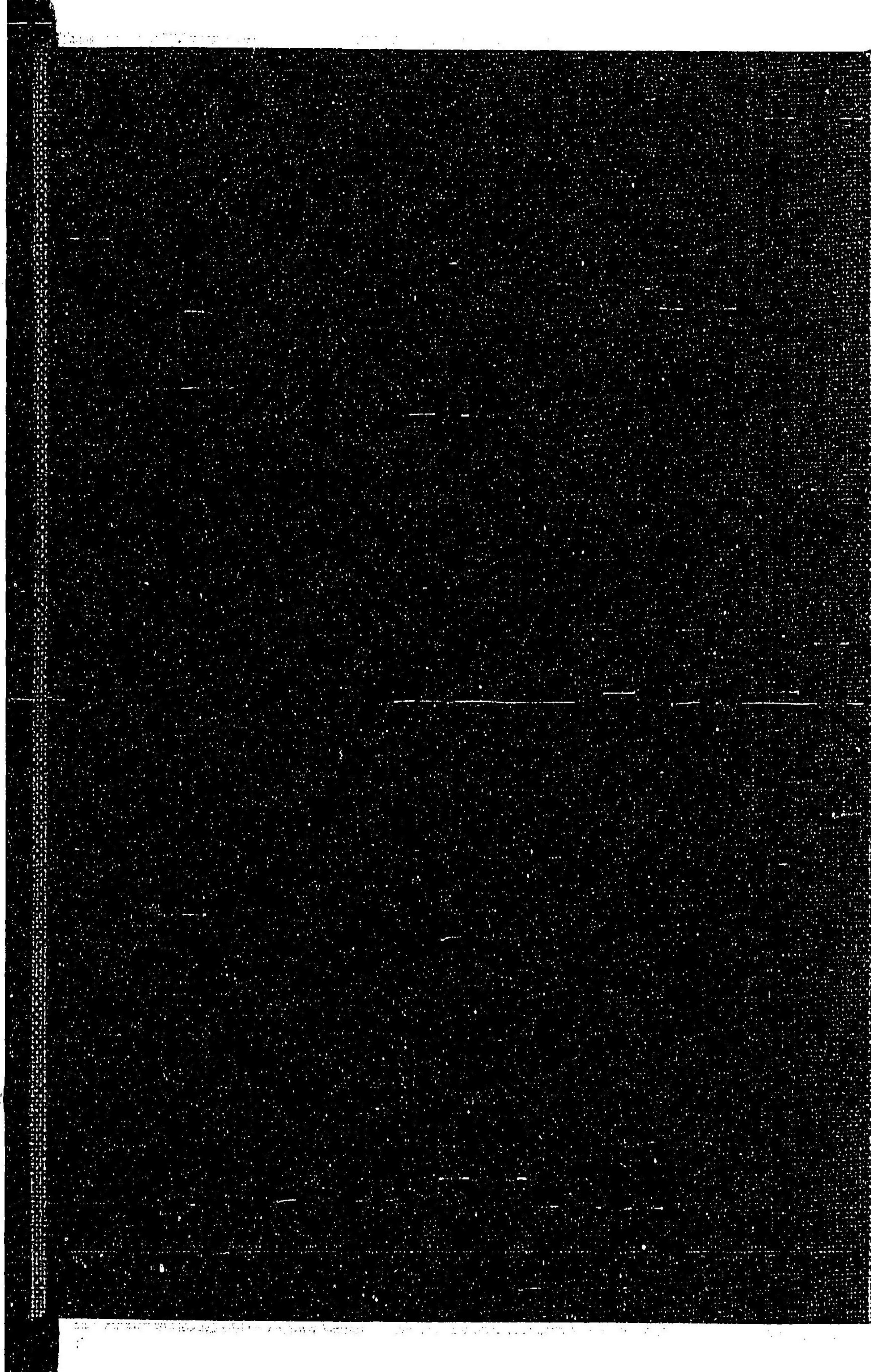
軍器 軍器 軍器 軍器

內閣書譜寶鑑續編

閱卷三十三卷生二頁正目總管

閱卷三十三卷生二頁正目總管





禁電子式複写

031113-019-9

CZ-3-09

法規提要

法制局

M18-36

BBC-0837



